気高く生きる道を選択します

http://hatagaya-saisei-univ.jp

幡ヶ谷再生大学

HATAGAYA RE-BIRTH UNIVERSITY

Hatasai Magazine Vol.7

特定非営利活動法人　幡ヶ谷再生大学復興再生部　（23生都管特第1204号）

幡ヶ谷再生大学復興再生部とは？

2006年に仲間内のサークルとして始まった幡ヶ谷再生大学
陸上部や格闘部など、あくまで自分達の人間復興として集まって活動していた。
そんな中2011年3月11日に発生した東日本大震災
日本中、世界中に大きな衝撃と悲しい爪跡を残した。
その復興支援を主な目的とし、その他の危機的な災害が起きた際も
支援出来る非営利団体としてこの度新たに復興再生部を開校する。

幡ヶ谷再生大学復興再生部　部長　TOSHI-LOW

VISION（目的）

2011年3月11日に発生した『東日本大震災』
その被害をうけてしまった地域の子供達の未来構築を軸にそれに関わる全ての復興支援を目的とし活動する事。
また、その他予期せぬ危機的事態が発生した際は状況下に応じて対応していく事。

MISSION（使命）

身体的、精神的にも被害をうけてしまった子供達への明るい未来を構築していく事。
単発的なサポートではなく、長期を見越して復興への活動のサポートをしていく事。
幡ヶ谷再生大学の定義に則り、遊び心を忘れずに人間再生と被災地の復興を行っていく事。

CLARITY（明確さ）

当団体の役員は報酬や利益は一切受けず、全てを災害の復興支援に使用する事。
あくまで直接的に行動する事を前提に行動、リサーチし、他団体、自治体とも連携しあって明確なサポートをしていく事。
活動予定、活動結果を随時報告する事。

特定非営利活動法人　幡ヶ谷再生大学復興再生部　（23生都管特第1204号）

幡ヶ谷再生大学 他学部紹介

私たち、幡ヶ谷再生大学では復興再生部以外にも学部を併設しています。あくまでも自分達以外の人間復興を軸に立ち上げたサークル活動ですので、基本概念に変わりはありません。その中で、私達の意思にご賛同頂いた方々と共にその他サークル活動も共有できたらと思っています。陸上部、及び農学部に関しては頻繁に募集を行っています。詳細はそれぞれのWebやTwitterなどをご確認ください。

陸上部

https://twitter.com/rebirth_rikujyo

格闘部

東京木曜会
TOKYO THURSDAY JU-JITSU

山岳部

HATAGAYA WANDERVOGEL

音楽部

農学部

https://twitter.com/nougakubu

読書部

手芸部

二輪部

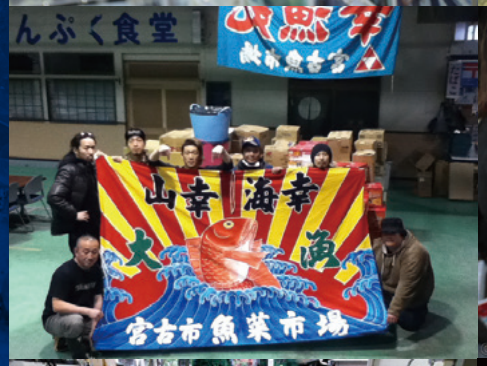
映像部

けん玉倶楽部

幡ヶ谷再生大学
けん玉倶楽部

主な活動履歴

2011	03/17~19	および水戸の仲間たちによって北茨城・いわき・高萩へ支援物資の募集と運搬（飲料水は岩手県宮古市へ）
	03/29~04/05	避難所に直接物資を届けている札幌のハードコアバンドSLANG KO氏に託すために子どもたちへのおやつを募集。BRAHMANのメンバーによる岩手県宮古市へ運搬
	05/12~22	「オペレーション米騒動」岩手県・宮城県・福島県への送る支援物資の募集。集まったお米、約10トン
	08/01~13	作戦コード「H2O」福島県南相馬市への支援物資（飲料水・お菓子・米・レトルト食品・保存食品）の募集。集まった飲料水、約25トン。「幡ヶ谷再生大学 南相馬キャンパス」LIVE前に支援物資受け入れ先の南相馬市「きっずくらぶ」へBRAHMANメンバー、スタッフ、茨城県、福島県の仲間により運搬
	11/11	NPO（特定非営利活動）法人 幡ヶ谷再生大学復興再生部（23生都管特第1204号）取得
	12/11~24	作戦コード「SMS」岩手県、宮城県、福島県への支援物資（お餅）の募集。集まったお餅、約7.5トン。茨城県、福島県の仲間によるNBC作戦の募集場所に運搬
2012	03/11	幡ヶ谷再生大学 開校
	04/12~05/11	宮城県石巻市小渕浜（牡鹿半島）にてワカメ収穫作業の生徒募集及び派遣
	04/30・06/10	「首長恐竜の親子3体像展示」イベント（6月17日～7月1日）会場になる宮城県石巻市のみなと荘園庭に残る津波漂流物やガラス片撤去と清掃・整地作業
	05/13	竜巻被害にあった茨城県つくば市北条にて瓦礫撤去作業
	06/17~7/01	宮城県石巻市のみなと荘にて「首長恐竜の親子3体像展示」イベント開催
	09/15~16	東北AIR JAM 2012　幡ヶ谷再生大学 復興再生部 ブース初出展
	09/17~11/04	宮城県石巻市「大街道子供広場作り」。全3回
2013	02/07	幡ヶ谷再生大学 読書部として宮城県石巻市立湊小学校にて全学年、1クラスずつ読み聞かせを実施
	02/25	仙台市立蒲町小学校にて、特別講師として「生きる」ということをテーマに授業を開催。未だ仮設の校舎のなか、元気で真摯な子供たちの姿は再生大メンバーにとって非常に勉強になる講義となる
	04/29	宮城県・小渕浜子供広場作りに着手
	07/07	幡ヶ谷再生大学 読書部として穀町幼稚園、ふたば保育園にて読み聞かせを実施
	08/10~11	幡ヶ谷再生大学 復興再生部　SUMMER SONIC 2013東北復興 PROJECT「音遊海岸」にブース出展
	12/05	幡ヶ谷再生大学 読書部として石巻市大原小学校全校生徒に読み聞かせ



2014	01/11	小渕浜子供広場完成(全13回)
	04/29	小渕浜子供広場お披露目会　地元の大原小の児童らによる獅子振りや空手の演武、ミュージシャンの演奏に合わせた地元の住民による歌などを披露
	05/21~06/21	BRAHMAN Tour 1080°幡ヶ谷再生大学復興再生部ブースを全会場に出展
	08/06~2015/07/05	いわき・生木葉ファームでの農作業と勉強会　1回～7回
	08/16~17	幡ヶ谷再生大学 復興再生部　SUMMER SONIC 2014東北復興 PROJECT「音遊海岸」にブース出展、大阪にも初出展
	09/09	いわき・生木葉ファームでの農作業と勉強会(放射線基礎講座1回目)2回目
	12/03	津波被害の大きかった閖上近くの仙台市東四郎丸小学校6年生の授業で「生きる」をテーマに特別講師として参加
	12/13	いわき・生木葉ファームでの農作業と勉強会（放射線基礎講座2回目）4回目
2015	03/11	幡ヶ谷再生大学映像記録「鼎の問」DVD発売
	08/09,09/14,10/25	幡ヶ谷再生大学 公開講座開催　第1,2,3回目
	09/15~2016/09/16	東日本豪雨災害・常総市支援活動第1回～第22回　大雨被害にあった茨城県常総市にて浸水した民家の泥かきや家具の運び出し等のお手伝い、若宮戸・石塚さん宅作業、浸水した米農家さんと蕎麦屋さんの片付け、近隣のお宅の土嚢撤去、お墓の泥出しや掃除、自動車工場やご自宅の泥出しや片付け
	10/03・04	ブルーベリー農家さんの畑とハウス内泥出し、整地、土嚢撤去など
	11/01	Tシャツプリント工場にて浸水したTシャツの片付け、仕分け、洗濯など(Tシャツ再生大作戦の立ち上げ)
2016	02/13~14	沖縄アサイラム(ブース出展、特別公開講座)
	02/15	辺野古、じんぶん学校、高江訪問
	04/20	幡ヶ谷再生大学 復興再生部 熊本入り
	05/01	茨城県常総市災害復興支援イベント「Dappe Rock's」にてブース出展
	05/29	常総若宮戸石塚さん宅作業FINAL
	06/02	BRAHMAN「幡ヶ谷再生大学 熊本キャンパス」@熊本NAVARO
	06/03	幡ヶ谷再生大学 読書部として、りょうさんが熊本県大津町立護川小学校と大津北小学校に読み聞かせ・同日、学長、南阿蘇避難所にて弾き語り
	06/11~	現在も進行中 熊本地震により熊本県・南阿蘇村、嘉島町、熊本市内、大津町、西原村、益城町にて瓦礫撤去、屋根のブルーシート掛け、農地や集落・通学路の草刈り、解体前納屋や倉庫片付け、古民家片付け、神社片付け、自然農の和子さんの茶摘み・草取り・田植え・種まき・稲刈り、のはら農研塾にて農作業、子供たちとお菓子作り、学校キャンプ、子供会、語りべ、などのお手伝い、語りべバスツアー、食にまつわるワークショップ、など

	07/04・05	片平里菜さん、益城町立飯野小で弾き語り・南阿蘇西小、南阿蘇の避難所で弾き語り
	09/11~2017/04/02	東日本豪雨災害・常総市支援活動第22回~24回
	09/15	ORANGE RANGE東海大熊本キャンパスにてライブ
	11/05	岩手県・大船渡FREAKS 常総Tシャツ洗濯作業
	11/12	阿蘇山噴火被害による果実園作業
	11/23	宮城県・石巻南境 正月飾り作り
	12/10	幡ヶ谷再生大学 公開講座開催 第4回
	12/31~	石井麻木さん写真展・広島県
2017	01/02-06~12/8-10	石井麻木写真展・広島県、東京都・新宿区、福島空港、宮城県、福岡県、岩手県、大阪府、宮崎県、福島県・喜多方での設営・撤去のお手伝い
	03/19・04/19	大船渡KESEN ROCK FREAKS 常総Tシャツ防音内装作業・木札取り付け作業
	05/02・04・06-07	熊本県・垂玉温泉「山口旅館」片付けのお手伝い
	05/19	福島県・猪苗代野外音楽堂 音開きソーラー設置作業
	07/01	宮城県・小渕浜みかん公園 パネル補強と側溝補修、草取り
	07/07~	現在も進行中 九州北部豪雨・福岡県朝倉市での活動 第1回~74回。九州北部で発生した集中豪雨被害により被災した、福岡県朝倉市、比良松地区、黒川地区、上須川地区で家屋や納屋、倉庫、蔵、庭の泥出し、片付け、稲刈りが円滑に進むよう田んぼの木っ端出し、梨畑と柿畑の泥出しの復旧作業。流木を「東北ライブハウス大作戦」木札に
	07/08・21・23	福島県・猪苗代野外音楽堂 装飾・設営作業・ソーラー積み込み作業・荷降ろし作業
	07/13・08/13・09/17・10/02	岩手県・岩泉町視察
	07/22	東日本豪雨災害・常総市支援活動第25回 Tシャツ工場FINAL
	08/24	熊本県・大津護川小子供会
	09/10	宮城県・小渕浜みかん公園大運動会
	10/09・11/18	台風第10号災害による岩手県・岩泉町での復旧活動 第1-2回
	10/29	福島県・猪苗代野外音楽堂 音仕舞い撤収作業
	11/12	宮城県・小渕浜みかん公園 遊具解体と公園整備
	11/19	小渕浜みかん公園終了

※石巻南境、いわき、熊本、南阿蘇、朝倉、岩泉など各地で「自主練」として継続中

主な活動履歴を掲載しています。幡ヶ谷再生大学 web にて詳細がご覧になれます。http://hatagaya-saisei-univ.jp

熊本地震支援活動

2016年4月、熊本地震発生により熊本県・大分県に甚大な爪跡を残しました。熊本県での主な復興支援活動場所となった当事者たちの当時の状況と幡ヶ谷再生大学との出会い、今後見据える未来について話していただきました。

「現在は、かけがえのないものを得たと思います」

古庄則光 ツタ子
熊本県出身
／熊本県在住

熊本県阿蘇郡南阿蘇村の袴野地区の区長を務める古庄さん。
夫妻で幡ヶ谷再生大学の南阿蘇での活動を支えていただき、
作業が終了すると毎回多くの幡再生を迎えていただいております。
熊本地震から1年半の月日は古庄さん夫婦にとって
どのような心境の変化をもたらしたのか、訊きました。

——震災直後はどういった状況だったのでしょうか。

則光さん（以下、ノ）：2016年の震災の直後は南阿蘇体育館に10日間くらい避難していて、そこから旅館「朝陽」（熊本県南阿蘇にある旅館）に4〜5カ月くらいお世話になっていました。それから仮設住宅にいます。

——幡再を知ったきっかけを教えてください。

ノ：震災から数カ月はまだ道路がガタガタで、空港までユカリさんを送る車内で幡再の活動を知りました。そのときはグリーンロードやミルクロードを通っても、空港まで最短で1時間30 分、ひどいときは2時間以上かかりました。

ツタ子さん（以下、ツ）：震災直後に旅館「朝陽」にユカリさんがいて、そのときに幡再の冊子をいただきました。「こういう活動をしているんだ…」と知りました。

でも、もらった冊子は字が小さくて読めんくて…。読むのに苦労しました（笑）

——具体的な活動はその直後になりますか？

ノ：そうですね。子供たちの通学路の草刈りが最初だったと思います。毎年7月くらいに地区の人間が地区の草刈りをするのですが、地震があって全然手入れができなかったんです。

その当時は心身ともに疲れていました。そこで長男から「幡再に手伝ってもらえるなら、年配の方は少し休ませてもらえる」と言われたのでお願いするようになりました。

——でも、現場に来られて一緒に作業されていましたよね？（笑）

ノ：そうですね（笑）。遠くから何回も来られる方もいらっしゃっているのも知っていましたし、たっちゃん（P,19）のところも、うちの長男のところもいろいろな場所を刈っていただいてね。その活動を知っていましたから、家でじっと待ってはいられませんでしたね。

——その日の現場が終わると、多くの幡再生が古庄さんのところに寄ります。どのような心境で迎えていらっしゃるのでしょうか。

ノ：夕方も来てくれますが、昼も来ますよ（笑）。作業がない日でもふらっと来てくれる方もいます。やはりうれしいものですよ。

何にしても感謝の気持ちでいっぱいです。

——その中で印象に残っている生徒はいらっしゃいますか？

ノ：幡再生の顔は皆、目に浮かんでいます。全員を同じ目で見ています。

縁もゆかりもないこの地区で知らない我々と仲良くなって、ボランティアをするってこと自体が凄いと思います。皆さまが来てくれるようになって地域も活性化した部分はあります。

帰るたびに皆様へそういった話をさせていただいております。感謝しています。

ツ：ゆうこちゃん（P,34）、塚本さん（P,45）、チカちゃん。それと太一さん（P,86）とは現在でもメールでやり取りしています。

コーヒーをこぼしてヤケドした、とかそういう方は自然と覚えていますよ（笑）

たくさん来られるときは覚えきれません…。顔と名前が一致しないんです…。

以前、ゆうこちゃんが朝来て、その日の夜に着替えて来たときに「初めてよね」って言ってしまって…「朝来たじゃないですか！」って（笑）

——震災後、失礼なボランティアさんもたくさんいた、というお話もお聞きしました。区長さんのところはそのようなことはありましたか。

ノ：私のところは来てないですね。社協のボランティアの方々も良い方ばかりが私のところに来ていただいたのだと思います。

正直、震災が起こる前まで「何がボランティアだろうか？」と思っていました。「ボランティア」という言葉というか、その存在が不思議でした。

実際、震災があって初めて「ボランティア」の方々の“ありがたみ”を知りました。

ツ：2016年の5月にボランティアに来てくださった方々へお礼状を出させていただきました。その中の1人の方から「勝手にお魚を贈らせていただきました」とお魚をいただきましたので、「申し訳ないな。こっちがお礼を言わなきゃいけないのに」と思いました。お返しにビールをお送りしました。

その年の秋に、その方にお魚のお礼にと新米をお送りしましたら、北海道から殻付きの牡蠣をいただきました。その心遣いに、頭が下がる思いです。

——今後、幡再に期待するものはありますか？

ノ：何かの形で依頼があった場合、手を差し伸べてくれたら嬉しいですね。

手を差し出された側は「何か返そう」と必ず思っているものですからね。

今度、仮設住宅を出て家を建てるんです。完成は2018年4月になります。その時はまた皆さんで遊びに来てください。駐車場は広く作っておきますよ（笑）。

——則光さんは2011年3月11日に起こった東日本大震災をどのように感じていましたか？

ノ：2016年に仙台への無料旅行に応募したら見事当選したんです。2012年にも仙台に行ったのですが、あの頃はまだ津波の跡がついている場所があったんです。5日間の旅行だったのですが、「本当に被災した場所なのか？」ってくらい復興していました。

——やはりその光景は元気をもらえましたか？

ノ：海岸沿いはまだその形跡はありますが、都市部は数年前に震災があった街とは分かりませんよね。日本の復旧技術は凄いな、と関心しています。

——熊本地震を振り返り、現在はどのような心境ですか。

ノ：これまでお金で買ったものは、すべてこの震災で失いました。

それでも現在は、かけがえのないもの得たと思います。また幡再から草刈機をいただいたこと、果物やお花の球根、太一さんから高額の義援金いただいたことなど、本当に幡再生さんの方々には感謝の気持ちで一杯です！

本当にありがとうございました！

ツ：ボランティアに来られる方々は皆良い方ばかりだなぁ、とつくづく思います。

本当に皆さまには感謝しています。

「自分の身内が被災されたように活動されている姿には心打たれるものがあった」

土田 悟
熊本県出身
／熊本県在住
旅館業

旅館「朝陽」の社長として過ごすなかで被災した土田さん。
幡ヶ谷再生大学の活動の集合場所としてだけではなく、食事からお風呂、
ときに宿泊の面倒をみていただきました。幡ヶ谷再生大学の活動への提言。
そして、被災者として震災への向き合い方を訊きました。

——幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

ユカリさんがうち（朝陽）に復興支援のため宿泊していたので、それがきっかけだったと思います。

——それはいつくらいですか？

5月の2週目くらいだったと記憶しています。

——熊本での幡再の活動を知った経緯を教えてください。

たしか、うちに避難していた方の家の片付けに行ったときだったと思います。その翌週かその週末には幡再の方々が集まっていた気がします。

——活動に参加を決めたきっかけを教えてください。

ちょこちょことお手伝いしていましたが、ゴールデンウィークに山口くん（P,14）の旅館「山口旅館」の廃棄物をうちのガレージに置く機会があって、本格的に参加したのは、それが最初だったと思います。

とてつもない量の廃棄物でしたし、友人の山口くんの旅館でしたので…。気がついたら手伝っていましたね。

——旅館「朝陽」さんには、ときに宿舎として、ときに食事処として、作業を終えて帰る幡再生に大浴場も貸していただくなど、多大なご尽力をいただいております。支援をしつづけていただける理由はあるのでしょうか？

うちが幡再の集合場所になっていたこともあると思います。

皆さんボランティアで来られているのに、自分の身内が被災されたように活動されている姿には心打たれるものがあったのは確かです。

——訪れると多くの地元の方が集まっている印象があります。それは昔からなのですか？

僕が子供のころからですね。なので、普通の光景です。いつも地元の方たちと飲んでいました。

子供のころは、酔っ払って僕の部屋で寝ているおじさんたちが普通にいました（笑）

——土田さんの部屋にですか？（笑）

起きたら、酔っ払った顔見知りのおじさんがいるのが普通でした。多いときは3〜4人が雑魚寝しているんですよ（笑）

——幡再生の中に学生当時、大浴場に通っていた方がいました。時を経て、覚えていた方はいましたか?

残念ながら覚えていないです。震災前は毎日50人、多いときは100人くらい来ていただいたので、正直覚えきれません…。

——幡再が訪れるようになって、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

山口くんの旅館が綺麗になったことですかね。旅館仲間ですし、友人ですし、そのことが何よりうれしかったです。

——逆に、嫌な経験がありましたら教えてください。

それはないです。お願いをしてもいないのに旅館の掃除などをやっていただいたりしているので。

——印象に残っている幡再生がいましたら教えてください。

カマチさん（鎌倉良行/tactics records）ですね。山口旅館での陣頭指揮を見て「凄いなぁ」と思いました。幡再の方に「何をやっている人？」を聞いたら「BRAHMANのマネージャーさん」と聞いて「なるほど」と思いました（笑）

鹿児島と福岡の方々はよく来ていただいている印象があります。よく働かれている印象も残っています。

——幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

このままの活動を続けてほしいと思います。

——これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

支援が必要かどうかの見極めですかね。うちももちろん被災者という括りになると思います。だけど、被災者自身が立ち上がらないと先には進めない、と今回の地震で学びました。

寄り添い過ぎると、その人自身が他力本願な気質になってしまう気がしますので、ある程度で大丈夫なんじゃないかな、と。

皆さん、優しすぎるので（笑）

——読者に一言あればお願いします。

2012年の夏に九州北部豪雨があってこの地域も被災して、大変でした。世間的にはまだ2011年の東日本大震災がクローズアップされていたので、覚えている方のほうが少ないんです。

そこでの経験があったので、2016年の地震はある程度、心づもりはできていました。規模は全然違いましたけどね。

備えあれば憂いなし、とまでは言わないですけど、何か起きたときに心だけでも備えておけば、とも思います。

「いつの日か、皆さんを『お客様』として迎えたい」

山口雄也
熊本県出身
／熊本県在住
旅館業

垂玉温泉「山口旅館」は創業・明治19年。
8代目となる山口さんに熊本地震によって変わっていった心境の変化と、
幡ヶ谷再生大学との触れ合いを訊きました。

——幡再を知った経緯を教えてください。

旅館「朝陽」の社長さんに紹介してもらったのが最初だったと思います。その後、袴野の草刈りなどの活動の話を聞きました。

——「山口旅館」の掃除のお手伝いをすることになった経緯を教えてください。

朝陽の社長さんが心配してくれて、幡再にお手伝いのお願いさせていただきました。

——活動初日はどのような心持ちだったか教えてください。

緊張していましたね。

大勢の方が作業するわけですし、事故など何かあったらいけないと思っていました。責任もありました。そういう意味での緊張がありました。

——最初は遠慮していた、と聞いております。やはり気が引ける思いだったのでしょうか。

心境的に、ボランティアの皆さまを受け入れるってことは段階的に受け入れるつもりでした。最初から「コチラとコチラをやってください」と言って良いものかと思っていました。

「申し訳ない」という気持ちもありました。そして「自分が時間を作ればやれたんじゃないか」という気持ちもあり、後ろめたさみたいなものが一番大きかったですね。

やはり、「やってもらって当然」ではありませんので…。

——それでも変わっていった心境の変化はどのようなものだったのでしょうか。

皆さんから自発的に「仕事ないですか？」と聞きに来てくれましたので、ありのままの自分というか、委ねようというか、素っ裸になれた気がしました。

皆さんのほうに“乗っかった”という形ですね（笑）

——その後、打ち解け「あの部屋も、この部屋も」といった現場だったようですね。打ち解けた瞬間はどのようなときだったのでしょうか。

皆さんの懸命に働かれている姿をみて、信念でやられていることに対し、遠慮をするのはやめようと思いました。

——台風で延期になってしまった2017年10月22日の『南阿蘇復興祭』（のちに2018年1月21日に南阿蘇町久木野総合センターで行われた）の振替で急遽講演会をした際に「幡再さんに作業していただいて、血の巡りが良くなった」「それまで呼吸も6割くらいしかできていない感覚だったのですが、解消された気がしました」とありました。解消されたのは作業中だったのでしょうか。

そうですね。皆さんの懸命な姿に心が打たれました。館内が徐々に綺麗になっていく過程と比例するようにどんどん身体が軽くなっていく感じがしていました。

作業後、旅館に1人残って施錠をしていました。盗られるものはないんですけどね（笑）

1人で作業後の場所を巡って「ここ綺麗になったなぁ」「こここういう風になったなぁ」と思い返していました。これは幡再の皆さんが来てくれたからなんだ、と感謝の気持ちで

溢れました。

どんどん片付いていった旅館の姿を見て、自分の血の巡りが良くなったというか、今まであったどす黒いものが「スッ」と抜けていったのを覚えています。

その感覚は今でも忘れません。

――作業後に涙をみせられたときもあったと聞きました。

最終日だったと思います。「ありがたい」という気持ちと、たった数日ですけど皆さんと一緒に作業したり、ご飯を食べたり、過ごしたことによって寂しいという気持ちで溢れました。

活動はゴールデンウィーク中でしたし、熊本地震がなければ繁忙期なんですよ。誰もいなくなった垂玉温泉に皆さんが大勢で来てくれた。それがうれしかったです。

自分は残る側ですので…。短い時間でしたけど、心が通ったというか、濃密な時間でした。そんなことを考えたら、寂しさに襲われました。

でもそれが皆さんにとって本来の姿で、自分が「建て直していくんだ」という原動力になりました。

――幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

これがなかったんですよ（笑）

――印象に残っている幡再生はいますか。

新里さん（P,33）は印象に残っています。皆さん、気さくに話しかけてくれましたし、女性陣もハードな仕事でも嫌な顔ひとつせずやってもらったのは強く印象に残っています。鹿児島チームの皆さんは、毎回当日の早朝に出て現場に来てくれていることには驚きました。

――幡再の活動に対する印象があればお聞かせください。

言葉が適切かどうかは分からないのですが、作業中も作業後も皆さんが和気あいあいと作業されている様子が心に残っています。

作業をお願いしている立場としては、そういう姿は本当にうれしくなります。それを各地でされていることに深い感銘を覚えます。

来られる方が自分のライフワークとして楽しんでいる印象です。そういう方々が被災地に来てくれるだけでも、当事者たちは心が軽くなるんですよ。

――これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

皆さんが来ることによって心が軽くなる方は多いと思っています。

自分にも活気が戻ったのは事実としてありますので、この活動を未来に繋げていってもらえればと思っています。

――読者に一言あればお願いします。

2011年3月11日の東日本大震災は、どちらかというと対岸の火事でした。実際、日の経過とともに忘れていきました。

言い訳にもならないのですが、垂玉温泉は天災と隣り合わせの場所なんですよ。つねに災害に見舞われる場所で、大きな災害があった昭和28年のときも2012年の九州北部豪雨のときも旅館の一部が流されました。

今回の熊本地震があって、2011年に被災した東北の旅館仲間から補助金をもらうには手順が必要なのを教えてもらいました。そのとき、自分も災害があった場所に恩を伝えていきたいな、と思うようになりました。

被災して覚えた感情もありました。ときに怒りを覚えたこともありました。その反面、「自分ってこんなに感情をみせられるタイプだったかな」と思うときもありました。

垂玉温泉は幡再に携わったすべての方の場所だと思っています。いつの日か、皆さんを「お客様」として迎えたいですし、私もそのときに「いらっしゃいませ」と言いたい気持ちでいます。

「自分たちも『動かないといけない!!』と思いました」

酒井修司
長崎県出身
／熊本県在住
建設業

明るい口調でインタビューに答えてくれた酒井さんは、
熊本地震の被害により人生を変えられた1人。
良くも悪くも生き方を変えられた当事者の1人としてお話を訊きました。

――幡再を知ったきっかけを教えてください。

旅館「朝陽」のツッチー（P,12）に聞きました。

――熊本での幡再の活動を知った経緯を教えてください。

朝陽の社長とよく遊ぶのですが、避難所となっていたときに旅館へ行った際、知らない人が厨房でお手伝いしていました。

「何の人かなぁ」と聞いてみたところ、「ボランティアで南阿蘇を支援しています」と気さくに答えてくださいました。

それがユカリさんでした。

――活動に行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

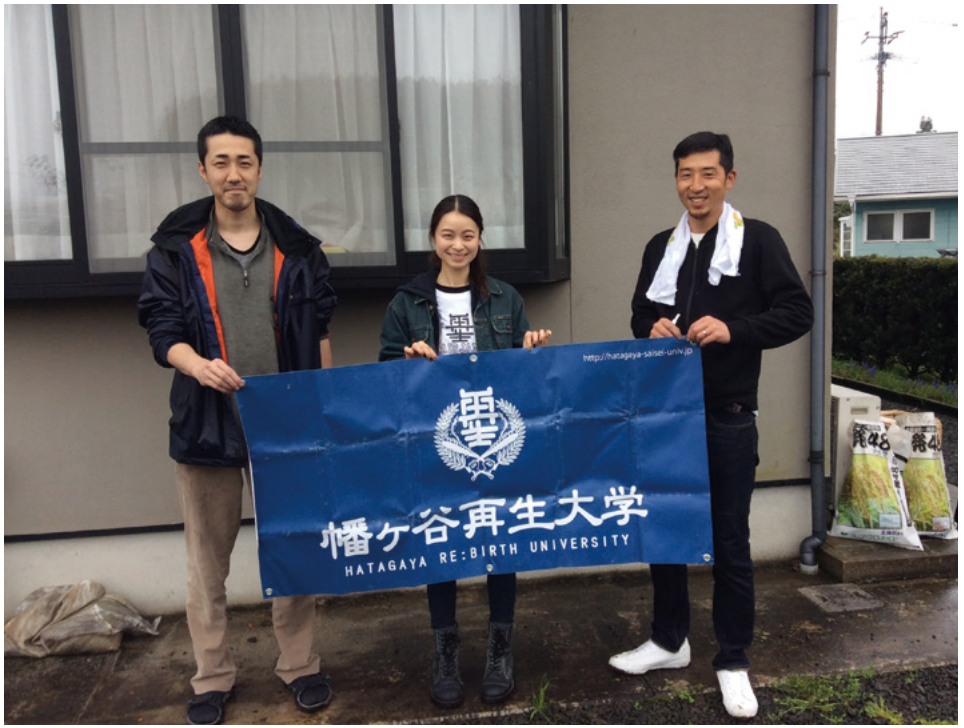
朝陽が活動拠点となっていたため、活動にきている人たちと話をしたら、県内外（天草や福岡、鹿児島）から来ていると聞き、トンネルも橋も崩れ、交通に支障があるなか「何かできることはないか」と来てくださっていたので住んでいる自分たちも「動かないといけない！！」と思いました。

――初参加のときの感慨を教えてください。

ユカリさんをはじめ幡再生がみんな「気さくで良い人たちばかりだなぁ」と仲良く楽しく汗をかけたと思いました。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

雨が降るなか、片平里菜（Hatasai Magazine Vol.05 P,20）ちゃんも一緒にカッパを着て、地震で落ちた瓦を片付けてくれたこと



ですかね。

――幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

とくにないですね。

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

情熱というか、行こうと思ったときに参加しています。

週末そんな気持ちになったら、一緒にいる村人を連れてボランティアに参加しています。

――幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

これからも困った人たちに地域密着型で、寄り添って活動していってください！！

――これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

南阿蘇をまだまだこれからもよろしくお願いします！

――読者に一言あればお願いします。

南阿蘇に家を建てて７年。地震で一部損壊。ローンも残っています。

道も崩れ、通勤できなくなったため、それまで勤めていた半導体装置の設計会社の職場にも通えなくなり転職もしました。

天災には勝てませんので、受け入れるしかありません。

でも地震があったことにより、いろいろな人と出会うことができ、悪いことばかりではなかったなとも思いました。

支援してくださっている皆さん、本当にありがとうございます。

「南阿蘇で死ぬまで仕事して、家のこと、地域のことをやっていくつもりではいます」

古庄辰弥
熊本県出身
／熊本県在住
土木業

南阿蘇で生まれ、南阿蘇で育った古庄さん。
幡ヶ谷再生大学との出会い、
当事者として熊本地震を経て感じた想いを訊きました。

――幡再を知ったきっかけを教えてください。

旅館「朝陽」でユカリさんに出会い、それがきっかけでした。

――熊本での幡再の活動を知った経緯を教えてください。

袴野の集落の草刈りを幡再が手伝ってくれたのが最初だったと思います。

――例年ですと草刈りは誰が行っていたのでしょうか。

集落の草刈りは毎年自分たちでやっています。そのこともあって、接客業の会社を辞めて長距離運転手に転職しました。

――なぜ接客業を辞めて長距離運転手へ転職したのでしょうか。

草刈りをするためですね。長距離運転手も月に数日しか休みがなかったのですが、会社に草刈りの時期だけ「家のことばせないかんけん、2日間の連休をください」と申告して、連休中に作業をしていました。

2016年4月に、1日目の作業が終わって、その日の夜に1回目の地震がありました。そのときはなんともなかったので、2日目も引き続き草刈りをしていました。一段落して「明日からまた長距離だなぁ」って思っていました。

その日の夜に2回目の地震があり、家が崩れました。

状況的に、会社に「いっとき休みをください」と伝えたら会社側も「道もないけん、落ち着くまで休んで良いけん」ということになりました。

それからは家の片付けをしながら、ずっと草刈りをしていました。ずっと休みでしたから（笑）

そうしたら椎間板ヘルニアになってしまって…。

家で寝込んでしたら、うちの爺ちゃんが畑の草刈りをユカリさんに頼んだのが成り行きですね。

――草刈りは基本的に古庄さん１人で行うのでしょうか。

自分の家の畑の草刈りをするのはうちしかないんです。うちの爺ちゃんもいるのですが、高齢なので「もう草刈りせんでいいけん、俺がやるけん」と伝え、今は1人でやっています。

――初めて幡再がお手伝いに入ったときの感想を教えてください。

「なぜ？」って思いましたね。「なぜこの人たちは手伝ってくれるのだろう」と思っていました。

だって、強制じゃないじゃないですか。なのに、自分で応募して参加するわけじゃないですか。

「凄いな」と今でも思っています。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

幡再の活動で知りあった方々が、ライブハウスに行ったときに親近感をもって「たっちゃん」と呼んでくれるのは嬉しいですね。

――幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

草刈りは遊びじゃないですから、目をつむるシーンはありましたね（笑）

大怪我してからでは遅いので。

――幡再の活動に対する想いはありますか。

「呼ばれたら行く！」という想いはありますよ、やっぱり。お世話になっていますし。

今、朝倉（福岡県）をやっていますよね？時間をみつけて行こうとは思っています。でも今は転職したばかりなので、無理も言えなくて（笑）

落ち着いたら行こうと思っています。

――印象に残った幡再生はいますか。

草刈りが上手か、上手じゃないか、で覚えています（笑）

それは冗談ですけど、2015年のクリスマスに東北を回らせてもらったときに、常総で活動されていた方ですかね？ その方を含め、幡再生は「人を惹きつける人が多いな」と思いました。

そういう大きな組織を作っている幡再はすごいな、と思います。

――これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

南阿蘇大復興祭のような、地域活性化のイベントをどんどんやっていってほしいですね。やっぱり幡再の持っている“破壊力”ってすごいじゃないですか。

企画している大学生たちもなかなか経験できないことだと思うんですよね。

幡再がないと成功しない部分が大きいようにも思えますね。

南阿蘇大復興祭に参加した大学生たちが、いつかあの経験を糧に南阿蘇村に還元してくれたら、もっと世の中が良くなると思うんですよね。

南阿蘇だけじゃなく、過疎地などの地域活性化のイベントにも参加していってほしいです。

ぶっちゃけ、うちの草刈りなんかどうでも良いんですよ（笑）

――過疎地といえば、高齢化社会に突入している現代ですが、今後の南阿蘇村を背負っていく気概みたいなものはあるのでしょうか。

そのつもりはないですけど、南阿蘇で死ぬまで仕事をして、家のこと、地域のことをやっていくつもりではいます。同世代もあまりいませんしね。

兄弟がいるのですが、兄貴2人のどっちかの子供が帰ってきてくれたら、とは思います。

ゆくゆくは、自分の力で家を建てようと思っているんです。今回の地震で潰れてしまいましたけど、親、兄弟、従兄弟、みんなの実家になるわけですからね。

南阿蘇村、袴野地域を背負っていくつもりはないんですけど「背負わされるんだろうな」とは思っています（笑）

――読者に一言あればお願いします。

2012年の洪水（九州北部豪雨）のときに消防団として、一週間ほど救出作業に参加していたんです。見渡すかぎり泥だらけで、家の場所は地元の人しか分からない状況でした。

作業中、「無理だろ？」とか「それは意味がないんじゃないか？」とも思っていました。不謹慎ですけど。当時は。

だけどそこには人命が懸かっているから、と自分を奮い立たせていました。一週間、自衛隊と参加して泥だらけになって作業をしていました。そのとき「天災」って恐ろしいな、と思いました。

でも、どこか他人事に感じている自分がいて。

熊本地震が起こったとき、体育館に避難させられました。そのとき全て人任せになっている自分に気づきました。

誰かの助けを待っている自分がいたんです。食べ物もそう、飲み物もそう、自衛隊のお風呂もそう。すべて人任せになっている自分が、とても恥ずかしい気持ちになりました。

「自分は今まで何をしていたんだろう」と。

「実感味」というか現実を突きつけられた気分になりました。

熊本地震でこの規模なら、東北の地震のときは想像を絶するものだと思いました。

それからですね。被災された方、事故に遭われた方に、寄り添えるというか…。悲惨なニュースを見ていても、それまで素通りしていたのに、今ではつい足を止めてしまうんです。

その方々の背景を想像してしまう。

今回の震災で自分が当事者になりました。そうならないと、分からなかったことがたくさんあることに気付かされました。

「自分の足で立ち上がらんことにゃどうしようもない」

松岡一雄　浩子
熊本県出身
／熊本県在住

終（つい）の棲家として高野台に居を構えるも熊本地震で半壊。
その後、松岡さんのお宅の片付けを幡ヶ谷再生大学の活動で
何度もお手伝いをさせていただきました。
被災者でありながら前向きに生きる松岡さんにとって天災と災難とは?
人の繋がりとは? を訊きました。

——幡再を知ったきっかけを教えてください。

浩子さん（以下、浩）：地震から1週間くらいですかね。旅館「朝陽」さんで夕食の準備をしていたときにユカリさんと知り合って「何かお手伝いしましょうか」と聞かれました。

私たちはこれまでお手伝いをしてもらったことがないけん、最初は「お手伝いは結構です。自分たちのことは自分たちでやります」とお断りしました。

それでもユカリさんは毎日毎日、お手伝いに来られていて、「じゃあ」ということになりました。

——幡再の活動はそのときに知ったのでしょうか。

浩：知りましたけど、なかなか「はい、そうですか」とはなりませんでした…。

——信用におけない存在だったのでしょうか。

浩：ユカリさんをそうは思いませんでしたよ？ それまででも自分たちでできると思っていました。今まで人助けをしたことがあっても、人に助けられたことがなかったから「別に助けてもらわなくても良いかな」と思っていました。

こんなに長く続くとは思わんかったから（笑）

一雄さん（以下、一）：付き合いがね（笑）

最初のころ、彼女は寝袋を持ち込んでロビーやら廊下で寝起きしていた。

浩：そう。被災者が「朝陽」へ避難しているときはずっと寝袋で。お風呂も最後。ご飯も皆が食べてから、片付けまでやってくれた。

ユカリさんがいて本当に助けられたんですよ。皆、くたびれて気が動転していました…。

——その後、被災されたご自宅の掃除のお手伝いが行われるわけですね。

浩：そうですね。当時は本当に疲れていました。何も手に付かない状態でしたので、ユカリさんから提案があったときは本当に助かる思いでした。

一：多いときは20人以上も我が家に来てくれたもんね（笑）本当に皆さん、一生懸命にやっていただいた。

浩：ユカリさんが来るたびに「今度はこれをやってもらおうか」と2人で話していましたよ（笑）

——活動を通じて、印象に残っている幡再生はいますか。

浩：大阪から来てくださる方々、鹿児島の方々、軽トラで来てくださるゆうこちゃん（P,34）…皆さん、本当に一生懸命にやってもらいました。

一：玄関を壊したときに、相当な量の瓦礫が出たのですが、そのときに手伝ってもらった人たちには本当に驚かされましたので、印象に残っています。

——幡再と接し、うれしかったことを教えてください。

一：来てもらうたびに、来てもらうたびに目に見えて家が綺麗になっていくことが何よりうれしかったですね。

浩：自分たちだけじゃできんからね。

——幡再以外のボランティア団体に手伝ってもらったりはしたのでしょうか。

浩：ないですね。人にお願いするのは嫌でしたし「できることは自分たちでやろう」と思っていました。自分たちでできることはやって、できないことはユカリさんたちにお願いしようと思っていました。ユカリさんたちだからこそお願いしました。

——熊本地震を経て2011年の東日本大震災をどのようにとらえていますか。

一：規模が違いますし、亡くなられている方の数が違いすぎるので、比べもんにならんと思います。

浩：私たちは東北に比べたら自力で復興できると思えばやれる、と思います。東北の方々はできんもん。

——読者に伝えたいことがあればお願いします。

一：事故や震災に遭っても、自分の足で立ち上がらんことにゃどうしようもない。

浩：私たちの人生は水害にも遭いました。火事にも遭いました。地震にも遭いました。何回もそういう目に遭っているから、くよくよしていても仕方ないんですよ。

私たちは「一から出直し」が多かった。

私はなんでも、どんなものでも受け入れるタイプなんです。

自分でどうにかしなきゃと思っているんです。（災難を）振り返らない。人をあてにしない、に尽きる。

——それは被災してから感じたものなのでしょうか。

一：そうなのかもしれませんね。現在でも地震が起きてから片付けをせず、援助待ちの人々が現在でもたくさんいる。

私はそれが嫌だった。

ある人から「松岡さん、片付けたら気持ちが楽になるよ」と言われたのがきっかけでした。

浩：自分の心が晴れんもんね。

一：自分が一番惨めだよね。

浩：だから今回の地震で自分の家が壊れたのに、片付けをしないのは不思議に思います。私たちは「半壊」だから、行政からお金は一銭ももらってないです。

今回の地震より、10年前くらいに自分たちで経営していた工場が火事になったときのほうが、よっぽど頭が真っ白になった（笑）

それすら振り返らない（笑）

——すっかり立ち直っていますね（笑）

一：もう立ち直った（笑）

浩：あと10年ちょっとしか生きられんのに、今立ち直らなきゃいつ立ち上がるのよ（笑）

「幸せの連鎖みたいなものが繋がっていったのなら…」

髙島和子
福岡県出身
／熊本県南阿蘇在住
百姓

1991年に子供4人を連れて訪れた南阿蘇村での農業研修で
「この場所が気に入り、子供達育てと、就農したい」と、
それ以来この土地に住む髙島さん。翌年には当時珍しかった
「有機栽培」でのお米づくりをはじめて現在に至ります。(2005年より自然農)
「ありがとう南阿蘇」をはじめたきっかけ、農業がもたらした恩恵、
現代社会の在り方、今後の日本人の在り方についてお訊きしました。

――「ありがとう南阿蘇」の主宰者とお聞きしました。やりはじめた経緯を教えてください。

震災当時に「南阿蘇にラーメンが来る」って振る舞いの話があったんですよね。あのころ、避難していた方々の食事はカップラーメンやジャムパンなどがメインで、それがとても長引いていて、悲惨なのは耳にしていました。

こういう仕事をしていると「食べるものが命を作る」「食べるものが精神を作る」と考えているんです。

そのときにラーメンを食べられない人もいるから、かき揚げうどんを作って振る舞ったのがきっかけですね。「やる！」と周りに言ったら仲間が集まり、それが現在の「ありがとう南阿蘇」の原型ですね。

幡再の活動のお昼ごはんもそのころに1度させていただきました。

――幡再を知ったきっかけを教えてください。

5月に旅館「朝陽」さんでユカリちゃんと会ったときに名前を聞きまして、そのときに冊子をもらいました。

――幡再にどういった印象をもちましたか?

最初は冊子を読まなかった。だけど面白いことをしているなぁ、と。ユカリちゃんが面白いからね（笑）

ユカリちゃんも私のことを「面白い」と思ってくれているだろうから、それからですかね。

お互い「お願い」「いいよぉ」「お願い」「いいよぉ」の繰り返しですね（笑）

――熊本での幡再の活動を知った経緯を教えてください。

仲間内に（幡ヶ谷再生大学読書部で行なった）読み聞かせを聞いた小学生の親もいましたし、あと袴野地区での草刈りをしてくださったことも知っていました。だから「ありがとうございます」という気持ちでしたね。

――髙島さんの田畑で活動をするようになったと経緯を教えてください。

田畑に来てくれることは基本「ウェルカム」なんです。一緒にやっていただくことはありがたいです。

また「農」をみんなに経験してほしいし、興味のある方、やりたい方はどうぞ、と「農」を始めたころからそういう心境でいます。

大それたことを言わせていただきますと「農であなたの命を支えるという責任」「プライド」はあります。また、環境も大切な関わりです。人間にとって「食べることは大事」ですし、良いものを食べるという意味ではなく「きちんと手間をかけたものを食べる」ということが大事だと考えています。

「ありがとう南阿蘇」で作ったうどんにしても、しっかり昆布で出汁をとっていました。「きちんと手をかけていただく」ということが命には良いことだと思っていますし「楽しく食べる」というのが一番だと思います。

モットーは「おいしく楽しく」ですかね（笑）

――農業活動に対して、呼びかけをおこなうことはあったのでしょうか。

たとえ農体験が初めての方でも、何も言わなくてもみんながそれぞれ何かを感じるんですよ。その場を提供する、という感覚ですね。

今日のテーマは「あなたが決めなさい」と言います。偉そうに（笑）

「自分の身体に聞いて」とも言います。キツかったら水を飲んでも良いし、休んでも良い。ちょっと休んでいる人が、頑張ってないとも思わない。いっぱい休んでいる人に「あの人、いっぱい休んでいる」とも思わないし、申し訳ないとも思ってほしくないです。

私は、みんなが“お揃い”で休憩時間は設けないんです。

休んでも良い。あまり休まない人が頑張っているとも思いません。それぞれが個々のペースで楽しんでほしいです。自分自身に聞きながら、五感をフル活用して、作業や自然を味わってほしいし、周りを気にせずに楽しんでほしいですね。

――初参加したときの感慨を教えてください。

田植えが最初ですかね？ ボランティアという括りではなく、自然や農に興味のある方に来てもらうようにユカリちゃんにお願いしました。「お昼ごはんは自分が作るから」と。

草取りをした田んぼのお米を出したり、畑作業をしたらその畑で収穫した野菜を出しました。そうしたら繋がるじゃないですか。経験主義ではないけども、それだけでも幸せじゃないですか。

たとえば、素足で田んぼに入ると何とも幸せな気持ちになるんですよ（笑）そういうことを経験してほしいですね。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

人と関わることが苦手な方が来て、作業後に私に「僕でも誰かの役に立つんだな」と言ったんです。「人のために自分が役立つなんて凄い」とも言っていましたね。それが一番印象に残っていますかね。

――幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

特にないけど、食事の用意に時間がかかってしまって腹ぺこさんを待たせてしまって、申し訳なかったかな。

――複数回、活動を開催していただきました。思い出深いエピソードがあれば教えてください。

熊本県の子がBRAHMANの武道館のチケットに落選したと、でも茨城県から初めて来た子が当選していて2枚余っていると分かり、その場で意気投合して熊本の子が武道館に行けることになった。凄い展開でしたよ。

「今日はこのために来たんじゃん？」って言いました（笑）

これはラッキーなエピソードだけど、そういう見えない繋がりをたくさん実感できると私は思っているんです。

「だから何なの？」と聞かれれば、何でもないんだけどね。

幡再も農作業もそういう集まりだと私は思っているんですよ。

――幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

単純なボランティア団体じゃないとは思っています。（福岡県）朝倉もそうだけど、「みんなすごく頑張るねぇ」と思います。その情熱がどこから出てきているのか？ とは思います。私も「ありがとう南阿蘇」を立ち上げたときもそうだったんですが「この指止まれ」で集まってくれた。私はわたしの想いがあったんだけど、集まってきた人たちもそれぞれ大変な時期だったんですが、自分と自分の家族以外の人たちに心を寄せることができるのはとても尊いことだと、尊い人たちだと思います。

――これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

自分の仕事、生活、趣味をやりながら「自分に何かできないか？」でみんなが想いを持って集まっているわけじゃないですか。幡再は。その集団が想いを乗せて行動するってことは素晴らしいことだと思っています。

そう在りつづけてほしいですね。

集まったら、みんな仲間だからね。

――読者に一言あればお願いします。

グリーンピースのサイトでも話したんですが、田んぼには良いものも悪いものもそこに存在するんですよね。「良いものだけを残す」という考え方ではなく、害虫でさえも悪いものじゃないんです。

例えば、田に良いものも悪いものも存在して、最終的に「稲」になるんです。人間関係と一緒で、「悪いものだけを排除する考え方は良くない」という想いで仕事を進めてきました。

震災に関していえば、現在の日本ってどこで何が起こってもおかしくないと思っています。

今回の震災は、チェルノブイリ（1986年に旧ソビエトで起きたチェルノブイリ原子力発電所事故）のときにショックに比べたら、「無防備だったな」とは思います。いろいろな面で。

1986年から、私たち夫婦はそこで戦った。こういう世の中になったのは私たち世代のせいだとも思っています。だから若い世代の方たちには「嫌だったら意思表示はしなきゃいけない」と今でも変わらず思っています。結果だけを見るのではなく。

「黙らせられないように生きていく」というか「自分が楽しく生きる」ことは力になると思います。やらされているわけではないから。

いまの世界は残念なことに「殺す側と殺される側」がはっきりしていると思うんです。我々は殺される側じゃないですか。状況が変わればね。歴史的にみたら殺す側って自分の手を汚さず、殺される側同士で殺し合わせるのが常套手段じゃないですか。

だから、殺される側として殺し合いをせずに「みんなで一緒に1人も欠けずに生き残ろうぜ」みたいな戦略がない気がします。本当に人間として心から繋ぎ合う関係があれば、お互い殺し合うことよりも一緒に生き延びるほうを選ぶと思うんです。

今は繋がってないから、状況によっては殺し合いをさせられるような状況を生み出してしまう気がします。だからまず、繋ぎ合う関係を作ることが最初かな、と思います。手間のかかる話ですね（笑）

本当に繋がっている人間同士は相手のことを思いやれると思うんです。どこかで。そういう関係が断ち切られているから、場合によっては自分が生き残るためにまわりを犠牲にすると思うんです。

「自分と同じように大切な存在」だと思えたらそうはならないと思います。

そういうことは2011年の3月11日以降、気がついた人はたくさんいると思うんです。「誰かが泣いていても自分は幸せか？」という世界に気がつくというか。

だからって「みんなが一等賞」という世の中もおかしいな、と（笑）

でも「あなたが笑っていたら私は幸せ」って人が増えていったら、幸せの連鎖みたいなものが繋がっていったのなら「未来は明るいな」とは思いますね。

阿蘇の大地と多くの人に感謝をこめて。

2年生
5年生
3年生
6年生

挑戦　協力　南西小のきずな！～笑顔へ

幡ヶ谷再生大学生徒の声

熊本県を含む九州地方での幡ヶ谷再生大学の活動に参加していただいた参加者にインタビューを行いました。震災を経て痛感した想い、足繁く通った理由、幡再を通じて得たもの、感じたこと、伝えたい想いを話していただきました。

「『大事な友達をみつけていかなくては いけないよ』と教えるようになりました」

山口真紀
熊本県出身
／熊本県在住
専業主婦

震災直後、震災後避難所だった旅館「朝陽」の娘として育ち、
現在は二児の母親の山口さん。地震を経験して感じたこと、
幡ヶ谷再生大学と触れ合い感じたことを訊きました。

――幡再を知ったきっかけを教えてください。

実家（＝旅館「朝陽」）が震災後避難所だったために、支援していただいた服部さん（SAVE THE HIROSHIMA）の紹介で、ユカリさんと知り合ったのが最初だったと思います。

――熊本での幡再の活動を知った経緯を教えてください。

ユカリさんが実家を拠点に活動されていましたが、活動のことを聞いても、水汲みや片付けなどをしなくてはいけなくて、余裕がありませんでした。

半年くらい経ってからですかね。落ち着いて話を聞けるようにもなり、今では「ユカリさん＝幡ヶ谷再生大学」という認識でいます。

――活動に参加しようと思い立ったきっかけを教えてください。

実家の片付けなども活動になりますよね（笑）冗談ですが、最初は子供の小学校での読み聞かせだったと思います。「子供たちの笑顔を取り戻したい」と思って参加したのを覚えています。

――読み聞かせはどんな内容だったのでしょうか。

その読み聞かせにりょうさん(幡ヶ谷再生大学読書部)がいらしたんです。

私たちも知らなくて、「今日はこの方に読み聞かせをしていただきます」と紹介されたのがりょうさんでした。子供たちより、私たち親がびっくりしてました（笑）

子供たちは学校から帰ってきて「読み聞かせが凄く上手な人が来た！」「声を使い分けて話をしていた！」とか楽しそうに話していて、久しぶりに家の中でも楽しい話ができました。

子供たちは当時、りょうさんを知らなかったんですよね。

でも、読んだ本の内容を子供たちは覚えているんです。それは凄いなぁ、プロだなぁ、と（笑）

今でも子供たちは「どんな話をして、他の子たちはどこのクラスで何と何を読んだ」って言うんですよ。私たちにとっても、子供たちにとっても、凄いインパクトのある日でした。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

読み聞かせや校内キャンプでのお菓子作りなどで、子供たちの笑顔が戻ったときですね。

震災後は心に余裕がなくて、子供のことまで手が回らなかったので…申し訳ない、という気持ちがどこかにありました。家に帰って来た子供たちが楽しんでいる姿を見てありがたいと思いました。

久しぶりに家族団らんといえば大げさかもしれませんが、楽しんだのを覚えています。

――幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

震災当初はおかしなボランティア団体はいましたが、幡再に関してはないですね。幡再は私腹を肥やすタイプの集団ではないな、というのを今でも感じています。

あと、段取りが良いですね。段取りが悪いボランティア団体は私たちの「手」を借りようとするんですよ。たとえば「駐車場はどこですか？」からはじまり「あれはないか？」「これはないか？」と。そうなると私たちにとっても負担がかかるじゃないですか。それなら逆にこちらの負担になりますので来なくても

良い、とさえ思ってしまうんです。

幡再はそれがないですね。

――幡再の印象を教えてください。

最初は力仕事が多かったので男の方が多かったですよね？ その後、女性の方も増えていって。よくこんなに大勢の人を集められるな、と感心させられます。

皆さん、一生懸命ですよね。あと「ユカリさんの子供たち」という印象があるので、変な人はいないですよね。

――印象に残っている生徒がいれば教えてください。

TOSHI-LOW（学長）さんですね。一度現場でマニュアルの軽トラックを運転しなきゃいけないときがあったんですよ。でも、誰もマニュアルを運転できなくて、そうしたら運転できない男の子たちに向かって「お前らボランティア失格だな」って笑いながら言ったんです。

言われた男の子たちも大笑いして。私も笑いました（笑）親分肌とは違うかもしれませんが、違う人が言えば空気を悪くする言葉で、その場の空気を良くしてしまうのは凄いと思いました。

本来なら、助手席に乗る存在ですよね？ でも一日中、地震で崩れた悪路を1人で運転していましたね。

――幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

震災直後は笑うことも忘れて給水車に並んだり、何かに追われる日々を送っていましたが、いろいろな方の出会いと支援で立ち直り、現在に至ります。

とくに子供たちが早く笑顔を取り戻せたのは、幡再の協力があったからと感じています。

本当にありがとうございます。

――これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

いつまでも続けていってほしいですね。今回、集落の畑や田んぼがすぐに使えるようになったのは、幡再が草刈りをしていたからだと思うんです。今回のように、目の前のことだけではなく、その後に繋がる活動をこれからも続けていってほしいです。

――読者に一言あればお願いします。

地震があって、悪いことだけじゃなかったんですよ。7～8年近く「引きこもり」だった人が、家が崩れたので「外」に出てきて、今では仕事をして1人暮らしをしているんです。

引きこもっていた人が「人を刺した」ってニュースがあると、その方の親御さんがとても心配していました。でもたった一回の地震で「社会復帰」できたわけじゃないですか？ その家の方は泣いて喜んでいました。悪いことだけではなかった気もしています。

現代って本当に人間関係が希薄だと思うんですよ。私自身も震災前は「家族が一番」でしたし「友達は二の次三の次」でした。横の繋がりをほとんど考えていなかったと思います。子供たちにも「勉強をしなさい」と教えていました。

地震を経験して「いろんな生き方」があるように考え直しました。人との繋がりが一番大事だと思えましたし、子供たちにも「自分のやったことに自分で責任を持ちなさい」「大事な友達をみつけていかなくてはいけないよ」と教えるようになりました。

繋がりを大切にして、自分たちが助けてもらった感謝の気持ちを忘れず、これからも困っている方々の役に立てれば、と思っています。

「いろんなことを学ばせていただいている場所であり…」

新里友信
福岡県出身
／福岡県在住
会社員

本冊子を作成するなかで「印象に残った方」の質問に一番名前が挙がった新里さん。北九州から足繁く熊本の活動にほぼ皆勤賞のペースで参加する、胸中を訊きました。

――幡再を知ったきっかけを教えてください。

はっきりと覚えてはいませんが「AIR JAM 2012」（Hi-STANDARD主催のフェス）のブース出展だったと思います。

――熊本での幡再の活動を知った経緯を教えてください。

熊本地震発生以前からtactics records（BRAHMANやOAUが所属するレーベル）のTwitterをフォローしていましたので、そこで知りました。

――活動に行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

幡再の熊本での初めての募集だったと思いますが、そんなに深くは考えず気軽に行ってみようと思いました。あと、当時益城町や他の地区は社協の災害ボランティアに毎週参加していたのですが、南阿蘇では現地での募集がなかったことも参加しようと思った理由の一つです。

――初参加のときの感慨を教えてください。

初参加の作業は、私と工藤くん（P,47）、茨城から来ていた典保くん（Hatasai Magazine Vol.6 P,08）の3人で、あるお宅の庭に散らばった瓦やガラスをトラックに積んで集積所に運ぶといったものでした。

瓦礫を拾っては軽トラに積んでいくのですが、明らかに積載量オーバーで積んでしまい、荷台は完全に沈み切ってタイヤも若干つぶれているような状態。

その状態で地震によりガタガタになっている道を走るわけですから、パンクしやしないかと冷や冷やでした。

そのお宅の庭にはかなりの量の瓦礫があり、正直最初見たときはこの人数だと1日ではとても終わらないかなと思っていたので、終わったときの達成感はかなりありました。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

いろんな人と出会えたことです。幡再に参加しなければ出会わなかった人たちに出会えたことが本当にうれしく思っています。

——幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

「今回は大変だなぁ」とか「面倒だなぁ」とか思うことはたまにあっても、嫌な経験は一度もないです。

ただ、児玉さんが急に亡くなられたと聞いたときは本当に悲しかったです。児玉さんは南阿蘇の方で、活動で軽トラが必要なときはいつも児玉さんに借りていました。

いつも南阿蘇での集合場所である旅館「朝陽」さんのロビーで昼間から一杯やっていて、僕らを見かけると必ず声をかけてくれていろいろな話をしてくれました。

朝陽さんに行けば児玉さんがいることが私にとっては当然の風景で、その児玉さんがもういないことが今は本当に寂しく、悲しいです。

——複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

情熱というほどのものではなく、自分の中ではいたって普通に参加している感じです。活動があれば参加しますし、今となっては活動がなくてもフラっと南阿蘇まで遊びに行ったりもします。

顔が浮かんできますし、「現地の皆さん元気かなぁ」とか、「幡再の連中は元気かなぁ」とか、思うとつい足が向いてしまいます。

——幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

いろんなことを学ばせていただいている場所であり、本当に感謝しております。

——これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

幡再がこれからもいろんなことを学べる場であり続けることを期待していますし、それに応じて自分自身も精進していければと思っております。

「『ここはみんなに任せられる』と思われるように…」

首藤ゆうこ
福岡県出身
／福岡県在住
会社員

これまで各地で行われてきた幡ヶ谷再生大学の活動に参加してきた首藤さん。
その動機と活動に携わって感じたこと、
その土地で知り合った人と人との触れ合いを話してもらいました。

——幡再を知ったきっかけを教えてください。

好きなバンドが幡再に参加していたことがきっかけです。

——熊本での幡再の活動を知った経緯を教えてください。

地震直後は社会福祉協議会のボランティアへ参加していましたが、活動が限られていることやニーズの把握がうまくいっていないことを知りました。そんな市内での募集が収束傾向にあるとき、Twitterをフォローしていた幡再で募集がスタートしたのが経緯です。

幡再の活動は地域のコミュニティーにしっかりくい込んで、話を聞き、人間関係を把握した上で募集がかかります。ご近所や仲良しさんからの協力体制があるので、変わり続ける現地の人たちの心情も汲み取った活動ができるのが強みだと思います。

——活動に行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

熊本への活動参加に特別なきっかけはありません。これまで通り何かできることをしに行くだけだと思っていました。

——初参加のときの感慨を教えてください。

初参加はみかん公園（石巻市小渕浜）のオープン前日の清掃活動とお祭りの準備でした。東日本大震災が起こって以来、東北にはずっと行きたいと思っていた場所でした。漠然と「行きたいな」と思っていた気持ちが募集を見て「行ける」と、チャンスだと思いました。

当時の募集は締め切りが早く、争奪戦だったように記憶しています。

公園に着くと、今までTwitterで見ていた活動がそこにありました。整地された広場にペンキを塗ったタイヤや壁、未完成の花壇、カニを頬張るユカリさん。

活動は今思うと簡単なことで、草を取ったり倉庫に獅子舞を取りに行ったり、小石を拾ったり。地元のおじさんが、ぶっきらぼうだけどとてもよくしてくださったのと、何を言っているかほとんど分からなかったのが衝撃でした（笑）

あっという間に時間が過ぎましたが、オープン前日にも関わらず、みんなのんびり。後日後悔したのは、当日子供達が裸足で演武した事を知ったときです。

のんびりと小石を拾っている場合じゃなかったな、と。

——とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

古いお話になってしまいますが、公園づくりに参加できたことが本当にうれしかったです。そこで子供たちが遊んでくれる。そんな場所に一瞬でも関われたことが、それから幡再に参加し続けることになる転機だったんじゃないかと思います。

——幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

遠いことですかね（笑）私が東北へ行くのが一苦労だったように、熊本・南阿蘇、福岡・朝倉は「行きたい」と思っている人が気軽に行き来できる距離ではありません。

そこをさらっと乗り越えて来てくださる皆さんには感謝しております。

——複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

情熱とは違うのかもしれません。何度もその地区に行くと、だんだんと顔見知りになって名前も覚えてくださる。「またね」と言って別れたら「また来たよ」となる。

それが続いているのだと思います。

——幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

毎年のように、日本のどこかで災害が起こっていて、どの場所も復興が中途半端になっているという気がしてなりません。幡再が関わった場所の人たちが、置いていかれるような気持ちにならないように、自主練の存在があると思っています。

特に幡再のTシャツは活動ごとに色分けされています。たとえば「あそこにおったね。今日はなんばしょったと？ 疲れたやろ？ ご飯食べていかんね！」と何故か九州の人はとにかくご飯を食べさせようとしてくれます（笑）

活動後にも声をかけてくださるくらい浸透していて、それは今までいろんな場所で活動して来た幡再生の象徴になっていると思います。そんな気軽な関係が成り立つことは珍しいと思いますし、さまざまな活動を通して続いていくといいなと思います。

——これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

いつも親身になって動いてくださるのがとても心強いです。これからも大変なところに突っ込んでいくスタイルで、活動が望まれている場所へ自由に行ってほしいと思います。

地元の私たちは誰かがやってくれることを待たずに、自ら動き、現地の人間として「ここはみんなに任せられる」と思われるように変化して行ければいいなと幡再と幡再生、自分たちに期待しています。

——読者に一言あればお願いします。

当たり前に生活したくても一瞬で世界が変わってしまう災害。通りを挟んで状況が一変する場所をたくさん見てきました。どこに住んでいても自分がどちら側になってもおかしくありません。

現場ではおじいちゃんが「あのとき来てもらったから、今度は行かなくちゃ」と言ってくださいます。次は私がお返しに行く番。次はあなたの番、かもしれません。

「身近な場所は身近な人たちが『動いていかないと…』」

福井美樹
熊本県出身
／熊本県在住
医療福祉系

熊本県で生まれ育ち、熊本地震で職場も被災した福井さん。
故郷を襲った天災、幡ヶ谷再生大学の活動を通して痛感した想いを訊きました。

——幡再を知ったきっかけを教えてください。

熊本地震の後に地元のライブハウスで公演したBRAHMANのライブで初めて知りました。

——熊本での幡再の活動を知った経緯を教えてください。

そのライブのTOSHI-LOW（学長）さんのMCで知りました。

——活動に行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

自分の家も職場も被災しましたが、もっともっと被災の大きかった街を見て本当にがく然としました。

自分の地元のために何かできることはないかと思い、TOSHI-LOWさんのMCを聞いて行こうと思いました。

——初参加のときの感慨を教えてください。

私は極度の人見知りなんですよ…。一人での参加は不安でいっぱいでした。初参加したときは南阿蘇の草刈りの活動でしたが、そのとき学長もいらしていて、超緊張してました（笑）

でも作業を始めると、とにかくずっと無心でした。みんなで食べたご飯がほんと美味しかったのを覚えています。

——とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

お宅の片付けなどに入らせていただいたときに、住人の方の表情が少しずつ明るくなっていき、前向きなお言葉が聞けたときは自分のことのように本当にうれしかったです。

——幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

嫌なことはありませんでした。

——複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

自分でもどこからみなぎってきているのかは分かりません（笑）参加すると現地の方との繋がりができ、皆さんの笑顔や、頑張られている姿にこちらが元気になり、いつの間にか皆さんに会いたくなって、現場へ行っているような気がします。

——幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

日々のストレスが大きい毎日に、活動することで無心になれ、発散する場にもなっています。なかなか経験できないことが経験できたり、生きることのありがたさを教えていただけたり。

人との繋がりもたくさん生まれています。本当に感謝しています。

——これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

このまま、人を思いやり、寄り添う、優しい存在でいてほしいです。

——読者に一言あればお願いします。

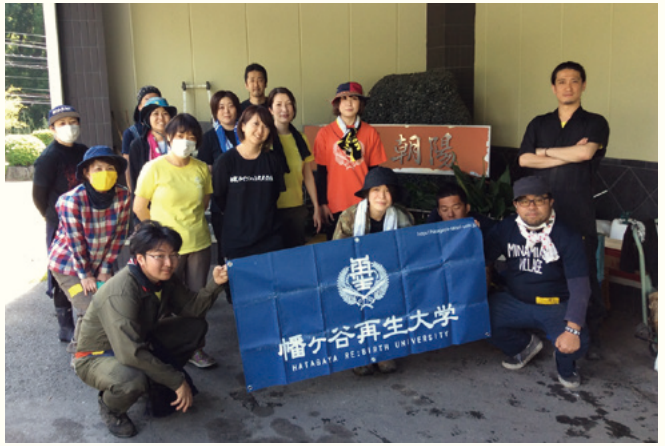
災害はいつか、また、どこかで起こると思っています。

東北もまだまだ大変な場所があるのに、このままだとこのような場所がたくさん増えていくと思います。同時に苦しむ人もたくさん増えてきます。

だから、身近な場所は身近な人たちが「動いていかないといけないのかな」と今は実感しています。

ちょっと勇気を振り絞って幡再の活動現場に行ってみて、何か感じ取っていただけるとうれしいです。

極度の人見知りだった私が言うのですから、参加してみようかなと考えている方へ参考になればと思います（笑）



「『熊本に来てもらえたんだな』ってのが単純にうれしかったです」

森 健太郎
熊本県出身
／熊本県合志市在住
運送会社勤務

熊本で生まれ育ち、東北や常総でのこれまでの幡ヶ谷再生大学の活動を
羨望の眼差しで見つめていた森さん。
熊本地震以降、積極的に活動に参加する想いを訊きました。

――幡再を知ったきっかけを教えてください。

東北での震災後に雑誌やSNSを見て興味が湧きBRAHMAN「霹靂」のDVDを見て、知りました。

――熊本での幡再の活動を知った経緯を教えてください。

支援物資を配布しながらTwitterで見かけたのがきっかけだったと記憶しております。

――活動に行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

「熊本に来てもらえたんだな」ってのが単純にうれしかったです。

東北や常総のときは、参加できず携帯の画面越しに活動を見ているのがヤキモキしていたので「地元の熊本でなら参加できる」とずっと考えていましたので、すぐに思い立ちました。

――初参加のときの感慨を教えてください。

南阿蘇で袴野の皆さんとの草刈りに参加させてもらいました。

開始早々の大雨の中でも参加された皆さんが、ずぶ濡れで汚れるのを躊躇しないで懸命に作業される姿を見て胸を打たれました。

「この人たちガチだ！」と自分の姿勢を正してくれました。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

変な話ですが、遠方の県外から参加される方々の生の声を聞かせていただいたことです。食べ物が美味しい、景色がいい、現地の人が優しい、といった声を聞かせていただきました。

そして「熊本が好きになりました」と。

正直、地震があるまでは10年以上は阿蘇には行っていませんでした。

その方々の視線で、熊本を改めて心で感じ、自分の住んでいる場所をより好きにさせてくれました。

――幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

解体前に家屋や納屋の片付けをお手伝いさせていただいた際に家財の大量廃棄には毎回、心を痛めていました。

被災地のはずなのにすてる行為に乗じて、知恵や工夫を出すことまで最初から放棄している気がして、疑問を抱きながら作業していました。

2017年の袴野の草刈りでは、春先から現場に入っている重機の業者さんたちがタバコの吸殻、アイスの袋、ペットボトルなどを捨てていったのにも心を痛めました。

もともとは地元の方々が大切にされてきた場所で、2016年に多くの幡再生に来ていただいて草を刈った現場でした。そのときはゴミ１つ落ちてなかった場所だったんですよね。

人が集まり動きが大きくなれば、心を１つにするのも難しくなりますね。

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

熊本地震は地元で起きたことでしたので特別な感情はないです。どこかで「自分もやらないと仕方ない」と割り切って考えています。

その反面、過去に何もしなかった後ろめたさもありました。でも自分は、本当の意味では行動できていませんでした。誰かしらの呼びかけに反応しているだけだと思っています。

「動いている」って意識はなく、未だに「自分も何かできないかな」と模索しています。

のはら農研塾（熊本にある循環型オーガニック農家）さんでの活動する機会もいただけて、自分の手料理で幡再生の皆さんにおもてなしをさせてもらったのはうれしかったです。

――幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

全国各地の現場に足を運んで、現地を生で見て、生で聞く。

本当に「地に足をつけて付き合っていこう！」って、きっと一番めんどうな方法を選んでいると思います。

丁寧で真摯な、ユカリさんの姿勢は手書きの手紙みたいで温かいものだと感じています。

日々の暮らしの中でも参考にさせてもらっています。

――これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

「皆さんおつかれさまです」の一言に尽きます。たまに、とんでもない距離を運転されてくる方にも出会いますので（笑）

遠距離での車の移動、活動、帰宅、と道中の事故だけは気をつけられてください。

事故「0」を目指していきましょう。

――読者に一言あればお願いします。

2017年は、同じ九州の朝倉や大分でも災害が起こってしまいました。

熊本の幡再生も自発的に朝倉での幡再の活動に、それぞれが行ける範囲で通わせていただいています。

それは2016年に東北をはじめ全国各地から来ていただいた全ての皆さんに恩があるからなんだと思います。

かつて日本の農村や漁村には そんな手間返し「催合（もやい）」「結（ゆい）」と呼ばれる風習がありました。

「困ったときは近所の手を借りる」

そして「いつか相手が困ったら手を貸す」というものです。

物やお金では返さずに、いただいた労働（手間）は労働（手間）で返す。

自分は、そんな「困ったときはお互いさま」という無限の繋がり。本来の人間らしい温かい営みを感じる活動に参加させていただいています。

興味を持たれた方は是非、どこかの現場に足を運ばれてみてください。

大好きなあの空気に触れてみていただけたら…と思います。

「プライベートでも仕事でも幡再と関われて嬉しかったです」

鹿毛 惇
福岡県出身
／熊本県在住
農機関連メーカー勤務

農機関連メーカーに勤務し、幡ヶ谷再生大学の活動に加え、
草刈り機のメンテナンスまでを行って頂いた鹿毛さん。活動までの葛藤、
仲間のありがたみ、熊本地震に直面した当事者の1人として話を訊きました。

——幡再を知ったきっかけを教えてください。

BRAHMANのDVD「霹靂」の特典でついていたステッカーですね。はじめは何のステッカーなのか意味もわかりませんでした（笑）

今ではそのステッカーを草刈機に貼っています。

——熊本での幡再の活動を知った経緯を教えてください。

熊本地震のあとに旅館でお手伝いしていたり、塀を崩したりと活動されていることはTwitterを通してですが、知っていました。

——現在では頻繁に活動に参加されていますね。初参加はいつごろだったのでしょうか。

初めて参加したのは2016年10月の草刈りでした。

熊本地震から半年後で、身の回りのことや気持ちに整理がついたころだったと記憶しています。

2016年4月16日の本震の翌日にアパートの退去命令が出て、翌週には地元の友達の協力で、みなし仮設のアパートへ引っ越しました。

まさか、自分が被災するなんて思ってもいませんでした。地元の友達の助けで今の生活があると思っています。

——活動に行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

2011年3月11日以降、BRAHMANやたくさんのパンクバンドの行動に考えさせられました。チャリティーなどの作品が出れば買ったり、物資の支援だったり、SNSではリツイートやシェアをしていました。

熊本地震から半年間、幡再の活動参加までものすごく葛藤していました。

被災して友達に助けられておきながら、間接的な支援しかしていない自分と、スマホ片手にSNSで拡散。

今2歳になる娘がいますが、「父親としてダサいなぁ、結局は何もしてねぇじゃん！」って思うようになっていきました。

「口だけだな」って。

幡再が熊本で、草刈機を使って活動をしていたので、仕事で草刈りを販売したりする立場として「参加しないと後悔する！」と思いました。

自分を奮い立たせられたのを覚えています。

——初参加のときの感慨を教えてください。

南阿蘇の袴野での草刈りは山間部の田んぼなので傾斜がきつく、草刈りも苦労しました。仕事柄、農地の管理が大変なのは知ってはいましたが、お手伝いしてみてビックリしましたね。

水稲農家の多くは後継者がいないと言われていますが、地震と大雨で崩れた田んぼをたっちゃん（P,19）1人で管理している姿はカッコいいです。

古い考えかもしれませんが、昔からある家や土地を継ぐこと、地震があったけどまた戻ってきたい、代々大切にされてきた物を守りたい、そんな想いがあることは素敵だと思います。

——幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

嫌な経験ではないのですが、草刈機の使用経験がない方や不慣れな方が多いので「安全上どうなのか？」と、ユカリさんに伝えたことがあります。

草刈機は刃物ですので、一歩間違えば大怪我に繋がりますし、その後はマニュアルを作成して周知徹底をするようにしています。

——複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

初参加のときに幡再が使っていた草刈機のメンテナンスをさせていただきました。その後、ユカリさんから南阿蘇の方に寄贈をしたいと相談があり、弊社の草刈り機を幡再に納品させていただきました。

プライベートでも仕事でも幡再と関われてうれしかったです。

修理などのアフターサービスの責任感が尋常ではありませんが（笑）

「今年初めて草刈り機を使うから鹿毛くん来てぇ〜」とユカリさんから言われたときは内心うれしかったですね。情熱かは分かりませんが、草刈機に対する責任感と、自分と向き合い、なりたい自分になるために参加しています。

——幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

現場現場で「ありがとうございます！と頭を下げられるんですが、自分からすれば活動の場を与えてもらっているので、「こちらこそありがとうございました！」と、いつも思います。

幡再には自分と向き合うために、活動の場を提供させてもらっているので…。

草刈りに至っては、刈刃のテストや機械の状況、その経験は仕事にも活きています。被災地の支援って名目ですけど、逆に助けられている部分が多々あります。

感謝しかないです。

——これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

被災地で黙々とする活動と、自然を感じながらの農業のお手伝い、バランスが取れていると思います。

これまでと変わらない活動を継続していってもらいたいです。

——読者に一言あればお願いします。

九州からすると3.11は遠い土地での出来事でした。

どこか他人事のような。

でも、SNSやバンドマンが想いを近づけてくれたように思います。

2012年の九州北部豪雨。結局は何もできなかった自分がいました。

常総や広島の水害もそうです。想いはあってもなかなか動けない。

そんな中での熊本地震。

真夜中でしたが妻は娘へ授乳中で、その真横の2メートルほどのCDラックが倒壊して、玄関近くだったので外になかなか脱出できませんでした。妻と娘は奇跡的に怪我をしてなくてよかったんですが、外に出ると真っ暗で、車が猛スピードで走っていく。

パニックでした。

見知らぬ土地で何処に逃げていいのかわからない。

周りの人は逃げて行くのに。

翌日、アパートは退去命令で規制線が貼られました。とりあえず妻と子供を福岡の実家に避難させ、1人で熊本へ帰るとき、自分自身を奮い立たせながらも、悲しく寂しい気持ちが心の底にあったのを覚えています。

翌週には地元の友達が集まって、引っ越しを手伝ってくれて本当にうれしかった。

2017年の九州北部豪雨。妻の実家が朝倉なのですが、孤立集落に住んでいた妻の友達は自衛隊に救助された方もいました。「これは、ただ事ではない」とあのときばかりは思いました。

ボランティアって参加しづらいとこがあって、何かきっかけがないとなかなか腰が上がらないと思います。

自分は実際被災して友達に助けてもらったことと、幡再の活動をTwitterで見ていたのが重なり、ものすごく葛藤して、1人の父親としても筋を通したかった。

参加する理由は何であれ、現場で汗を流して、見て聞くだけでも得るものがあると思います。

朝倉や南阿蘇では幡ヶ谷再生大学九州自主練として活動している方もいます。

頼もしい方々ばかりです。

ぜひ、九州のPUNKSに参加してもらいたいです！

「0より1」だと思うんです

浅井 憲
東京都出身
／福岡県在住
Webコンサルティング会社

東京で生まれ育ち、現在は福岡県に住み、足繁く幡ヶ谷再生大学の活動に参加する傍ら、幡ヶ谷再生大学陸上部の福岡支部長を務める浅井さん。
活動の原点、今後への願いと想いを話してもらいました。

——幡再を知ったきっかけを教えてください。

東日本大震災の際、NBC作戦でユカリさんに石巻で出会ったのがきっかけです。

震災直後にtactics recordsが行なっていたお菓子大作戦にも個人で持っていっていたりしていましたので、幡ヶ谷再生大学の名前を聞いたとき「こんなところでも繋がっているんだぁ」と思った記憶があります。

——熊本での幡再の活動を知った経緯を教えてください。

本震後すぐにユカリさんから連絡があり、「熊本へ行こう」という話になりました。数日後、まだ高速も通行止めの状況で地理感もなく、とりあえず向かいました。

物資は極力持たず、益城町などの被害状況を見ただけでその日は時間もなく終わってしまいました…。

渋滞の帰り道、テールライトとヘッドライトの明かりだけが差し込む車中で「何もできなかった」と落ち込みました。

幡再で何かやるなら「絶対行くぞ！」とそのとき決心しました。

——活動に行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

「絶対行くぞー」とずっと思っていたので「待ってました！」といった感じでした（笑）

熊本は母親の出身地でもありますし、福岡に住むときに南阿蘇に住むことを考えたこともありました。

すごく身近に感じていたので必然だったのかなと思います。

——初参加のときの感慨を教えてください。

実は、熊本での活動初参加予定の前日に人生初の食あたりになり数時間前にキャンセルをしたという苦い思い出もありました…。その数日後の初参加のときは「あー、やっと」って気持ちでいっぱいでした（笑）

参加した皆さんや南阿蘇の方々から凄くパワーをもらったのを覚えています。

僕は幡再の陸上部に所属しているのですが、その時のパワーが陸上部入部の源となっています（笑）

——とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

やっぱり現地の方の笑顔ですかね。

参加した方々も現地の方々も、重労働後でも本当楽しそうにやっているのを見て元気をもらっています！！

東北のときもそうだったんですが、逆にパワーをもらって帰ることのほうが多いように感じます。

——幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

「朝早いので眠い」ってくらいです（笑）

——複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

ただただ楽しいってことですね。

参加されている他の方に聞いても「幡再って楽しいよね」って言っています。

不思議なんですけどね。

石巻でも何回か活動に参加したんですが、熊本や朝倉の活動って凄いハードなんですよ…。

だけど、みんな楽しんでやっているから凄い！！

これが自分の家だったら絶対イヤイヤやっているだろうし（笑）

どの方も「楽しみながらでも良い方向に変えていきたい」というのが心の奥にあるのかなと感じます。

3.11以降、いろいろ考えるようになったのですが、子どもたちに良い世界を残したいし「日本は良い国だよ」って思ってもらいたいですね。

好奇心が強いということもありますけど、「誰かがやる」ではなく「自分でやる」ということを実践していきたいと思っています。

いろいろ体験することってなかなかできないですからね。

——幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

みんなが集う場を提供いただいて「ありがとうございます」と言いたいです。

僕もそうでしたが、気持ちがあってもなかなか活動に踏み切れない人は多いと思うんです。

幡再はそういう人たちでも参加しやすい環境だと思います。

現地の情報や活動の様子を随時発信してくれていることや、音楽関係の人たちが参加していることもあるので、音楽好きにはたまらない環境だと思いますね（笑）

——これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

東北での活動ではあまり思わなかったのですが、南阿蘇や最近の朝倉の活動は凄くハードになっています。

良い意味で、何でもありの状況になっていて、ちょっとわくわくしています（笑）

ただ、外の活動が苦手な人や子供たちでも参加できる活動が増えるとうれしいですね。

僕に子供がいることもあるのですが、ワークショップとか、生活や生きることに密接したライトな活動も増えるといいなぁと思っています。

——読者に一言あればお願いします。

3.11以降に思ったことですが、どんなことでもまずは行動してみた方が良いと実感しています。

今はインターネットやSNSで誰でも簡単に情報を取得できる社会なので、体験していないことでも体験した気になってしまうようなことがあると思います。

そんななかでも、何よりも自分の目で見て、自分の耳で聞いて、その場の空気を感じることは自分の経験になり良い刺激になっていくと思います。

また、その後の自分の人生だったり、何かに繋がっていく可能性が行動することで無限に拡がっていくと思います。

僕は身寄りのない九州に移住したのですが、今では幡再で出会った仲間がいっぱいできました。

「0より1」だと思うんです。

この時代、何が起こるかわからないので、できる限り後悔しないようにしていきたいなと思っています。

自分に言い聞かせている感じですが（笑）

「『少しの無理』という言葉をとても大切にしています」

塚本洋介
愛知県出身
／愛知県在住
教員

幡ヶ谷再生大学復興再生部の活動に足繁く通い、
幡ヶ谷再生大学陸上部に所属し「南阿蘇RUN」を企画。
「南阿蘇」をもっと世に知らしめるために動きつづける塚本さん。
自身にとっての「南阿蘇」、「幡ヶ谷再生大学」への想いを訊きました。

——幡再を知ったきっかけを教えてください。

2011年3月11日以降のBRAHMANの活動を追うなかで知りました。ただ、熊本地震があるまでは、参加したフェスやイベントに幡再ブースが出展していた際に募金に協力した程度の関わり方でした。

——熊本での幡再の活動を知った経緯を教えてください。

私は九州東海大学（現：東海大学）農学部の卒業生なので、4月16日に発生した熊本地震本震で、甚大な被害を受けた母校のキャンパスや学生街、崩壊した阿蘇大橋のニュース映像や写真を見て、すぐに熊本県へ復興支援ボランティアに行くことを決めました。

——活動に行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

ゴールデンウィークに熊本市内で社協のボランティアに参加しましたが、いまいちしっくりきませんでした。南阿蘇村での活動を希望していたこともあり、ひそかに幡再の南阿蘇入りを期待していました（笑）

なので、6月に南阿蘇で幡再の活動が始まったときはとてもうれしかったです。ただ、なかなか活動募集と自分に日程調整がうまくいかず、ようやく活動参加にこぎつけたときはすでに8月末になっていました（苦笑）

——初参加のときの感慨を教えてください。

南阿蘇村はかつて暮らした場所なので、映像や写真から、ある程度は被害状況が想像できていましたが、やはり現場の被害状況を目の当たりして、その想像をはるかに越える惨状に言葉を失いました。

正直なところ、学生街や阿蘇大橋を見たら泣いてしまうのではないかと思っていましたが、逆にショックすぎて涙が出なかったです。

初参加のときは、解体予定の納屋の道具出しと片付けのお手伝いをメインに2日間活動しましたが、前日まで同じ場所で別の方々が活動されていたのにも関わらず、最初はどこから手を付けたらよいのか戸惑うような状況で、大変戸惑うとともに被害の大きさをあらためて実感しました。

また、災害ごみの集積場に軽トラで何度も往復しましたが、地震発生までは日常で使われたものや大切に保管されていたものが、あの一瞬でゴミになってしまうという事実に何とも言えない切ない気持ちになりました。

しかし、作業が進むにつれて現場の状況だけでなく、被災された地元の方の表情や心境が徐々に変化していくことが分かり、活動に対するやりがいも実感でき、2日間の活動を終えたときには、「まだまだ自分にでもやれることがたくさんあるな。必ずまた来よう！」という気持ちになっていました。

——とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

とりわけ南阿蘇での活動を通して、うれしかったことは2つあります。

1つ目は、活動のたびに多くの人との出会いや繋がりが生まれたことです。正直、幡再に参加するまでは、あまり交友関係の広いタイプではなかったのですが、幡再生や地元の方、現役の東海大学農学部の学生など、さまざまな方と活動で関わりを持ち、自分の社会との繋がり方を変えてくれたと思います。

2つ目は、自分の母校への誇りを強く持てたことです。僕が（九州）東海大農学部の卒業生だということが共通の話題にもなり、地元の方とずいぶんと話がしやすくなりました。

たとえば、南阿蘇の活動でよくお世話になる、袴野地区の区長さんご夫婦（P,10）と仲良くなったきっかけも母校のことからでした。自分の母校が地元にしっかり受け入れられていたからこそだと実感しました。

そして、母校のキャンパスを南阿蘇に戻したいという気持ちをより一層持つようにもなりました。

——幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

特にありません。

——複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

やはり、南阿蘇に対する強い想いがあるからです。幡再とも深く関わりを持つ東海大の学生団体「阿蘇復興への道」の学生たちもよく口にする、「南阿蘇は第2の故郷」という表現は決して大げさではなく、自分自身も強くその気持ちを持っています。

僕は今、幡ヶ谷再生大学陸上部で「南阿蘇RUN」という企画をやらせてもらっていますが、その活動の中に語りべや南阿蘇大復興祭と絡めるのは、彼らと同じ気持ちを共有しているからだと思っています。

こんなきっかけでしたが、南阿蘇への強い想いを再認識させてくれ、さらに関係の再構築をしてくれた幡再には本当に感謝しています。

ただ、最近は幡再で活動すること自体がすごく楽しいので、とにかく時間を作って熊本に限らずさまざまな場所の活動に出向きたいなと思っています。

——幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

幡再の活動は、現場の活動を通して、そこで生活を営む方々の人生に関わります。僕はそれが自分の生き方を問い直すきっかけとなりました。幡再の活動は、まさに自分が人間として「再生」される活動だと思います。

また、僕は学長（TOSHI-LOW）がたびたび口にする「少しの無理」という言葉をとても大切にしています。実際、愛知県から熊本県での活動に参加するには物理的な距離がありますが、「少しの無理」の精神で簡単にその距離を縮められています（笑）

あと、これは個人的に思う課題ですが、僕の住む愛知県は、子どものころから大きな地震が必ず来ると言われ続けてきた地域なので、活動で学んだことを地元でどう表現し、どう行動するか…。

幸い愛知県には同じ志の仲間がたくさんいるので、そんな仲間たちと一緒に考え、行動していきたいと思います。

——これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

幡再の魅力は、良い意味での“ゆるさ”だと思います（笑）それこそが幡再の行動力や発想の自由さに繋がっていると思うからです。そんな魅力的な場でありつづけてほしいと思います。

——読者に一言あればお願いします。

とにかくどこでもいいから時間を作って、それこそ「少しの無理」をすれば、の精神で、現場に足を運んでほしいと思います！

「結果的には自分のための活動だと思っています」

工藤敬太
宮城県出身
／熊本県在住
システムエンジニア

現在は幡ヶ谷再生大学陸上部熊本支部の支部長を務める工藤さん。
宮城県で生まれ、東京で東日本大震災を迎え、
熊本に移住した矢先に熊本地震に直面した現実は
「震災」と「ボランティア」をどのように捉えているのかを訊きました。

——幡再を知ったきっかけを教えてください。

どこの音楽フェスかは忘れてしまいましたが、出展ブースを見たことがきっかけだった思います。

活動模様を収めた写真が展示されているブースで、最初は本当の大学だと思っていました。

——熊本での幡再の活動を知った経緯を教えてください。

NAVARO（熊本のライブハウス）で行われたBRAHMANのライブへ行ったのがきっかけで知りました。

そのライブでTOSHI-LOWさんが「いつか動くから準備していてくれ」と仰っていたので、ライブ終わりに熊本からし蓮根カラーの幡再Tシャツを購入して帰りました。

——活動に行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

東日本大震災のとき、私は東京に住んでいたのですが、震災関連グッズの購入や物資を送る等の間接的な支援を微力ながら行なっていたものの、被災地への直接的な活動に参加することにあと一歩踏み出せずにいました。

そんな中、熊本地震の前年に転勤のため東京から熊本に移住することになるのですが、直接被災地に向き合わなかったということが私の中で心残りでした。

熊本地震が起きたときに、今動かなければ一生後悔すると思い、社協へのボランティア活動に参加した後に幡再の活動に参加しました。

——初参加のときの感慨を教えてください。

大勢の人が参加するだろうと思い、緊張し

ながら集合場所の旅館「朝陽」さんに行ったのを覚えています。

ただ募集が活動日前日だったこともあり、集まったのは私含めて2人でした（笑）

初めての活動は家の瓦礫の撤去作業でした。

熊本地震直後から社協のボランティアに参加していたので、瓦礫撤去等の作業は一通り経験済みでした。

作業が終わったときは、そこでの経験がとても活かされたと思いました。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

南阿蘇にある袴野地区がとても被害が大きく、幡再で何度も作業した場所なのですが、そこの区長さんの仮設住宅に作業後お邪魔するのが恒例になっていました。

区長さんも自宅が被災して住めなくなりいろいろと大変なはずなのに、毎回温かく迎え入れてくれて、しかも手料理を振る舞ってくれたのがとてもうれしかったです。

――幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

特にないです。

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

結果的には自分のための活動だと思っています。ボランティアという行為自体は困っている人の手助けをすることですが、そこで出会った人たちと話をしたり優しくされたりすると、心が満たされるような気がします。

なので、また参加したくなるのだと思います。

――幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

幡再の良いところは、友達ができやすいということだと思います。

他のボランティアは年齢、性別、趣味、思考がバラバラな人たちが集まるので、活動後も連絡を取り合うのは稀だと思いますが、幡再の場合は音楽がきっかけで参加される方が多いので、共通の趣味が共通の音楽という話題があるのはとても大きいと思います。

――これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

これからも活動が続いてほしいと思います。

そのためには多くの方の支援が必要だと思うので、私も微力ながら参加させていただければと思います。

――読者に一言あればお願いします。

2017年、福岡県朝倉市で起きた九州災害豪雨で被災された方々への支援は幡ヶ谷再生大学を含め、多くの方が継続して行われています。

南阿蘇でも地震の爪痕が多く残されています。

マスコミの報道は一過性で、被災地という言葉自体も風化しつつあります。

九州以外でも各地で色々な活動が行われているので、少しでも興味がある方は是非参加されてみてはいかがでしょうか。

「言葉は決して綺麗ではなかったのですが、その温かさのある言葉に…」

駒崎敦史
熊本県出身
／熊本県在住

熊本県で生まれ育ち、熊本地震に直面した駒崎さん。
「何かしないと」という焦燥感に駆られた末に出会った言葉。
一歩踏み出した先に待っていた仲間、思考、見えた“景色”を訊きました。

――幡再を知ったきっかけを教えてください。

知人から聞いていて、ライブ等のイベントでブース出展を見かけて知りました。

――熊本での幡再の活動を知った経緯を教えてください。

Twitterで知ったと思います。

――活動に行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

熊本地震後、「何かしないと」とは思いつつも、これといった行動に移せずにいました。そんなとき鹿児島での石井麻木さんの写真展に行かせていただいて、そこで東北の写真から地元のことについて改めて考えさせられました。

同日にthe LOW-ATUSのライブもあり、TOSHI-LOW（学長）さんに「熊本から来ました」と話したときに、「お前がやれよ」と言われました。

言葉は決して綺麗ではなかったのですが、その温かさのある言葉に、「地元の自分たちでやらないといけない」と強く思わされました。

――初参加のときの感慨を教えてください。

初参加は、地震後のこと、過去のことをいろいろと思い出したりして少し避けていた場所での活動だったので、参加までに時間がかかりましたが「やっぱり見なくちゃ」と思い、参加しました。

そこで、現場を見ないとわからなかったこと、現地の声を直接聞いたり、幡再で活動されている方々の話、そこに集まる人たちの繋がりが生まれました。

参加して本当に良かったと思いました。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

わりと人見知りのところがあるので、幡再で活動されている方々と話せるかなと心配していましたが、気さくに話しかけていただいて、溶け込みやすくうれしかったです。

――幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

嫌な経験はないですが、田んぼでの活動でその後1週間くらい筋肉痛になり、自分の運動不足に気付かされました（笑）

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

行った先々の現場を見て、現地の方たちと出会い、お話したりすると「また行かなきゃ」という思いももちろんありますが、それよりそこで現地の方々、幡再メンバーで一緒に何か活動することがいいなぁ、と。

それが被災地に寄り添い、復興へとつながっていくとうれしいですね。

――幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

幡再は被災地での活動がメインですが、一般的なボランティア活動とは思ってないです。復興に向けてのお手伝いなどはありますが、現地の方たちとわいわいしたり、強制されない、自分のできる範囲でできることをやれる場所なのかなぁと思います。

――これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

困っている現地の声を聞き、ほどよい距離感で、無理なく、寄り添う活動を継続していってほしいです。

――読者に一言あればお願いします。

2011年3月11日から、現地の状況にいろいろな想いがありましたが、実際に地元・熊本で地震を体験してみると、災害を身近な問題として考えられていなかったな、と痛感しました。

誰もがまさかここで起こるなんて…と考えていると思います。

でも、今の日本で地震でなくとも、いつ何が起こるかなんてわからない。

何かあったときにすぐ動ける、知識、準備、周りの人たちとの繋がり等、事前にできることはいろいろあります。そういう思いを持って、いざというときに動けるようになっていけたらと思います。

そんな想いを深められるきっかけに、みなさんもぜひ幡再の活動に参加されてみてください。

「経験は財産です」

小城雅代
鹿児島県出身
／鹿児島県在住
会社員

これまで震災に対し、心を痛ませることでしかなく、
復興活動に対しては協力したい心持ちでいた小城さん。
隣県の熊本で地震が起こると、幡ヶ谷再生大学の活動に参加。
そこでも出会い、震災の向き合い方、心境の変化を訊きました。

――幡再を知ったきっかけを教えてください。

THE FUTURE TIMES（ASIAN KUNG-FU GENERATIONのボーカル＆ギター・後藤正文氏が編集長を務める新聞）の記事で見たのが最初です。

――熊本での幡再の活動を知った経緯を教えてください。

熊本の地震は、鹿児島でも夜な夜な地震速報が鳴り響きその怖さを身近に感じたものでした。NBC作戦で支援物資を地元のライブハウスへ持って行ったとき、作業する皆さんを見て私ももっと自分の時間と力で協力できないかと思いました。

一人で参加する勇気が出なかったのですが、すこし経ってからTwitterで幡再の活動募集をみつけ、思い切って応募しました。

――活動に行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

今まで震災が自分の身近で起こる可能性をちゃんと考えていなかったことを熊本の地震で気づかされました。隣県で人の力を必要としている場所があるのなら「微力でも協力したい」と思いました。

――初参加のときの感慨を教えてください。

社交的なほうではないので、初対面の方とうまく活動できるのか、足を引っ張らないか不安でしたが、今思えばいらぬ心配でした。

それぞれがそれぞれのペースで責任を持って動いていて、初めて会うのに不思議とチームワーク感があるというか、指示されたわけでないのに自然と自分の役割を認識して動いている皆さんがすごいな、と感動しました。

そしてすべての方が温かく楽しく活動させていただけました。

また、そのときに見た南阿蘇の生命力に溢れた美しい景色と地崩れの景色。

どちらも自然が作ったものだという落差、自然の力に圧倒されたことを覚えています。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

出会いです。初めての参加で熊本空港まで交通機関で行き、現場まで車に同乗させてもらった方は仙台から参加された方でした。

その車中、この数年それまで東北の震災についてただ心を痛めるだけで、なにもできていなかった自分を恥じていました。東北の活動についてもお話を聞かせてもらい、これからでも自分にできることがあれば遅くないと思えました。

その後も年賀状を送りあったり、東北の活動で偶然出会えたり、その初めての出会いと会話が今に繋がっていることがうれしいです。

——幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

活動に参加して嫌な経験をしたことはないのですが、やはり日常生活で自分の想いと行動が、周りとのギャップを感じることはあります。

たまに話をしていて悲しくなったりはします。

ただ、家族の理解があるので休みの日にどこそこ行かせてもらえていて感謝しています。

——九州地方に留まらず、幡再の出展、大船渡FREAKS(東北ライブハウス大作戦で建てられた岩手県大船渡のライブハウス)、そして朝倉での活動と日本を縦断する移動をされた と聞いています。その情熱はどのようなものなのでしょうか。

ただ自分が「行ったことのない土地に行ってみたい」という好奇心と自己満足です。

——思い出深い現場がありましたら教えてください。

どこも思い出深い現場ばかりです…。

南阿蘇の竹払いは、芝刈り機を使うこと自体が初めてで、なおかつそそっかしい性格なので､怪我するのではないかと心配しかなかったのです（笑）

どんどんコツを掴んで、最後は竹との戦いみたいになり充実感がすごかったです。

山口旅館さんの片づけはタイトな日程のなか、荷物の山が日に日に減っていき、最後に何もなくなった空間は、なにも無くなったのではなく関わったみんなの「山口旅館さんにまた復活してほしい」という気持ちと力のエネルギーが詰まっていると思えました。

初めて訪れた大船渡FREAKSは、キャッセンを含めオープン間近で期待とエネルギーに溢れていてワクワクしました。私は常総の活動には参加したことがありませんでしたが、活動の内容は拝見していました。

Tシャツが新たな役目で活用されることが幡再だからこそできたことだと感じ、壁中に詰められたTシャツは壮観でとても素敵だと思いました。

大船渡へ向かう道中でも、今まで画面や紙面でしか見たことのなかった景色を自分の目で見ながら向かい、いろいろな想いが込み上げました。

きっと幡再への参加というきっかけがなければ、行くことはなかったかもしれません。鹿児島以外で生活したことのない自分にとっては、生えている木の種類も海の景色も、そして震災の爪痕もすべてが心にささりました。

また何度も行きたいと思いました。

——幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

活動に参加させてもらえたおかげで、知らなかったことを知ることができました。

経験は財産です。

たくさんの出会いがあり、無関心であることは罪だとさえ思えました。

そして「これからいつ起こるかもしれない災害について無防備でいてはいけない、知識を備えて的確に対応できるように」という大船渡でのユカリさんの言葉を常に心に留めています。

最初はなにかのお役に立ちたいという思いで参加させていただきましたが、今はただ自分のために参加している感じです。

とても感謝しています。

——これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

これからも、関わるすべての皆さま、お体に気を付けて、お変わりなく、幡再にしかわからない各地の息づいた情報を伝えてもらえたらありがたいです。

——読者に一言あればお願いします。

東北の震災によって悲しみとやるせなさ、人間の非力さを思い知らされました。しかし、離れた場所に住む私のような人間にとっては本当の意味での危機感が薄かったと思います。

熊本での地震のとき、初めはどうすればよいか分かりませんでした。そして何かが起こったときに、何もできないことへの恐怖を覚えました。

朝倉でのお話では、これまで氾濫したことがなかった川が本当にあっという間に溢れ、そのときの避難の困難さを伺いました。

地震だけではなく天災は、いつどこでも自分の身近で起こりうること。

私は幡再での出会い、訪れることによって知り、考え、自分にできるアクションを起こそうと思えるようになりました。

幡再に参加する方や、地元で受け入れてくれる方々は皆さん温かく、個性的で話していて楽しいです。活動だけでなく何気ない時間に地元の方とお話しできる時間がとても貴重でありがたいと思います。

たとえば南阿蘇では、東海大の学生の皆さんの語りべもあり、多くのことを学べると思います。

ただ、当時を思い起こして話をすることは辛いこともあると思います。

それでも笑いを交えながら南阿蘇の魅力、これからのこと､人との繋がりを教えてくれます。

多くの方がその景色を見ながらお話を聞けたらいいな、と思います。

「この場をお借りして、感謝をお伝えします」

森 琴恵
熊本県出身
／熊本県在住
保健師

東京に上京後、小児科の看護師をしている最中、熊本地震が発生。
多くの葛藤を抱えながら熊本に帰郷。現在は故郷・熊本で保健師をし、
今春には新たな免許取得のため、学生に戻る森さん。
震災と幡ヶ谷再生大学への想いを訊きました。

――幡再を知ったきっかけを教えてください。

きっかけは、片平里菜（Hatasai Magazine Vol.5 P,20）さんのライブです。もともと片平里菜さんがすごく好きで、ライブで幡再のことを話されているのを聞いて、知りました。

――熊本での幡再の活動を知った経緯を教えてください。

里菜さんのSNSを通して、幡再が南阿蘇でも活動されていることを知りました。そこから幡再の活動をHPやSNSで気にするようになりました。

――活動に行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

震災後、東京での仕事を辞めて熊本に帰ることを決めました。そして熊本でなにか私にできることはないかなと考えているときに幡再を知り、その活動が南阿蘇でもあったので、「これに行きたい！」と思い立ちました。

思い立ったらすぐに行動したいタイプなので、東京にいる間はうずうずしていました（笑）

――初参加のときの感慨を教えてください。

初参加は熊本に帰ってきて、すぐ南阿蘇での活動でした。1人での参加はすごく緊張しましたが、私の祖父母を知っている人がいたり、濃ゆい方言が飛び交っていたりして、楽しかったです。

東京にいたときとは違う生活が「ここからまた始まるんだ」と実感した1日でした。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

お茶摘みをして、そのお茶をいただいたことです。草取りから参加させていただき、あんなに「おいしい」と感じたお茶は生まれて初めてでした。農家の方の心遣いと「おいしい」と喜んでくれた家族の反応がうれしかったです。

――幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

辛いと感じることはあっても、嫌だと思ったことはありません。

ただ、虫がすこぶる苦手なので、田んぼの草取りで虫を思い切り掴んだことを意識してしまった瞬間は泣きそうでした（笑）

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

「南阿蘇が好き！」「なんかしたい！」といった心境で、私の活動はスタートしました。毎回新たな発見があり、地域の方々の笑顔を見ることができるのはすごくうれしいことですし、幸せに感じます。

それが次の活動に繋がっています。

――幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

幡再の活動では、今まで気付けなかった地域の魅力や人の暖かさ、食の大切さ、自分になかった価値観…誰かのためにと活動したことより、私自身が得るものの方が多くて、もっともっといろんな活動をしたくなります。

活動範囲が狭く時間も限られていますが、いつでもフットワークは軽くありたいなぁ、と思っています。

――これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

こんなに素晴らしい活動を継続されている方々にこれ以上期待するのもおこがましいですが、動きたいけど動けずにいる人たちがなにかを始められるきっかけになるよう、これからも活動を発信し続けていってほしいです。

私も微力ながら力になれたら、と思います。

――読者に一言あればお願いします。

私は東日本大震災も熊本の地震も、その他大きな災害も経験していません。

ただ、熊本地震のときは2週間後くらいに現地に行って、そして家族や友だちなどできるだけ多くの人に会ったんです。

そのときに見たこと、感じたことを踏まえて伝えようとしているのですが、当時、現地で地震を経験した人たちのことを考えると、どう書いて良いのか分かりません。

あのとき会った人たちの表情、言葉、行動、体験したことなど、いろいろと考えるうちに、この人たちの感じたことは一人ひとり違うのに、それをなんと言ったらいいのか…。

うまく伝えられなくて申し訳ないのですが…どういう言葉をもって書いたらよいのかわからず止まってしまいます。

まとまりのない文章ですが、これが率直な思いです。

東京に上京して1年。

ようやく楽しいと思える日もできた、まさにその時、熊本地震が起きました。熊本の現状を目の当たりにしたとき、仕事を辞めて熊本に帰るという決断に迷いはありませんでした。

ですが、辞めるまでのおよそ1年間、たくさん心が揺らぎました。一緒に働く同期、慕ってくれる子どもたち、失いたくないものが東京にできました。

だけど熊本で踏ん張っている友だち、家族もまた大切な、大切な存在でした。この決断を応援してくれて、支えてくれる周りの人たちへの感謝はどんなときも忘れずにいたいです。

なにかを始めようとするとき、応援してくれる人がいることは凄く幸せなことだと今までより強く思うのも、当たり前が、当たり前にあることは、実はすごく幸せなことなんだ、と気付けたのも熊本地震があったからです。

そして私にとっての“拠りどころ”になったのは、幡ヶ谷再生大学での活動でした。

幡ヶ谷再生大学で活動されてきた皆さま、震災直後からずっと熊本での活動を続けていてくださってありがとうございました！

この場をお借りして、感謝をお伝えします。

活動を通して出会ったご縁をこれからも繋げていきます。

「必死に『何か自分にできることはないだろうか…』と考えました」

前野幸子
鹿児島県出身
／鹿児島県在住
㈱大隅機械サービス

東日本大震災から心に秘めた想いを行動に移し、一念発起して転職。
現在でも足繁く幡ヶ谷再生大学の活動に参加する前野さんが想う「幡再」、
女手一つで育て上げた娘さんから見た「母親像」を訊きました。

――幡再を知ったきっかけを教えてください。

2011年３月11日に起きた東日本大震災をきっかけに細美武士さん（P,117）やTOSHI-LOW（学長）さんの東北での活動を知り、「何か自分にもできることはないだろうか」と模索しているうちに、幡再の活動をSNSで見たのがきっかけです。

――熊本での幡再の活動を知った経緯を教えてください。

熊本で地震が起こる前は、東北での幡再の活動に参加できないかと一人でモヤモヤしていました。

とは言うものの、当時はアパレルの仕事をしていたため、週末の休みや連休を取ることがむずかしく、なかなか活動に参加することができませんでした。

幡再の活動は常々Twitterでチェックしていたので、そこで熊本での活動が始まったことを知りました。

――活動に行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

参加しようと強く思ったきっかけは、熊本地震が起こった2カ月後に、石井麻木さんが鹿児島で【3.11からの手紙/音の声】の写真展を開催してくださったことから始まります。

東日本大震災が起こったあの日、私は鹿児島で友達とお酒を飲んでいました。あとから参加する予定だった友人から「東北で地震が起きて大変なことになっているから今日は行かない」と連絡があったのにも関わらず、何も知らない私たちは普段と変わらない時間を過ごして家に帰りました。

翌朝、ニュースであの光景を見たとき、あまりのショックに体が震えたのを覚えています。

こんな大変なことが起きていたのに、気楽に遊んでいた自分を責める気持ちでいっぱいでした。

必死に「何か自分にできることはないだろうか…」と考えましたが、できることといえば、募金をすることや情報を拡散することくらいでした。

それからずっとモヤモヤを抱えていたので、鹿児島で初めて麻木さんの写真を見たときには、ポロポロと涙がこぼれました。

ただただ、悲惨な状況だけではない、力強く生きている人たちがそこには映っていました。

麻木さん（P,107）と鹿児島WALK INN STUDIOの野間太一さん（P,87）のトークショーで、麻木さんが「何もできないのではない。知ること、伝えることもボランティアのひとつ。まずは近くにいる人に優しくしてみてください」

「そこに落ちているゴミをひとつ拾ってみることでもいいです。何でもいいから、できることから始めてみてください」と話したのを今でもよく覚えています。

太一さんもまた、あのときすぐに東北に駆けつけられなかったことをずっと悔やんでいたと話されているのを聞いて、私だけじゃなかったんだ…と強く共感したのを覚えています。

何かの力に押されるように、機会があればすぐにでも活動に参加したい！ と思うようになりました。

――初参加のときの感慨を教えてください。

やっと休みと合う日程を見つけて参加できたのは、のはら農研塾さんでの芋掘りでした。

畑仕事だったので、子供たちを連れて参加して良いか？ を事前に聞いたところ「危険な作業もあるが、注意しながら他のことでなら参加できます。是非連れて来てください」と快い返事をいただきました。

何も分からないまま、夜中に子供たちを車に乗せ、下道で北熊本へ向かいました。

当日は雨が降り、芋は収穫後すぐに濡れてしまうと出荷できなくなるとのことで芋掘りは中止になりましたが、畑の草刈りを手伝ったり、のはらさんの農業や廃棄物再生利用のお話をたくさん聞くことができました。

初めての参加なのに、お腹がよじれるくらい笑いました。

作業が終わって美味しい幡再飯を食べたあとは、ユカリさんの一声で、南阿蘇村へ向かい、東海大生の語りべを聞きながら、倒壊してしまった街を見て回りました。当時は原田くん（P,68）が語りべをしてくれました。

帰るころにはその日に出会った方々は、すっかり「仲間」に変わっていました。変な表現かもしれませんが、新しい居場所を見つけたような感覚でした。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

地震により崩壊の危険があるため、取り壊

し予定の貼り紙をされてしまったお宅の荷出しのお手伝いに行きました。阿蘇を気に入り数年前に県外から移住、雰囲気のある古民家で生活を始めたばかりのご家族のお宅でした。

取り壊しをするにあたり、中の細々した荷物をきちんと分別して捨て、その中でまだ使えるものは再生して使いたいとのこと、取り壊しの費用面でもかなり変わってくるとのことでした。

最後に、ご家族の思い出の詰まった素敵な家に感謝し、「綺麗にしよう！」と言うことになり、みんなで隅々まで掃除をしました。

それを見た奥様は「こんなに綺麗にしてもらって…」と涙ぐんでいました。

ユカリさんが「補修をして、このままの形で、また住めないものなのか…」と言い、みんなで少し話をしたあと、せっかくだからと、電気もない家屋の中で集合写真を撮って解散しました。

それからしばらくして、家の取り壊しが中止となり、このままの形で補修されることが決定したとの新聞記事を目にしたとき、とてもうれしい気持ちになりました。

いつかまた、ご家族に会いにあの家を伺えたらいいなと思ったりしています。

——幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

嫌な経験はないです。

自分の失態になるのですが、一度、前乗りで福岡方面から阿蘇に向かったときに、迷子になったことくらいです（笑）

あの当時の熊本県では、まだに通行止めになっている道路がたくさんあり、カーナビやGoogle MAPが使えませんでした。頭では分かっていたものの、立野地区で通行止めに突き当ってしまいました。

地図を頼りに街灯のない夜道をひとりで迷走したのですが、行く道行く道全部通行止めで…。暗いし怖いし、半泣きになりながら電話で助けを要請し、ようやく抜け出ることができましたが（笑）

災害地では、道が閉ざされていたり、危険が伴うことがありますので下調べが大事であることを学びました。

——複数回、活動や出展に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

熊本での活動は、土日中心で行われておりましたので、私は思い切って転職をすることにしました。

長く働いていた職場で人間関係も良好だったし、簡単に転職ができる年齢でもなかったのですが、「行動をしなければ何も変わらない、今しかない！」と思ったので、何の迷いもなかったです。

何度か活動に参加して感じるのは、人の役に立つためにやっているという感覚はまったくなくて、現地の方に会いに行く、みんなで話をしたり菓子を食べたり笑ったりしたいという感覚です。女性の力ではなかなか厳しい重労働もあります。

暑い中や寒い中での作業もあったりもするのですが、みんなで助け合いながらの作業なので苦にはならないです。

ブース出展で思い出深いものは、2017年の鹿児島でおこなわれた「WALK INN FES!」の幡再ブースを手伝えたことです。

かなり早い段階で前売りチケットを購入しておりましたが、1日目のスタッフがなかなか見つからないと言うことでしたので、「自分がやるしかない！

と、娘を引き連れて参加しました。

結局その日は、私と娘、ユカリさんの3人で、ほぼ休憩なしでしたが、めちゃめちゃ楽しかったです。

生まれ育った鹿児島のこの素敵なお祭りを、これからも一緒に支えて行きたい気持ちでいっぱいです。

それから、ずっと参加したかった麻木さんの写真展の片付けに、熊本での幡再の活動後に福岡へ走り参加できたのも、とても良い思い出です。

——南阿蘇の垂玉温泉さんの片付けでは、職場のユニック（クレーン）車を持ってきてくれたと聞いています。どのような経緯だったのでしょうか？

ある日、幡再のTwitterで緊急募集がかかりました。

垂玉温泉さんの瓦礫撤去をしたいが、数日後には周辺の道が全面通行止めになる、緊急の作業のため、人力だけでは間に合わないので、軽トラや大きすぎないユニック車などがあれば助かると書いてありました。

「うちの会社に2トンのユニック車がある…！」まだ入社して3カ月しか経っていませんでしたが、ここは勇気を出してダメ元で社長に相談してみようと決心しました。話を聞いた社長がふたつ返事で引き受けてくれたときは正直びっくりしました。

ユニック車の運転はできても、クレーンを動かすには免許がいるので社長も同行してくれました。仕事の予定がぎっしり入っているはずなのに…と、申し訳ない気持ちとありがたい気持ちでいっぱいでした。

実際、作業の最初の段階でユニック車を持っていけたことで、人間の力ではなかなか運べない倒木やコンクリート壁や大きな看板などを撤去できたことは、とても大きな力になれたのではないかと思います。

——幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

言葉を借りることになりますが、本当は災害なんて起こらない方がいいんです。被災地の復興は、一刻も早く終息すればいいな、と思うけれども一度壊れた街の修復は想像を絶する困難があると思います。

公共の力だけでは拾われない、声にならない声がまだまだたくさんあるとも思います。その端っこの部分を、少しずつでも根気よく拾っていこうという幡再の活動の在り方を尊敬しています。

活動に参加するたびに、いろんなことを勉強させてもらっていますが、私たちはそこに住んでいる人たちの領域にお邪魔させてもらっている、ということを感じます。

ご挨拶や作業の後片付け、ご飯やお茶をいただいたらお皿を洗って恩返しをする。使用した道具も綺麗に洗ってお返しするなど「ボランティアをさせていただいてありがとうございます」という気持ちを忘れずに行なっています。

幡再の活動を通じて、私自身が助けられている気がします。

——これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

秋には、髙島和子さん（P,24）の畑に稲刈りのお手伝いにいきました。赤米を手刈りしたのですが、作業の行程や何もかもが初めての体験でした。稲刈りがこんなに大変なものかと実感しました。

そこで出会った和子さんしかり、のはらさん（P,82）、もちろんユカリさんも、幡再で

出会う人たちは、みんな魅力的でパワフル！大好きな人たちでいっぱいです。

幡再には農業部もありますが、こういった活動もどんどん行なってくださると、楽しいなと思います。

――読者に一言あればお願いします。

熊本地震の被害を目の当たりにしてきましたが、私が活動に行って毎回思うことは地元の方が悲しい顔をしていないということです。皆さんの優しさや逞しい笑顔にこちらがパワーをもらって帰れます。

幡再に参加したいんだけど…そう思って躊躇している人がもしいるのなら、是非参加して、この楽しさを実感してもらいたいなって思います。

私事になってしましまいますが、女手ひとつで育ててきた娘は、現在高校2年生です。私と一緒に、熊本の活動に参加したり、「WALK INN FES!」での出展に参加してくれたりしました。

学校が嫌いで、先生が嫌いで、反抗期の娘。

そんな娘から、母の日に手紙をもらいました。

「人のために動くママを尊敬してる」

平日仕事でありながら、週末もあちこち走り回り、家にいないことが多いので、子供たちには本当に申し訳なく思うことばかりです。

でも、この手紙を読んだとき、自分がやってきたことは間違いではなかったんだ、とうれしくなりました。

熊本も、現在頻繁に募集がかかる朝倉も、まだまだやるべきことがたくさんあります。これからも活動に参加しますし、ずっと関わっていきたいです。

私の人生に、幡再があって良かったです。

心から感謝しております。ありがとうございました。

「この冊子のお話がなければ、息子が感じた熊本地震を知ることがずっとなかったと思います」

A
東京都出身
飲食店（パート）勤務

熊本地震当時、南阿蘇にある東海大学に通うお子さんがいたAさん。
幡再との出会い、走ることの楽しさ、そして子を持つ1人の親として、
感じたありのままの感情を話していただきました。

――幡再を知ったきっかけを教えてください。

2017年3月18日に開催された「南阿蘇RUN」がきっかけで「幡再」を知りました。「復興再生部」は後日になります。

――熊本での幡再の活動を知った経緯を教えてください。

SNSです。熊本地震のあと、いつも南阿蘇のことが気になっていたので「南阿蘇」で検索していました。

2月に「南阿蘇RUN」が目にとまり、語りべで南阿蘇の現状を見てまわることができる、マイペースではありますが走ることが好きでしたので、興味を持ったのがきっかけでした。

――たしか「南阿蘇RUN」にはお一人で来られていましたよね？ 行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

迷いました。

でも「迷うならまずは行動」と問い合わせをしていました。

担当の方は、私が音楽から入ってきている人ではないと気づき、「まずは幡再のホームページを見られて活動の趣旨を理解していただき、それから検討してみてはいかがでしょうか」と丁寧なお返事をいただきました。

拝見したホームページはカッコ良すぎておばちゃんの私には難しかったですが（笑）

「南阿蘇RUN」でやりとりをしていた担当の方が塚本さん（P,45）で、東海大学農学部OBで息子の大学の先輩にあたる人だったんです。

熊本地震のとき、学生村で息子は被災しました。

大きな怪我もなく、帰宅してくれたときは「あぁ、本当にあの山や、道が、橋が崩れる瓦礫のなかをよく帰ってきてくれた」と、安心したものです。

――崩れた状況は「南阿蘇RUN」のときに見られたのでしょうか。

いえ。本震の当日に車で息子を南阿蘇まで迎えに行っていたので、状況がよくわかっていました。でもその日は息子には会えませんでした。

一時帰宅した息子に、前震と本震の様子を尋ねても、こちらは詳しく状況を知りたいのに、いつも一言二言の返事だけでした。避難先の小学校のグラウンドで、大学の体育館で、どうしていたのか尋ねたいことは山ほどありました。

本震のとき、どうしていたのか、その後どうしたのかを後日、他の学生さんに聞きました。息子は数件先の倒壊したアパートに皆で救助に行っていたそうでした。

どうりで手足が傷だらけだったと思いました。

大学は7月に再開決定。6月末に熊本市の方に引っ越しましたが、近くなってきたとき、息子は就寝中に何度もうなされていました。

本人は「覚えてない」って言っていましたが、熊本に戻る不安が心のどこかにあったんだと思いました。私自身もできれば熊本にやりたくなかったです。どの親御さんも思っていたはずです。

南阿蘇から離れても「南阿蘇はどうなっているんだろう」と、いつも心の中で思っていました。学生さんの語りべで「当時のお話を詳しく聴きたい、状況を知りたい」と思い、参加を決めさせていただきました。

――語りべはいかがでしたか。

参加すると決めたときから倒壊したアパートで亡くなった学生さんに手を合わせたいと思っていたので、語りべの範囲内で手を合わ

せることができました。

本当にありがとうございました。

「もしかしたら自分の子供だったかもしれない」亡くなられた親御さんの気持ちを思うと今も胸が熱くなり、締めつけられます。

あの町の象徴でもあり、学生さんたちの生活道路、息子も何度も通っていたあの阿蘇大橋がない。もし「あのときに通っていたら」と考えるだけで、恐ろしいです。

報道されていた今はもう使われていない小学校のグラウンド。当時、ヘリコプターからの映像を録画して息子の姿を探したものでした。小さすぎてわからなかったですが。

語りべでその小学校に訪れることができました。そのときはもうグラウンドにはもうなにもなかったのですが、避難していた学生さんたちの姿が見えた気がしました。

大学入り口にあったコンビニには、息子の入学が決まり引っ越しや入学式で何度も買い物に行きました。「近くにコンビニがあるけん、便利でいいやん」って話をしていたので。

店舗は傾き、電信柱は折れ曲り、駐車場はひび割れしていて、そこに新生活を目の前にして笑いながら家族と買い物をして、立っていた同じ場所かと思うと信じられなかったです。

学生さんの語りべを、聞きたくて参加したのに当日は自分がいっぱいいっぱいになってしまい、語りべの記憶があまりないんです。機会があればもう一度じっくりと語りべに参加したいです。

――「南阿蘇RUN」はいかがでしたか。

走りきれるか自信がなかったのですが、ゆっくりのペースで休憩を入れ、お話ししながらでしたので、無事に完走することができました。

幡再の陸上部の方が多かったのですが、部員の皆さんの後ろ姿はどの方も楽しんで走っているのが伝わってきて、とてもかっこ良く素敵でした。

これまで4〜5キロを走るのがやっとでしたが、陸上部の皆さんと関わることで刺激になり、休みながらでも走れると自信に繋がっていっている気がします。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

何度か幡再の活動に参加させていただき、きっかけになった塚本さんに「入学おめでとう」と言われ、「おめでとう？」と、よく分かっていない自分半分、恥ずかしさ半分でした。

幡再生という言葉も知らなかったので。

――幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

嫌な経験ではなく、個人的なことですが家族から万が一のことを心配し、基本乗り合わせはしないようにと言われました。乗用車があるのに車出しのお手伝いができず、お役に立てないことを今でも申し訳なく思っています。

――その後、復興再生部の活動や石井麻木さんの写真展にと、複数回活動に参加されたと聞いています。その活力はどのようなものでしょうか。

幡再をもう少し知りたくなったのかもしれないですね。初参加のときにもらったパワーを幡再の活動に使いたかったのかもしれません。

じっとできなかったのかもしれませんね（笑）

石井麻木さんの写真展には物販と設営のお手伝いに行きました。お手伝いの方が少ない時間帯があるということで、「短時間だけ」と思っていたのですが気づいたら3日間お手伝いに行っていました。

麻木さんとは写真展で初めてお会いしました。写真展が終わり、じんわりとした存在感が私の中に残していった方でした。やはりお人柄なのでしょうね。

――幡再の活動に対する印象があればお聞かせください。

地域の方はもちろん、応援してくださる方、幡再生、出逢った人たちに寄り添い、大切にして活動をしていると感じました。

――これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

このまま変わらず。でも変化しながら続けていってほしいと思っています。

――読者に一言あればお願いします。

「日常のありがたさ」ですね。当時の息子の一言です。

一時帰宅をしている息子と、テレビを観ながら少しの小言を子供たちに言いながら家族5人で夕食を食べる。

その時間がどんなものにも代えられない時間だったことが、熊本地震後に初めて気づかされました。

分かっているようで分かっていませんでした。

いつもと変わらない毎日を過ごせることがどんなにありがたいことか、そんな時間を大切にしてもらえたら、嬉しいです。

――伝えたい想いなどありましたらお願いいたします。

「阿蘇大橋を見たときの絶望感は凄かった。土砂崩れも心配で逃げ道がない。ずっと緊張状態やった」

今回この冊子の件で、息子に少し相談をした、その返信です。

わずか3〜4行の文面ですが、本震後、初めて素直な自分の気持ちを打ち明けてくれました。

涙が出てきました。

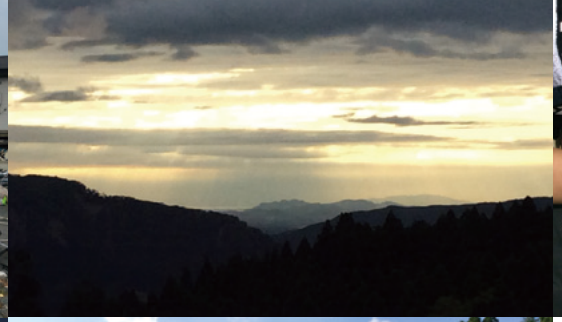
このお話しをいただかなければ、息子が感じた熊本地震を知ることがずっとなかったと思います。

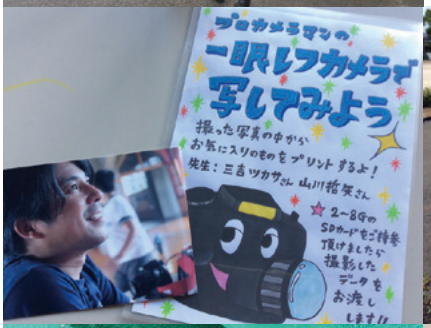
そんな機会を与えてくれた、ユカリさん、塚本さんに幡再の皆さんに本当に感謝しています。

ありがとうございました。

これからも自分のペースでお手伝いができたらと思っています。

よろしくお願いします。




プロカメラマンの
一眼レフカメラで
写してみよう
撮った写真の中から
お気にスリのものをプリント するよ!
先生:三吉ツカサさん 山川拓矢さん
☆ 2~8Gの
SDカードをご持参
頂けましたら
撮影した
データも
お渡し
します!

南阿蘇大復興祭

東海大学・南阿蘇キャンパスで学生生活を送っていた生徒たちは熊本地震により、環境が一変。南阿蘇の素晴らしさと離れていった仲間たちをもう一度集めたい一心と、地元の方々と協力して企画し、成功させた「第一回・南阿蘇大復興祭」。復興祭と「阿蘇復興への道」の中心人物となった原田さん、二代目代表・石田さんに南阿蘇大復興祭成功までの道のりを訊きました。

HATAGAYA RE-BIRTH UNIVERSITY

VOL.7

「震災前の阿蘇に戻すために、何かするしかないと心に決めた」

原田健汰
埼玉県出身
／青森県在住
飼料会社勤務

東海大学生時代に熊本地震で被災し、
その後「阿蘇復興への道」を立ち上げ、
その後「南阿蘇大復興祭」の中心人物となる原田さん。
被災直後から変化していった心境。そして後輩たちに託した想いを訊きました。

——幡再を知ったきっかけを教えてください。

学生時代にバイトをしていた旅館「朝陽」が熊本地震後に幡再の拠点となり、そこでユカリさんとお会いしてから「幡再」を知りました。

——そのときの印象を教えてください。

正直、はじめは被災者として心の整理もついておらず、幡再をはじめ多くのボランティア団体の活動に疑問を持っていました。ボランティアの方の中にはやたらに家を解体したり、災害ごみを集めるだけ集めて分別せず集積場に投げ捨てる人もいました。

それが原因で喧嘩しそうになったこともあり、ボランティアに対して悪いイメージを持っていた一面もありました。

初めて見た人にとっては瓦礫に見えても、自分たちからすれば壊れた家も、下宿も、ゴミ捨て場になった校庭も全部が思い出でした。それを雑に扱われてしまうのなら、いくらボランティアで被災者のために活動してくれていると分かっていても「自分たちの手で片づけたい」と、思っていました。

なので、幡再を知って実際に参加するまではだいぶ時間が経っていたと思います。

——それでも幡再の活動を手伝おうと思い立ったきっかけを教えてください。

初めて幡再と関わった活動はORANGE RANGEさんとのイベントでした。そのイベントをきっかけに、はじめはその御礼になればと活動に参加をしました。

——初参加のときの感慨を教えてください。

ORANGE RANGEさんとのイベントが決まってからは頼ってばかりでは申し訳ないし、イベントを手伝ってくれる幡再がどのような団体かを知らなくてはいけない、と感じたので参加しました。

「ボランティアで草刈りなんかして何になるんだ…？」と、あまり乗り気じゃなかったのを覚えています（笑）

「毎年やっている地元の人だけでやったほうが早いんじゃね？」みたいに思っていました（笑）

——実際に活動に参加していかがでしたか。

活動を通して感じたことは、幡再に来られる方々は被災した人の経験や気持ちを学びに来ているのだということでした。

ただ被災地で活動して「良いことをした」という自己満足ではなく、被災者との会話や一緒に作業をすることをとても大事にして、その土地の文化や本当に必要とされていることを理解しようとしてくれているんだ、ということを感じました。

それに気がついてからは、自分から積極的に活動させてもらうようになりました。自分自身も幡再の活動を通して、新しく知った熊本のこともたくさんありました。

——三線サークルをやられていたそうですね。どのような経緯で三味線をやられていたのでしょうか。また、ORANGE RANGEさんと共演されていかがでしたか?

三味線をはじめたのは、かわいい先輩がいたからです（笑）

あとは大学で一番の友達が、沖縄県出身で「三線サークルに入る」と言ったのがきっかけです。初めてユカリさんと話したときに、三線サークルに在籍していることを話したことから共演の話が生まれて、正直驚きました。

地震が起きてからは、今まで年に何度もやっていた老人ホームや祭りでの演奏機会がなくなってしまい残念だったのですが、ORANGE RANGEさんが来てくれるということで、地震後も三線サークルが活動を続けるきっかけになりました。

大学がなくなって大好きだった阿蘇での生活ができなくなってしまったことでみんな落ち込んでいましたが、有名なアーティストの方が来てくれたことで、「まだまだ見捨てられたわけじゃない」と感じました。

学生にとっても、特に三線サークルのみんなにも良い思い出になったんじゃないかなと思っています。

このときから震災前の阿蘇に戻すために、何かするしかないと心に決めたのを覚えています。

——「阿蘇復興への道」はどういった経緯で始まったのでしょうか。

東海大学農学部は、日本全国から学生が集まる大学です。そのため地震後は多くの学生が地元に避難しました。しかし、お世話になっていた下宿の大家さんや熊本県出身の友達はまだ被災地で大変な生活をしている。

そうした状況に罪悪感を感じていたり、大好きな阿蘇のために「なにかしたい」と思う学生が各県で自然発生的に募金活動を始めていきました。徐々にそれが大きな動きとなって、問題が起き始めました。

「SNSなどで募金詐欺に気をつけろ」などと情報が拡散されてしまったり、街頭で使い道がはっきりしない募金に対して、お叱りを受けるようなことが各地で起きました。

そこで、東海大学生で募金のお願いをするときには全国共通で同じ目的とルールを決めて活動報告や募金金額の報告を行う団体を立ち上げました。

それでできたのが「阿蘇復興への道」です。

1500万円を超える募金が集まり、願いを込めて、学生村の復興のために役立ててほしいという想いから南阿蘇村に寄付しました。

——2016年の「南阿蘇大復興祭」開催の経緯を教えてください。

募金をきっかけに「せっかく動き出したこの団体をそれだけで終わらせてしまうのはもったいない」という思いから、何か別の活動を始めようと決めました。

地震で学校や下宿、楽しかった生活などたくさんのものを奪われたけれど、阿蘇に大学ができてから40年の歴史の中で培った、大家さんや村の人たちと協力してみんなで楽しい生活を作り上げていきたかったです。

そして先輩たちが受け継いできた「人と人の繋がりだけは絶対に奪われないようにしよう」という目標を立てました。そこで必要に

なるのは、学生と村の人が一緒に作り上げる何かを続けて、学生自身が「阿蘇を忘れないようにしなければならない」と思いました。

地震で南阿蘇には安全性の面で、不安なイメージがついてしまいましたが、いずれ大学をもう一度阿蘇に建てるようにするには、一人でも多くの人に阿蘇の良さや、大学が阿蘇にある必要性を知ってもらい、社会の意見を変える必要あるということでした。

その中で学生と村の人の繋がりを象徴するものとして学園祭を阿蘇でやりたい。

それが「南阿蘇大復興祭」を開催したきっかけでした。

――南阿蘇大復興祭の当日、ひどく疲れていた印象が残っています。やはり大変でしたか?

疲れてはいたと思います。でも、あまり気になりませんでした。

それ以上に自分自身が「南阿蘇大復興祭」をやることで意味があるのか迷っていた気がします。実は、募金活動から祭りをするとなった時点で、「阿蘇復興への道」のメンバーは半分に減りました。

抜けていったメンバーの気持ちはわからないけれど、なにか気に入らないことがあったのだろうと感じました。それからもメンバーは徐々に減って祭り直前には当初の5分の1ほどにまで減っていたと思います。

祭りの当日には県外からも多くの人が来てくれてテレビや新聞、SNSでも阿蘇の良さ、大学の必要性は広まったように感じましたが、祭りに関わってくれた学生以外で、祭りに来てくれた学生がとても少なかったことが心残りとしてありました。

メンバーには「ここで何もしなければ、阿蘇を知っている学生が全員卒業したときに確実に村と学生の繋がりは途切れる！」と伝え、自分自身にも「たとえ自分一人になってもこの祭りだけは成功させる！」と言い聞かせていました。

ですが、正直不安でした。

祭りまでの時間が限られる中で、学生のみんなの気持ちを一つにしきれず、祭りを成功させることだけ考えて突っ走ってしまったことで、逆に阿蘇から学生を遠ざけてしまったのではないか？

祭りの後もしばらくはそう感じていました。

――そこで得た、かけがえのないものはありますか。

かけがえのないものは得てはいません。もともとあったかけがえのない人と人の繋がりを、なんとか繋ぎ止めることができたのではないかな、とは感じています。

――現在「南阿蘇大復興祭」「阿蘇復興への道」は石田さんに引き継がれていますね。その活躍ぶりを先輩としてどのように眺めていますか?

自分がやったことは無駄にはなってなかったなと思わせてもらっています（笑）

阿蘇で育った学生であれば、阿蘇の良さを分かって、また阿蘇で暮らしたいというのは当然ですが、大学は必ず卒業が来てまた新たな学生に入れ替わる。

今まで通りに阿蘇で生活していれば、自然と引き継げた繋がりのバトンは、誰かが率先して動かなければ、繋がらないものになってしまった。自分も阿蘇で育った先輩たちから、楽しみ方や生き方といった繋がりを引き継ぎました。

先輩たちから引き継いだものだからこそ、また自然と心が繋がる大学に戻るまで、何とかしたい一心でした。心が繋がる大学に戻れば、そこからは優秀な後輩たちが大変なことと分かっていながらも、自分にはできなかった仲間を増やすことや、繋がりもより広く深いものに変えて、また次の世代に渡していってくれる。

ほんとに大した後輩だと日々ジェラシーを感じています（笑）

――幡再の活躍を通じて、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

新しいつながりができたこと、幡再を通じて全国に仲間ができたことです。

――幡ヶ谷再生大学と携わり、嫌な経験がありましたら教えてください。

ユカリさんのプレッシャーですね（笑）

――大学を卒業後、幡再の活動によく参加されていますね。その想いをお聞かせください。

幡再では被災地のことを知るために、現地の人との交流を大切にしているように感じたからです。地震前の楽しかった大学生活の話や南阿蘇村の歴史について、幡再生の方たちに語りべをさせてもらって、文化を知ってもらえるとすごくうれしい気分になりました。

それから逆に他の文化も知りたいと感じるようになって、できる限り活動に参加させてもらっています。

――これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

どれだけ頑張っても自然の力には敵わないけれど、もし何かあったときには自分は何をすればいいか、相手のことを考えて行動できる仲間が日本中に増えたらいいなと思います。

――読者に一言あればお願いします。

もし熊本へ遊びに行く機会があれば、ぜひ阿蘇まで足を伸ばしてみてください。その際には「阿蘇復興への道」の語りべを是非お願いしてみてください。きっと僕たちが過ごした楽しい学生村を案内してくれると思います。

それは遊びに来てくれた方だけでなく、阿蘇での暮らしを体験していない後輩たちも、語りべを通じて阿蘇の暮らしを感じる機会になります。南阿蘇学生村の歴史を未来に伝える仲間を増やすことになると信じています。

どうぞよろしくお願いいたします。

HATAGAYA RE-BIRTH UNIVERSITY VOL.7

「自分らが正しいと思った道を、初心を忘れず貫いてほしい」

石田仁星
大分県出身
／熊本県在住
大学生

熊本地震で被災しながらも「阿蘇復興への道」の活動を引き継ぎ、
2代目として多くの学生を牽引した石田さん。
震災を経て、幡ヶ谷再生大学との出会い、大学卒業までの激動だった
2年間の足跡、今後の想いを訊かせてもらいました。

——幡再を知ったきっかけを教えてください。

熊本地震後、先輩がバイトしていた旅館「朝陽」にユカリさんがボランティアで入っていました。そこで先輩方とゆかりさんが繋がり、そこから自分も活動に参加するようになりました。

——活動を手伝おうと思い立ったきっかけを教えてください。

ユカリさんや先輩の話を聞いているうちに、興味を持ちました。ユカリさんたちがいなければ、今の自分たちの活動の幅はなかったと考えているので、感謝の意も込めて「一緒に活動できたら」と思ったのがきっかけでした。

——初参加のときの感慨を教えてください。

ボランティア自体が初めての経験でしたので、右も左もわからずの活動の中でした。他のボランティアさんたちとの「違い」を感じました。

——それはどのような「違い」だったのでしょうか。

作業を優先するよりも、人との繋がりをまず大切にしているように感じました。

——活動されている「阿蘇復興への道」はどういった経緯で始まったものでしょうか。

熊本地震後、それぞれの地元に帰った学生が自発的に募金活動を始めたんです。せっかくなので、まとめて村に募金しようとしたときに、団体が必要ということになり、「阿蘇復興への道」という団体が発足しました。

その後、せっかく集まったからということで、語りべの活動や、南阿蘇大復興祭などの企画などの活動にも力を入れ始めました。

——語りべをしてきた日々の中で嬉しかった想いがあればお聞かせください。

初めて語りべをした際に、今まで外部から来た方に嫌悪感しかなかったのですが、純粋に話に耳を傾けていただきました。自分たちの状況を知ってもらえたことが単純にうれしく感じたことが印象に残っています。

——南阿蘇大復興祭の主催となった経緯を教えてください。

前の代表が、学生と村の方とで行なうお祭りが地震後なくなってしまったので、その「繋がりだけでも続けていきたい」とのことで、村の方々に相談を始めたのがきっかけでした。

——2017年の南阿蘇大復興祭は台風直撃により、「断腸の思いで中止を決断した」とお聞きしました。その決断に至る経緯を教えてください。

前日の土曜日に実行委員長である『道の駅あそ望の郷くぎの』の藤原社長から電話があり、「今日で（台風による天気が）ぎりぎりだから、やはり明日（の開催）は厳しい」という話がありました。

しかし、諦めきれない気持ちもあり、阿蘇キャンパスでの農産収穫の手を止め、会場に向かい、やりたい気持ちはあると伝えたました。

ですが、やはり「安全第一」でしたので中止を決断しました。

しかし、はたから見れば失敗に思えるかもしれませんが、この復興祭準備を通して、内部での目標は達成したかのように思います。

後輩たちに想いや繋がりを今後に繋げられたら本望です。

——「南阿蘇大復興祭」と「阿蘇復興への道」をリーダーとして引っ張っていく上で、かけがえのないものを得られましたか。

普通の大学生じゃできないことをたくさん経験させていただき、普通ではありえないものを得たと思っています。

自信や、大人との関わり、人をまとめることの大変さ、後輩たちに伝える難しさ、これは代表をしなければ感じ得なかったことだと思うので、本当にやってよかったなと感じています。

——「南阿蘇大復興祭」と「南阿蘇復興への道」を今後引っ張る、次期代表へエールがありましたらお願い致します。

自分らが正しいと思った道を、初心を忘れず貫いてほしい。

大変なことはたくさんあると思うけど、自分で限界を決めず、常にチャレンジしてほしい。

どうすれば、外に伝わるのか、後輩たちに伝わるのか、繋がりを繋げられるのか、一番大事なところが守れればそれでいい。

殻を破って成長した姿を一年後に見れることを楽しみにしています！

——2016年末、南相馬で行われたクリスマス会（細美武士が毎年南相馬BACK BEATで行っているイベント）や東北ライブハウス大作戦の忘年会を回ったと聞いています。どのような経緯で参加して、また参加して感じたものがあればお願いします。

ユカリさんから「彼女もいないし、暇だろ！じんせいも東北行くか！」とお誘いいただきました（笑）

三線を片手に嘆願書を持って東北へ行きました。

初めての東北で「今さら？」などと言われないかとか、「署名書いてくれるかとか、気にしなくてもいいところばかり気にしていま

した。

会場では細美武士さん（P,117）のファンの方々と触れ合い、思いの強さや結束力を肌に感じました。

今の状態でもう一度参加したい気持ちでいっぱいです。

――地震発生から今日まで、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

あのBRAHMANが、僕らの企画した「南阿蘇大復興祭」で無料ライブをしてくれたことですね。

そしていろいろな方に応援していただいていること。先輩たちから信頼されたことなどいろいろありますが、やはり一番は2代目の役割だと思っていた「地震を知らない一年生たちへの継続」でした。

2017年の復興祭が近づくにつれて、一年生との距離が近くなったり、心を開いてくれたり、「楽しい」と言ってくれたりと、想いが少しずつでも伝わっているんだな、と感じました。

2016年に先輩が始めたことが、「少しは繋げられたのかな」と感じたことが最近特にうれしく感じました。

――幡再と携わり、嫌な経験がありましたら教えてください。

やはり、アーティストの方々と関わる機会も少なくないため、深く知らない周りの人や大学の人から、「イベサー」やら「アーティスト目当て」などと言われることには「何も知らないくせに」と感じていました。

しかし、「それを気にしていては負け」だと思い、自分が思うようにやりたいことをやるように気をつけました。

――2018年春に大学を卒業する石田さんにとって、この過ごした激動の2年間は役に立ちそうですか。

この2年間は、私の人生の中で大きな転機となりました。

なんの職に就くとしても、この経験は必ず役に立つと確信しています。

――これからの幡再に期待することがあればお聞かせください。

さらに仲間を増やし、自分のようにつまらない人生を送っていた人間と関わる機会がこれからもあったらいいなと思います。

――読者に一言あればお願いします。

東日本大震災が起きたとき、私は中学3年生でした。

距離が遠いこともあり、どこか他人事でボランティアに行くこともありませんでした。

大学生になり、自分の頭で考えるようになったときに熊本地震が起こり、大切な村と人がバラバラになり、変わり果てていきました。

まさか、自分の身にこんなことがあるとは思っていませんでした。

ちょっとでも危機感をもち、当たり前のことに当たり前に感謝し、大切な人と毎日顔を合わせられる幸せを感じながら日々の生活を送ってほしいと思います。

たとえイベントがなくとも、自分たちが卒業しても、南阿蘇に遊びに来てください！！

それだけで南阿蘇は元気になります！

大学がそこにないと、学生が村にいないとダメなんです。

市内から通うんじゃダメなんです。

何年後になっても、いつか、大学ができたときのように、その時初代がいたように、ゼロになってしまったのなら、また自分らが基礎になれるように活動します。

宜しくお願いいたします。

2017年10月22日に開催予定だった『第2回 南阿蘇復興祭』は台風により中止。2018年1月21日に日を改めて南阿蘇町久木野総合センターにて開催され、アーティストライブには片平里菜、the LOW-ATUSが出演しました。

「私たちも次の世代に『興味』を持ってもらうような活動をしていきたい」

東 知史
熊本県出身
／熊本県在住
（同）L5design
西原村商工会青年部・副部長

熊本地震を経て全国各地から支援を受けた東さん。
受けた支援をより有効に、より広げようと尽力してくださいました。
支援と共に多くの出会いがあり、繋がりが生まれ、
そこから感じた想いを訊きました。

――震災直後はどのような状況だったのでしょうか。

地震後、うちの村に支援の話をいただく際、全国からの支援を受け入れる体制がまったく整わない状況でした。せっかくの好意が無駄になってしまわないよう私たち青年部で手助けしようと、ボランティアさんや物資の受け入れなどを手伝っていました。

そこで私たちも全国のボランティアさんと毎日話しているうちに自然と、「うちの村にも還元したい」という想いになりました。

――幡再を知ったきっかけを教えてください。

地震のあとに私が商工会青年部で活動している、と知った昔のバンド仲間や先輩たちからトーキョータナカ（MAN WITH A MISSIONのボーカリスト Hatasai Magazine Vol.6 P,34）さんを紹介していただき、支援のお話しをいただきました。

それまで東北ライブハウス大作戦の名前は知っていたのですが、幡再の存在はこのときに知りました。

――幡再の活動に初めて参加したときの感慨を教えてください。

TOSHI-LOW（学長）さんって、良い男だなと思いました。

それで集まる幡再メンバーなのだから、こういう活動が長続きしているんだなと空気で分かりました。

――常総リユースTシャツで「NISHIHARA」「MINAMIASO」のTシャツをデザインされたのは東さんだとお聞きしました。どのような経緯で常総リユースTシャツを知り、デザインに想いを込めたのかお聞かせください。

恥ずかしい話になりますが、私たちはそのお話をいただくまで常総市での水害のことをまったく知りませんでした。こちらに募金をそのままいただくのではなく、茨城から熊本へ、しかもそれを形で表せる素晴らしい案をいただいたと思っています。

その際、その証として“とある方”に数時間かけてお願いした末に承諾していただき、「ガンバッペシ」の文字を書いてもらい、デザインに入れさせていただきました。

――なぜ「ガンバッペシ」だったのでしょうか。

これを見た方は「ガンバッペシってなんだろう？」と興味を持ってもらえれば茨城の話になる、と思ったからです。

それに、せっかくいただいたご縁の話を西原村だけでなくこれを機にまわりの地区と一致団結できればと思い、被害の多かった益城町、南阿蘇村、高森町の青年部にトーキョータナカさんと話しに行き、賛同してもらいました。

各地区でもTシャツを見てすぐに同じ支援だと分かるデザインにしました。

――常総からの熊本支援Tシャツを5千枚、熊本に送って使ってもらう話を聞いたときの気持ちをお聞かせください。

ありがたかったことが第一ですが、このTシャツのおかげで私たちにもさまざまな繋がりを作ることができました。

そしてこのことは「是非、皆さんに知ってもらいたい」と思いましたので、小中学校に赴き生徒さんに幡再の冊子を見てもらい、お話をさせていただき、子供たちもこの機会をきっかけに水害のことを知ってくれました。

こういう支援の仕方もあると思ってもらい、「Tシャツをほしい」との声も聞けたのはうれしかったですね。

――2016年の南阿蘇大復興祭の際、「NISHIHARA」「MINAMIASO」のTシャツを着ていた方が多かった印象が残っています。自分がデザインをみんなが着ている光景はどのように映りましたか？

みんなでTシャツを着ている光景を見て今回の支援のことを知らなかった人たちにも、この支援とBRAHMANの出演の意味を知ってもらえたかなと思っています。

――地震発生から今日まで、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

全国の皆さまからたくさんの支援をいただきましたが、私が見てうれしかったのは子供たちがテレビでしか見たことがないような方々が、こんな村まで来てくれて握手や写真に応じてくれ、それを喜んでいる姿が一番うれしかったです。

とくに一番きつい時期に役場に狼（MAN WITH A MISSION：前途）の方々が物資を届けに来てくれたときに「役場が明るくなった」と村長が喜んでいたのがうれしかったです。

ただ事前に村長には「狼のベロが出ていますが、そこはご了承ねがいます」と説明に行きました（笑）

――幡再と携わり、嫌な経験がありましたら教えてください。

そうですね…。最初にユカリさんの運転する車に乗ったときですかね…。

「ユカリさんストップ！ 違う！ それブレーキじゃない、アクセル！」ってやり取りは思い出すと恐ろしくもあり、微笑ましいエピソードですね（笑）

——これからの幡再に期待することがあればお聞かせください。

この冊子を見ている皆さまは音楽からボランティアに興味を持った方々が多いのではないかと思います。

今回、うれしいことに幡再を通じて音楽に興味を持ってくれた子供たちがいます。そのことだけは記したいと思いました。

私たちも次の世代に「興味」を持ってもらうような活動をしていきたいと思います。

何より幡再には、今後もこのような素晴らしい活動を続けていただきたいと思います。

——読者に一言あればお願いします。

まだ大変であろう東北の方々が、熊本での活動に多く参加していることに、なにより驚きでした。

東日本大震災のときにはテレビで見る光景を見て、募金などはしましたが、そのときは現地にボランティアに行くことは考えてもいませんでしたし、お恥ずかしい話、実際に自分の身に起こってから想い、知った部分が多々ありました。

今回の皆様からのTシャツの売上の一部で、青年部で子供たちにと綿菓子機を購入させて頂きました。

村祭りなどでこの綿菓子を振る舞う予定だったのですが、販売して売上を今回起こった九州北部豪雨災害の募金と幡再さんへの復興活動にと寄付させて頂くことにしました。

この場を借りてご報告させて頂きます。

綿菓子を買ってくれた子供たちは、東北や茨城から熊本へ、熊本から朝倉大分へと理解してくれたと思います。

人を動かすのが一番難しいと思います。

だからこそバンドマンの持つパワーは素晴らしいと感じています。

「『お帰りなさい』と言われたときは、心に来ましたね」

村上隆彦
愛媛県出身
／大阪府在住
LIVE HOUSE「十三ファンダンゴ」勤務

熊本地震が起こると大阪から熊本まで現在でも足繁く通っている村上さん。
東日本大震災を経て感じた想い、音楽を通じて拡がった仲間との連帯感。
そして幡ヶ谷再生大学への想いを訊きました。

——幡再を知ったきっかけを教えてください。

直接関わりを持たせていただいたのは熊本ですが、東北によく自分自身も赴いていたので、活動自体は存じ上げておりました。

——熊本での幡再の活動を知った経緯を教えてください。

熊本地震のときに、大阪で物資を集めて現地に入ろうとしたのですが、直接的な繋がりがなかったため、知り合いのバンドマンに連絡先を聞き、いろいろとご指導していただきました。

——震災直後から足繁く熊本に来た、と聞いております。その想いを教えてください。

自分の目で見たときに、まだまだこの現状を伝えないと復興は遠いと感じたのと、仕事などでどうしても行けない人が少なからずいらっしゃるので、想いを繋ぎたいという気持ちです。

——熊本での活動の初参加のときの感慨を教えてください。

聞こえ方は悪いかもしれませんが、すごく楽しかったです。

体を動かして、地元のご飯を食べて、お話しさせていただいて。

その中で、震災のことにももちろん触れるんですが、どこで起こっても不思議ではないことを痛感しました。

だからこそ、意味のある、有意義な一日一日を過ごさなければいけないなと改めて思わせてくれました。

何より、集まる幡再生がみんな元気です（笑）

——とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

毎回、現地に行ったときは地元の人が優しいため、あたたかい気持ちになるのですが、「お帰りなさい」と言われたときは、心に来ましたね。

——幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

現地のご飯が美味しすぎて食べ過ぎて、体がでかくなってしまうことくらいですかね（笑）

——複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものでしょうか。

情熱というほど大袈裟ではないですが、街への想いや、1日も早く復興することを願っている気持ちを伝える一番の方法は、お金や言葉じゃなく、直接何回も顔を出すことだと思っているので、行ける限り参加させていただいております。

——幡再生より、笑顔を届けてくれたとお聞きしました。ご自身はどのような姿勢で活動に臨まれていたのでしょうか。

初めて参加する人はやはり右も左も分からないので、その人たちにはしっかり物事や段取りを伝えて、元気に笑顔で活動できるよう心がけております。

ユカリさんが忙しいときには代わりに段取

りを考えたりと。

怒らせると、怖いので（笑）

――十三ファンダンゴの30周年イベントでは、幡再のブース出展をさせていただきました。その想いをお聞かせください。

熊本で何度も活動に参加させていただいたので、自分たちみたいに「直接現地に行きたい」という気持ちを繋げたらと思って、ブース出展のお願いをさせていただきました。

――大阪での反響はいかがだったでしょうか？

幡再の活動を知らない方々にもブースに寄って、グッズを買っていたりしてくれたのを目にし、出展をお願いして良かったと思いましたね。

――幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

いつも現地の現状を迅速に伝えてくれて、今やるべきことを発信していただき、いろんな人と関わりを持たせてくれて、とても尊敬しております。

――これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

各地の豊かな自然で育った食材を集めて、フードフェスとか催してほしいです（笑）

――読者に一言あればお願いします。

2011年3月11日。この日から、いろんなことに対する姿勢が変わりました。

テレビ画面の中で起きている状況が理解できず、この世のものとは思えない光景に言葉が出ず、すぐに動き出せなかった自分への葛藤が続きました。

しかし、幡再を含め、現地へ向かうアーティストの背中を見たときに、僕も微力ながら「何かしなくては」と思うようになりました。

この冊子をご覧になっている方々も、そうだと思います。

でも、考え過ぎないで良いと思います。まずは自分の住んでいる街を愛して、家族を愛して、友達を愛して、好きなことにまっすぐ気持ちを向ければ、自ずと、笑顔は溢れると思います。

その気持ちが有り余ったら、東北や、熊本、被災地に気持ちをぶつけに行けば良いと思います。

そういう豊かな日々を送っていれば、もし何か起こっても、人のために動けると思います。苦しい現実が広がっていても、それを救ってくれるのは、笑顔です。

一緒にバカ騒ぎしてくれる仲間です。人を大切に。自然を大切に。言いたいことはハッキリと。

そうすれば、もっと、明日は楽しくなるんじゃないかな、と思います。

「いざという時、人と人との繋がりが本当に大切だと思います」

ヒゴヴィシャス
熊本県出身
／東京都在住
RISKオーナー／デザイナー／スケートボーダー
／アニパンクとTH eCOMMONSのベース／ロックDJ

生まれ故郷・熊本県「ヒゴ」の名を配した
「ヒゴヴィシャス」のアーティスト名で活動。
熊本地震が起こると1人で動いている最中、「幡ヶ谷再生大学」と合流。
故郷への想い、繋がり、幡ヶ谷再生大学への想いを訊きました。

――幡再を知ったきっかけを教えてください。

まわりの友人たちが幡再の関係者なので、立ち上げして間もなく自然と活動を知りました。

――故郷・熊本での幡再の活動を知った経緯を教えてください。

地震の後すぐに個人で動いていたら、同じように動いていた幡再の皆さんと情報を共有するLINEグループに入れていただいたことで、その後のさまざまな活動を知ることができました。

――どんなLINEグループだったのでしょうか。

熊本地震対策のグループLINEで、現地の状況や情報を常に共有して、物資の運搬に関する連絡網や緊急の連絡等の有力な情報源でした。

――どのような方々がいて、どなたが牽引されていたのでしょうか。

誰がリーダーってわけではありませんでした。

TOSHI-LOW（学長）や細美（武士）くん（P,117）を中心としたグループでした。熊本に直接物資を送ることができなかったので、近県に一旦集めて物資を運ぶ際、写真家の（三吉）ツカサが渋滞の情報をパソコンで調べて、迂回ルートを指示したりと、幡再の凄さを実感しました。

――音楽イベントでの収入など、ことあるごとに幡ヶ谷再生大学復興再生部に募金をいただき、ありがとうございます。その想いをお聞かせください。

自分はお店を自営していますので、現地に直接行くことがなかなかできないんです。熊本に限らず各地の被災された方や現地へ行かれる方に自分ができる精一杯のお手伝いをさせていただければ、といった思いで微力ながら協力させても

HATAGAYA RE-BIRTH UNIVERSITY
SUTUDY WORKSHOP
VOL.7

らっています。

――幡再を通じ、とくに嬉しかった想いがあればお聞かせください。

被災地の方が前向きになられたり、明るくなったと聞いたりすると凄く嬉しくなります。

それと、お客さまが「ボランティアに行ってきました！」とお店に報告に来てくださったときは毎回泣きそうになりますね。

――幡再の活動で、嫌な経験がありましたら教えてください。

まったく無いですよ。

むしろ僕も勉強させてもらっている感じなので、凄くありがたいと思っています。

――幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

人にはそれぞれできることや得意なことがあると思うのですが、何事にも率先して活動される姿勢には本当に頭が下がります。

――これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

今までまで通りの素晴らしい活動と共に、関係者の皆さまの健康を願っています。

これ期待じゃないですね（笑）

学長のユーモアには今後も超期待しています（笑）

――読者に一言あればお願いします。

いざという時、人と人との繋がりが本当に大切だと思います。

思いやりと感謝の心を大切に、毎日を精一杯生きましょう！

熊本地震の際はたくさんの方々に助けていただき、心から感謝しております。

このご恩は一生忘れることはありません。

この気持ちを忘れず、これからも微力ではありますが、自分にできることをできる限りやっていきたいと思います。

「熊本在住の俺らがしない、行かない理由はないよ!」

野原健史
熊本県出身
／熊本県在住
のはら農研塾代表／Organic farmer

オーガニックにこだわる「のはら農研塾」の代表として、
いつ誰と会っても陽気に振る舞ってくれる野原さん。
その笑顔の裏に熊本地震での被災経験、そこから学んだ、
生きるということを訊きました。

――幡再を知ったきっかけを教えてください。

娘がTOSHI-LOW氏（学長）からBRAHMANのDVDを貰ったのがきっかけですね。

――熊本での幡再の活動を知った経緯を教えてください。

友人のヒゴちゃん（ヒゴビシャス P,81）から支援金のバトンを受け取り、熊本地震後すぐ阿蘇で活動していたユカリさんに渡しに行ったときに知りました。

――のはら農研塾では減農薬、有機農法を推奨し、「農薬よりも人件費を」を実践されていると聞いています。その想いを教えてください。

その方がみんな笑顔になるから（笑）

――のはら農研塾に幡再がお手伝いに来るようになった経緯を教えてください。

幡再の活動内容をユカリさんに深く聞きました。僕自身も、共感する部分があったのでお手伝いをお願いしました。

――お手伝い初日はどんな一日になりましたか。

そりゃーキツくても楽しいに決まってるでしょ？ だって自分でやることのすべての経験がリアルに「其処」にあるからね。

そして、なぜキツイ思いをしてまで、無農薬の作物を作るかの過程の意味がすべて「其処」に有るから。

リアルが1番だからね。

俺たちは生きているんだ。

俺は、テレビの世界やバーチャルの世界でしか地震を経験してなかった。だけど今回の熊本地震を経験して、本物の地震経験をしたんだ。

俺自身、家は半壊、前震のときに瓦の雨を経験して、生きることが凄くシンプルになった。

人はいつ死ぬか分からない。

だから、良い死に方するなら、ちょっとは「世の為、人の為」になった方が俺自身死ぬときに笑える気がした。

オーガニックとボランティアは、そこから！

だから幡再のみんなにはバーチャルの世界じゃできない経験と命を作ること、本物の命を作るってこと。

そして俺のこの感覚をみんなに伝えたかった。

来てくれた子たちは、みんな理解したんじゃないかな。

その反面、知りたいことも減ったんじゃないかな（笑）

幡再生の笑顔は俺にはそんな風に見えたよ。

だから最高に面白かったよ！

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

お子さん連れの親御さんに、「また子供を連れて来たい」と言われたことですね。少しでもオーガニックの農業経験を子供たちに広めたいと日ごろから俺自身もやっているからさ。それが凄くうれしかった。

――のはら農研塾以外での幡再の活動には参加されましたか?

細美武士氏（P,117）が、熊本ボランティアチーム「ガマダス」での約束を果たしに熊本入りしたときに行きましたね。細美氏が阿蘇での民家の草刈りのボランティアをするのに、熊本在住の俺らがしない、行かない理由はないよ！

――参加されている場合、そのときの活動の印象を教えてください。

和気あいあいで、凄く雰囲気も良く、昔の人たちが普通にやっていた「手間返し」のお互い様の気分を実感できました。

胸がホッコリ良い気分でした（笑）

——のはら農研塾には幡再生が複数回に渡ってお邪魔させていただきました。印象に残っている生徒はいましたか。

やはり熊本幡再生名物男の森くん（P,38）と北九の激熱幡再生の新里くん(P,33)ですね。

——幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

幡再の輪がもっと広がれば良いと思っています！

——これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

幡再には、ますますの人の道しるべになってほしい。

俺ら、のはら農研塾も一緒になって学び、教え、共に生きたいです。

——読者に一言あればお願いします。

人と人とを繋ぐことの大事さ。
人を思いやる大事さ。
経験することの大事さ。
すべてのことを知る大事さ。
そしてすべてを繋ぐ音楽の大事さ。
其処から判断してほしい。
今からのことを。

「次にどこかで何かが起きたとき、今度は逆の立場で自発的に…」

野原由美
熊本県出身
／熊本県在住
のはら農研塾勤務

夫・健史さんとのはら農研塾を支える由美さん。
どんな苦境も笑って乗り越えてきた末の熊本地震。
震災を経て痛感した家族との絆、仲間への想い、被災者として過ごした日々、
差し伸べられる温かい手の実感、その先に見据える未来を話してもらいました。

——幡再を知ったきっかけを教えてください。

熊本地震ですね。TOSHI-LOWくん（学長）の存在があって、その後はユカリさんですね。

——熊本での幡再の活動を知った経緯を教えてください。

ヒゴビシャス（P,81）からユカリさんにお届けものを頼まれて南阿蘇へ行った際に具体的な活動内容を知りました。

——そのときに受けた印象をお聞かせください。

幡再もTOSHI-LOWくんの無二の愛や無二の想いをみんなが感じて活動されている印象を受けました。そしてTOSHI-LOWくん自ら現場に足を運んで、現場の状況を知り、現場の声を聞き、現場で地域の方々と活動をする印象ですね。

——のはら農研塾の縁の下の力持ちの奥様として、苦しかった時期がありましたら教えてください。

健史（P,81）がのはら農研塾に就任すると聞いたときは、まったく農業経験がなかったので本当に不安でしかなかったです（笑）

それに対して矛盾しているけど、今までも何度も苦境を乗り越えてきた彼だったし、彼には持ち前の探究心と努力と根性、独創的なアイデアと先見性があると思っていたので、「大丈夫！」という自信みたいな安心感もありました。

健史には常にどんなときも最初から「どうにかしてやる！」という心意気がありましたので、安心していましたね。

とにかく何もわからない「0」からのスタートでしたから、すべての行程を身に付けなければならないし、農業は頭で考えるだけじゃなく経験こそすべてと言っても過言ではありません。

それに莫大な情報を短時間、短期間で吸収していくわけなので、私にできることとしては、ストレスを軽減させることに集中していた気がします。美味しいご飯を作って家族で楽しくおしゃべりしていたくらいですが(笑)

——それでも苦境に陥ったときはあったと思います。どう乗り越えていったのでしょうか。

あとは何があったときも、「健史なら大丈夫だよ！ うちにはラッキーガールが3人もいるんだからね！！」と笑って応援していたくらいかな。

本当にそう思っていましたから。

いや、そう思うしかなかったんですよ(笑)

今現在も、彼も私も、日々悩みながら経験と共に成長させてもらっています。まだまだ進化中ですよ！

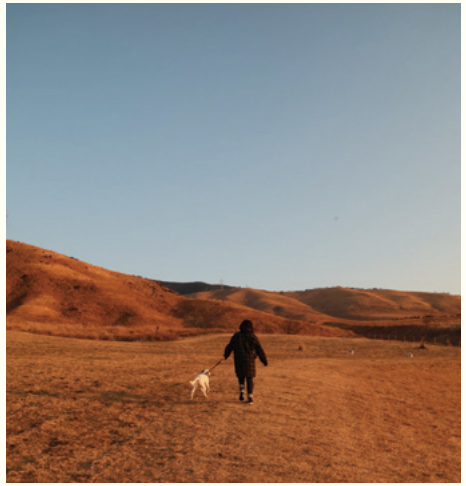
——のはら農研塾に幡再がお手伝いに来るようになった経緯を教えてください。

熊本地震のときに、私たちはすぐに自宅から避難して、のはら農研塾の倉庫で8カ月避難生活をしていたのですが、当初から私たちを支えてくれたのが、Candle JUNE（キャンドル・ジュン。キャンドルアーティスト：一般社団法人「LOVE FOR NIPPON」ラブフォーニッポン代表）くんでした。

その時期はスイカの収穫が始まったばかりで、スイカは“待って”はくれません。でも販路も流通も途絶えていたときに、Candle JUNEくんが支援物資を届けてくれた空のトラックでスイカを東京へ運んでくれて、各地で販売してくれた。

本当に感謝しかありませんでした。

他にも、のはら農研塾や私たちをずっと支えてくれていた友人の暮らしかた冒険家（ウェブディベロッパー池田秀紀とクリエイティブディ



レクター伊藤 菜衣子による夫婦ユニット）が、札幌から遠隔で友人の協力を募ってくれて「スイカ大作戦」という輪で繋がり、私たちがまったく知らないところで動いてくれました。

私たちは震度5や6がつづく環境下で、畑でスイカを収穫することしかできなかったし、余震がつづく中、周りにはもっと大変な状況の人たちがいる中でのことでしたから、本当に感謝しかありませんでした。

熊本に物資を運んでくれて空のトラックでうちへ来てスイカを福岡へ運び、そこから全国のお客様のところへ配送してくれるという、私たちだけではどうにもできなかったことを、友人たちや私たちがまったく知らない人たちがやってくれたんです。

――CandleJUNEさんとはその後、一緒に活動をされていますね。その動機はどのようなものだったのでしょうか。

Candle JUNEくんと、いろんなところへ物資を運んだり、炊き出しをして回りました。そこには、私たちが受けた感謝の気持ちを「ご恩返ししたい！」という気持ちだけでした。

そしてそれには「私たちの行動しかない」と思っていたのも動機としてありました。

この活動の延長線上で幡再の活動を知ることになり、ユカリさんに初めてお会いしたときから、想像を超えるほどの“距離”が縮まっていた気がします。それから何度か南阿蘇にお手伝いへ行きました。

そこへ来られた幡再の方たちと繋がったりしているうちに、ユカリさんが人手不足な私たちのはら農研塾へのボランティアを募ってくれたのがきっかけになったと思います。

あと、熊本地震以降、南阿蘇へ通いつづけていた幡再の熊本チームの森くん（P,38）が、うちの会社の近所に住んでいたことが分かり、よく顔を出してくれるようになったんです。

それから幡再の自主練が始まりました！

――お手伝い初日はどんな一日でしたか。

とにかく、遠方から毎週、いや時間のある限り、お手伝いをしに来られている方々にビックリしました。

こんなに熊本のことを思ってくれる人たちがいることに、心から感謝しました。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

私は、草刈機を使ったことがなかったんです。それが幡再の活動で草刈機デビューとなり、とにかくうれしかったですね！

自身の活動の幅が広がるって、どんなことでもうれしいです。

――のはら農研塾には幡再生が複数回に渡ってお邪魔させていただきました。印象に残っている生徒はいましたか。

なんと言っても森くんです！　熊本地震以降、時間がある限り南阿蘇に通いつめてお手伝いされていた印象でした。今では近所ということもあり、頻繁に訪ねて来てくれます。

うちの社員よりも私たちの活動を理解してくれているのではないでしょうか（笑）

私が忙しいだろうと、幡再がお手伝いに来てくれるときにはシェフとしてご飯を作ってくれます。とても優しくて気配りが素敵な男子です！　もはや、うちのサブメンバーと言っても過言ではありません（笑）

そして、北九州の新里くん（P,33）。初めて会ったときから男気を感じていましたが、こんなに心根があたたかく、気合いと根性がある熱い九州男児は滅多にお目にかかれませんよ！

今は朝倉市で連日のようにお手伝いされていて、「30分でも、1時間でも現地でお手伝いができるなら行く」と言っていて、本当に素晴らしい男子です！

――幡ヶ谷再生大学の活動に対する想いがあればお聞かせください。

熊本地震のときに、人は1人では何もできない。何かあったときの防災とは、人と人との繋がり、コミュニティーの大切さだと実感しました。

私たちがこんな風に全国のたくさんの方々に助けられて支えられたのも、今までの健史やのはら家の誰に対しても見返りを求めない愛情、繋がりがあったからだと思えました。

私たちには2人の娘がいますが、この子たちに残してあげられるものは、私たちが大切にしている人たちとの繋がりだと思っています。私たちが大切にしているコミュニティーが彼女たちを守ってくれると思っています。

幡再がやってきた熊本での活動もそうですが、そうやって支えられてきた人たちは、次にどこかで何かが起きたとき、今度は逆の立場で自発的にその場所へ行き大変な思いをされている方たちを支える。

本来の人のあるべき姿だと思います。

これからもずっと、そんな想いを持って活動できる「幡ヶ谷再生大学生」が増えてほしいと思います。

――これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

幡再の想いが日本中にはびこるまで、TOSHI-LOW学長もみなさんも頑張ってください！！！

「小さくてもその街や村には、必ず人が生活していますからね」

野間太一
鹿児島県出身
／鹿児島県在住
サウンドエンジニア／ WALK INN STUDIO! 代表

鹿児島で生まれ育ち、20歳のときに上京し、
西片明人率いるSPC Peak Performanceに在籍。
2011年、郷里に戻りスタジオ「WALK INN STUDIO!」を立ち上げた野間さん。
震災を通じて感じた想い。鹿児島だからこそできること、
地方だからこそできることを訊きました。

――幡再を知ったきっかけを教えてください。

東京にいたときBRAHMANのスタッフをやっていましたので、2009年かな？ 紺色のTシャツを作ったときから知っていました（笑）

――初参加はいつですか？ またそのときの感慨を教えてください。

みんなで富士山に登った「山岳部」が立ち上がったころですから…2010年の8月だったと思います。

――熊本での幡再の活動を知った経緯を教えてください。

熊本地震が起きてから、鹿児島の仲間たちとグループLINEを作り、その日から僕らなりの復興支援活動が始まりました。

鹿児島のグループLINEは地元バンドマンや今まで一緒に仕事をした仲間たちで150人

をすぐに超えました。

東京チームから動き方を教えてもらいながら余震の続くなか、全国から届いた物資を鹿児島の仲間たちと何度も、何度も熊本に物資を届けました。

地震発生から2カ月、幡再が南阿蘇に入っていたのでユカリさんに会いに行きました。

そこから幡再のもと、鹿児島でチームを組んで参加することになりました。

――活動に行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

2011年3月11日以降、どう動けば良いか？僕と同じように、もやもやした奴らはたくさんいると思っていました。

そんなエネルギーを持った人間に後悔はさせたくなかったです。

僕らは鹿児島に住み、鹿児島に住む人たちは「ココを何もない田舎」だと言います。

そんなことはない。

人はいるし、街も生きている！！

なにより何かしたくてウズウズしている人たちは田舎の方が多い気がします。

僕らは人を救いたいという気持ち、その前に一番近くの人は守れているのか？ と自問自答する日がありました。

その日々と無関係ではないと感じています。

――複数回、活動に参加し鹿児島から多くの仲間たちを引き連れて参加してくれていますね。その情熱はどのようなものでしょうか。

田舎と言われている鹿児島は、「何が足りないか？」というと共有できるコンテンツが少ないことだと思います。

もちろん各々、ゴルフ、車、バイク、洋服、映画、音楽、他…いろんなコミュニティーはたくさんあるのですが、それぞれが繋がれるほど大きいコミュニティーではないんです。

人が少ないですからね。

復興支援はそういうのを飛び越えて、繋がれる1つの活動だとも思っています。

人と出会えるきっかけ、物ごとを知るきっかけ、その土地の歴史を知るきっかけ。

そのきっかけさえあれば、誰だって次の何かに繋げようと思うんじゃないかな？って考えています。

20歳まで鹿児島に住みながら、やりたいことを探していた僕と同じような人たちはたくさんいると思っていて、その人たちに何かのきっかけを絶対に与えられる活動だと思って、鹿児島からたくさんの人を幡再に参加させていただいております。

――自身が主宰する音楽フェス「WALK INN FES!」ではブースを出展させていただきありがとうございます。どのような趣旨で始められたフェスなのでしょうか。

東京時代、サウンドエンジニアの仕事をしながら「FES（フェス）って何なんだろう？」と思って過ごしていました。

SPCに在籍し、全国各地のいろんなFESというものを経験させてもらいました。

いざ地元・鹿児島に帰ってきたときにも「みんなにFESやらないのか？」と言われました。

有名なアーティストをブッキングして、たくさんのお客さんに来てもらうことがFESの成功には繋がらない。せっかく鹿児島でやるのなら『鹿児島に住んでいる人たちの表現の場』になれば良いな！と思って始めました。

ゲストバンドに頼るようなFESではなく、ゲストバンドに体感してもらい、逆に刺激を与えられるようなFESを作れないかなぁ？と考えました。

そして地元の風物詩的お祭りになれれば良いな、と思い日々地元の方々とコミュニケーションをとっています。

――フェスを通じ、嬉しかった経験を教えてください。

ゲストバンドを見に県外から来たお客さんが、今まで経験したFESの中で一番、雰囲気が良かった！と言ってもらえたことですね。

田舎の武器ですね！！

――幡再の活動を通じ、とくに嬉しかった想いがあればお聞かせください。

ユカリさんに会えたことですね。

鹿児島から幡再の活動に行き、ユカリさんに会って帰ってきたらみんな良い顔をして帰ってくるんですよね（笑）

ユカリさんといると、泣けて、怒って、笑えて、かっこつけることまでできる気がしますね。

――幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

今は、ないです（笑）

――袴野区長さんから高額の義援金いただいた話をお聞きしました。どのように集まった義援金なのでしょうか。

フラワーカンパニーズ（ロックバンド）が熊本地震以降、“震復興支援チャリティーキーホルダー”をツアーの間に売って、そのお金を九州でいろいろ動いている僕に相談したいということになりました。

幡再を通して、僕自身も仲良くさせていただいている仮設住宅に住む袴野地区の方々に渡そうということになりました。

フラワーカンパニーズのメンバーと袴野区長さん（P,10）のお宅まで行き、お金を手渡すことができました。

http://capitalradio1.jugem.jp/?eid=1061

――読者に一言あればお願いします。

僕が熊本地震で動けているのは、やはり2011年3月11日の東日本大震災が大きかったですね。

それまで一緒に仕事をしていた仲間たちと別れ、鹿児島に帰って来て3カ月後に起きた震災でした。

僕はちょうどこの日に第一子が産まれる直前で、病院に嫁さんを運んで行き、西片さんに報告の電話をしようと何回も電話をかけたのですが繋がらず、「おかしいなぁ」と思いながら病院へ行きました。

病院に到着したら看護婦さんに「TVで凄いことになっていますよ！」と聞いて初めて状況を把握しました。

その後すぐにSPCが「東北ライブハウス大作戦」を立ち上げ、BRAHMANも「幡ヶ谷再生大学」の復興再生部として動きだしていました。

僕は、なかなかスタジオの物件が見つからず、モヤモヤした半年を過ごしていました。

東京の仲間たちの動きを横目に、「僕は今からお金を使ってWALKINNSTUDIO!を立ち上げることに意味があるのか？」ってことをずーっと考えていました。

あんなに東北に通い、いろんな感情を背負って動き回る彼らを尊敬もしたし、嫉妬もした。

今必要なのは、「動くこと」と「発信すること」。頭では分かっていても九州の端っこ鹿児島で彼らと同じ動きをするのは不可能だと思いました。

悔しくて、言い訳ばかり考えていました。

東日本大震災から半年経ったころ、ようやく「WALK INN STUDIO!」をオープンさせることができました。それと同時に1人で東北に向かいました。

仙台まで飛行機で行き、レンタカーを借りて海沿いを2日かけて大船渡を通り、宮古まで走りました。

『何やってたんだろう、俺は。もっと早く来れたじゃないか』って、田舎のテレビで見ているものとは全然違う景色がそこに広がっていました…。

そんな折、学長（TOSHI-LOW）と会うことがあって「みんなと離れた鹿児島で俺何やれば良いか分からなくなってきた…」って相談したんです。

あの壮絶な経験をした東北の人たち、それをどうにか救おうと動いている東京の仲間たち。

鹿児島に帰って『ライブハウス作ります！』ってなんて安易なんだろうかと…。

それまで葛藤してきた想いを学長にぶつけました。そうしたら『お前はお前が住んでいる街で、その街に必要なことを発信し続ければいいって！』

『俺たちは俺たちで、発信しつづけるから困ったときは鹿児島から手を貸してくれ！』と言われました。

そのときは、言われていることのすべてを理解してなかったと思います。

ただ「自分の住む街で必要なことを！」って言葉が妙にしっくり来たんです。

その日から「WALK INN STUDIO!」としてほんとうの意味で動きだせた気がしました。

地元のお祭り、学園祭、カフェライブ、ライブペイントと、行政や企業のイベント。

鹿児島で欲している若者や音楽好きのおっちゃんたちとできるだけ一緒にいようと思いました。

鹿児島に住む人たちが何を求めて、何に対して悩んでいるのか…。

「WALK INN STUDIO!」を建てたあとに、ライブハウスをつくりたかったのですが、それも辞めました。

昔から鹿児島には「LIVE HALL CAPARVO」というライブハウスがあるのだからとその必要性を感じなくなっていました。

「WALK INN STUDIO!」を運営しながらも「CAPARVO」の皆と“街づくり”のことを考え出していました。そして、そこで生まれたコミュニティーを繋いでいこうと思いました。

そして2016年4月、熊本地震が起きました。

鹿児島も相当揺れました。

地震が起きて、すぐ西片さんに電話したんです。

「もし熊本に行けるなら行って現地のことを教えてくれ！」と伝えられました。

翌朝すぐに熊本に向かいました。

その車中で2011年、大船渡の仲間に会いに行ったとき、ボソっと放った仲間の言葉を思い出しました。

『津波が何もかも持っていった…』

彼らは物事を選ぶことなどできず、被災したことを受け入れ、その土地で街の復興と共にただひたすら前に進まないといけない現実がある。

僕はふと、家族は？ 友達は？ WALK INN STUDIO! の仲間たちは大丈夫か？ と思い返しました。復興支援を通して、一番身近なものをより大切にできる大人になりたいと改めて思い直しました。

学長が言った『お前はお前が住んでいる街で、その街に必要なことを発信し続ければいい！』

後になって、なるほど、なんてシンプルなことなんだ！ と改めて思いましたが、身近でシンプルな物事ほど気付かないもんだなぁと思いました。

それを当たり前に教えてあげられる鹿児島に住む「大人」として、これからも幡再の活動を鹿児島に住む人たちと参加していきます。

そして地方としてくくられる他の街にも「田舎だから」「人がいないから」「やらない！」「やれない！」という言葉を消して行きたいと思います。

鹿児島でできたのなら、できるはずだと思います。

僕らは物事や人を選んでいる場合じゃない。何でもやれるし、形にできるはずです。

小さくてもその街や村には、必ず人が生活していますからね。

石井麻木写真展

2016年12月31日より写真家・石井麻木さんの15周年の写真展【15years】、東北の6年間を伝える写真展【3.11からの手紙/音の声】の設営、物販、撤収を幡ヶ谷再生大学もお手伝い。

2017年の1年間で全国9カ所を巡った“旅”は、各地でお手伝いをした幡再生、会場を貸していただいた方々、そして石井さんに何をもたらしたのかを訊きました。

「幡再にある、繋がりの輪を もっと大きくしていってもらいたいです」

まりごん（匿名）
東京都出身
／広島県在住

持病を抱えながら、遠方での写真展や活動に足繁く通うまりごんさん。
幡ヶ谷再生大学との出会いで、変化していく「自分」を話してもらいました。

――幡再を知ったきっかけを教えてください。

TOSHI-LOW（学長）くんやYU（復興再生部副部長）くんたちが幡再の活動している記事が、メンズ雑誌に掲載されていました。それを拝見して知りました。

――石井麻木さんの写真展のお手伝いを知ったきっかけを教えてください。

SAVE THE HIROSHIMA のホッチ（Hatasai Magazine Vol.06 P,23）に声をかけていただいたのがきっかけでした。広島、新宿、福岡と参加しました。

――お手伝いに行こうと思ったきっかけを教えてください。

持病があるため、治療をしながらだと参加しても迷惑をかけるのが怖く、一歩を踏み出せずにいました。ですが、まず自分が知り、できることをやろうと思い、参加を決めました。

――写真展以外の活動の参加はありますか?

あります。現地での活動は、手伝っているつもりが元気をもらって帰ります。

いろんなところに幡再を大切に思う人がたくさんいると感じます。どの現場でも「これからも頑張っていこう」って笑い合いながら、思いやりをもって暮らせたらいいなという気持ちになります。

――実際、活動を通じて「まず自分が知り、できること」はできましたか?

活動に参加するたびに自分を知ること、できることが増えていくの感じました。自分のペースでできることが毎回ありました。

――現地での活動は写真展と比べて、変わったことはありましたか?

現地での活動は手伝っているつもりが、逆に元気をもらって帰ります。いろんなところに大切に思う人が増えて、「また頑張って行こう」って笑って思って暮らせたらいいな、という気持ちになりました。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

ユカリさんや麻木ちゃんをはじめ、多くの温かい人たちとの出逢いと自分の生きる場所を見つけられたことかな、と思います。

――幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

広島から石川県・金沢へ行ったときも、広島から福岡県・朝倉に行ったときも人の温もりに助けられ、嫌な思いをしたことはありません。

むしろ元気をわけてもらっています。

――幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

これまでと同じく、幡再の現場をずっと率いてきたユカリさんと一緒に参加者も集まれば、大きな力になるのでずっと継続してもらいたいです。

幡再にある、繋がりの輪をもっと大きくしていってもらいたいです。

――これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

期待することは、まだ終わってないこと。これからも変わらず知ることが大切で、微力でも継続し繋げることを期待したいです。

――読者に一言あればお願いします。

自分だけにできることは必ずあると私は思っています。

それをみつけたら、自分のやれる範囲で継続して、繋げていくことができたらうれしいですね。

「私の中で福島を愛する気持ちが 大きくなりました」

北畠和恵
福島県出身
／東京都在住
調理師

福島県で生まれ、東京で育った北畠さん。
2011年3月11日以降、故郷へ募る想い。
そこで出会った石井麻木さんの写真たちと幡ヶ谷再生大学は、
闘病中の彼女に何をもたらしたのかを訊きました。

――幡再を知ったきっかけを教えてください。

東日本大震災後、すぐに現場に入れなかったため、物資を提供できる方法を探していたところ、SNSだったと思いますが、幡ヶ谷で物資を受け付けていることを知りました。

その翌年に「幡ヶ谷再生大学」という存在を知ったと思います。

――石井麻木さんの写真展のお手伝いを知ったきっかけを教えてください。

Twitterで幡再が募集をかけているのを拝見しました。

――お手伝いに行こうと思ったきっかけを教えてください。

福島で産んでもらい、子供のころはたくさんの時間を過ごしました。

祖父母の死、両親の死、東日本大震災が続き、私の中で福島を愛する気持ちが大きくなりました。

震災後、麻木さんの写真展を観に行くようになり、東北を愛してくださることが、うれしくて、ありがたくて。観に行くたびに感謝の気持ちが大きくなり、いつか「ありがとう」を伝えたいと思うようになりました。

幡再の募集を見たときは恩返しできるような気持ちになり、すぐに応募したのを覚えています。

――現在までに何回ほどお手伝いに行かれましたか。

2017年の一年間で、幡再の活動が12回、麻木さんからの依頼で倉庫整理の活動を含めますと12回の合計24回、全国12カ所26日間のお手伝いさせていただきました。

――写真展以外の活動は写真展と比べ、変わったことはありましたか?

イベントのブース出展のお手伝いをさせていただきました。

常総Tシャツ工場（茨城県常総市）や生木葉ファーム（福島県いわき市）にもお邪魔させていただきました。泥を掻き出す作業、作物に触れる作業、作品を観ていただくための作業。すべて異なる作業ですが、幡再の現場はどこも温かく、優しく、大好きな人が増えることはいつも変わりありません。

現在は生木葉ファーム、麻木さん写真展のお手伝いを継続しています。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

写真展期間中に何度も観に来て、声を掛けてくださるお客様の存在や、幡再の仲間たちが開催地ごとに励ましのメッセージをくださることで、いつもうれしい気分になります。

――幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

お客さまにアーティスト目当てだと言われたことは悔しかった。

――幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

さまざまなボランティアを経験し、幡再に辿り着きました

怪我の後遺症、治療中の病気があり、肉体労働が不自由なので、迷惑を掛けない現場を探すことが大変でした。

幡再は、無理せず継続することや、人を人として大切に扱う環境が、他の団体よりも強く感じます。

「来てくれるだけでいいよ」の言葉に何度も救われました。

大好きな人、温かい仲間が増え、私にもできることがあると教えてくれます。

これからもお世話になり、大切にしていきたい場所です。

――これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

これからもずっと、愛ある信念のある居場所でいてください。

――読者に一言あればお願いします。

麻木さんの写真展はこれからもずっと続いてくれると思います。

素敵な写真と温かい雰囲気を楽しみにいらしてください。

幡再の現場に入ることに戸惑っている方は、怖がらずに参加してみてください。

優しい仲間が各地で待っていてくれます。

「自分で見に行くということの大切さを学べました」

森 睦美
宮城県出身
／宮城県在住

宮城県で生まれ育ち、2011年3月11日以降「動き出そう」と心では思っていてもなかなか動け出せなかった森さん。
その「きっかけを与えてくれた」と話す、
幡ヶ谷再生大学と石井麻木さんの写真展について訊きました。

――幡再を知ったきっかけを教えてください。

2011年3月11日の東日本大震災後にtactics recordsのTwitterで知りました。

――石井麻木さんの写真展のお手伝いを知ったきっかけを教えてください。

2014年10月にイービーンズ仙台でのイベントで石井麻木さんの写真展があり、そのときに初めてお手伝いに行きました。それから、また手伝いたいと思っていました。

時を経て、石井麻木さんの写真展の出展のお手伝いの告知があり、迷わず応募しました。

――お手伝いに行こうと思ったきっかけを教えてください。

ただただ、麻木さんが「宮城で展示をしてくれる」ということへの嬉しさと言いますか感謝と言いますか…。

ですが、お手伝いをして麻木さんはいろんな気持ちを独りで背負って宮城での展示を開催してくれたのだな、と感じました。

嬉しさばかりではなく、東北で、宮城で麻木さんが展示をしていくということの意味や気持ちを改めて考える機会をいただきました。

――現在までに何回ほどお手伝いに行かれましたか。

14～15回くらいお邪魔させていただきました。

――写真展関連でない活動の参加はありますでしょうか?　参加されている場合は写真展と比べ、変わったことはありましたか?

写真展以外はスケジュールがどうしても合わず…なくなく断念していました。両方とも自主練ですが、常総のTシャツ工場に数回と石巻の小渕浜に1回ほど行きました。

変わったことは「体を動かして作業！」という感じで清々しかったです！

それと、地元の方のお話や現地を少しでも見られるということはどちらとも共通して良かったと思いました！

——とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

麻木さんが今も各地に「3.11からの手紙/音の声」を届けてくれていることですね。

それに加え、各地の展示スペースやギャラリー、幡再のみなさんの愛と優しさが素晴らしかったです。

宮城のほかにお手伝いに参加できた福島空港の皆さんの愛情も素晴らしすぎました！！

——幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

嫌な経験はありませんが、常総や石巻の作業では「ちゃんとやり通すぞ！」と思ったり、展示ですと、搬入・搬出を無事に終えられるか、物販販売などで自分がまわりに迷惑や不快にさせていないか…という心配はありました。

——幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

幡再の活動に初めて参加したときは、とても緊張して行ったのですが、みなさん気さくで楽しくテキパキと作業も進めることができて、少しの時間でしたが参加できて良かったです！

そして、自分で見に行くということの大切さを学べました。

それがマイペースであっても、自分が行けるときに行ってみようと思いました。

——これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

期待…なんだろう…難しいですが…。

今も各地で災害にあわれた地域のことや活動を発信してくれていることにとても頭が下がります。そして感謝です。

——読者に一言あればお願いします。

麻木さんが今も各地に【3.11からの手紙/音の声】を持って行ってくれております。

そして九州での災害のことも写して行動してくれております。

麻木さんの魂のかたまりの“写心”展、見に行ける方は是非！

「『いつものように』変わらず、そこにあってほしいです」

亮子
茨城県出身
／東京都在住
主婦

2015年9月、関東・東北豪雨被害により故郷を水害が襲い、心を痛めた亮子さん。
その後さまざまな巡り合いで辿り着いた石井麻木さんとその写真たち。
それからの出会い、触れ合いを話してもらいました。

——幡再を知ったきっかけを教えてください。

MAN WITH A MISSION（愛称：マンウィズ）です。マンウィズを知った直後に常総市の水害被害があり、常総は5年間通った勤め先がある場所でしたので、ニュースを見て変わり果てた景色にショックを受けました。

トーキョータナカさん（Hatasai Magazine Vol.7 P,34）のTwitterから幡再を知ったと思います。

——石井麻木さんの写真展のお手伝いを知ったきっかけを教えてください。

幡再のTwitterですね。

——お手伝いに行こうと思ったきっかけを教えてください。

麻木さんはチャンスク（一般社団法人F-WORLDによる福島インドアパークプロジェクト「CHANNEL SQUARE」）でお会いして、カメラマンさんなんだと初めて知りました。

恵比寿で行われていた「15周年の写真展【15years】」の写真展に行ってファンになりました。その後、幡再で新宿の写真展のお手伝い募集があり、参加しました。

——現在までに何回ほどお手伝いに参加されましたか。

新宿、福島空港、仙台、盛岡、大阪の5回ですね。

——写真展関連でない活動の参加はありますでしょうか。

初めて参加した活動は、茨城県常総市にあるTシャツ工場です。その後、若宮戸（茨城県常総市の地名）の石塚邸にも行きました。

出展のお手伝いは、チャンスク、新宿ロフト、ベイキャンプ、うづくしま福島、猪苗代でのソーラーパネル積み込みなど参加させていただきました。

——各地での活動と写真展を比べて、変わったことはありましたか。

写真展も力仕事もありますが、Tシャツ工場と若宮戸での活動はかなり体力を使いました。

写真展は作品を大事に扱うので、写真に手を触れないように大切に運びます。開催日が決まっているので、時間との勝負になります。展示の場所、方法が会場ごとに違い、集まったみんなで知恵を出し合い、活動終了が夜中になることもありました。

写真にシールを貼る細かい作業は、「私の仕事です」ってくらい好きなお手伝いです（笑）

——とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

麻木さんのお手伝いは、設営、出展、撤収と種類もあります。その時々でたくさんの方に会えること、福島空港と盛岡で一緒になった方と、常総Tシャツ工場FINALで会えたことはうれしかったです。

大阪は初参加の方が多くて、間に合うのか心配だったけど、みんながアイデアを出して、とにかく一番明るい現場で、設営完了は拍手しながら笑っていました。

——幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

正直、いろいろあります。性別、年齢、幅広く全国から集まりますから、逆に私も何回か参加しているとつい、ワイワイしちゃうので嫌な思いをさせてしまって方もいるかもしれませんので、反省しています。

——幡再の活動に対する想いがあればお聞か

せください。

この前までは多くの方に、参加してほしいと思っていました。

阪神大震災や東日本大震災、各地を襲う水害、災害…。被災された方々には、その場に行くこと、写真を見ることも辛く感じる人がいることを幡再の活動で知ることができました。

幡再の活動に参加して元気をもらっている人も沢山います。

これからも参加したいです。

――これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

「いつものように」変わらず、そこにあってほしいです。

――読者に一言あればお願いします。

活動に参加して思ったことは、なにも難しくなかったことです。参加するメールを送ったときはドキドキでした。ですが、みんな最初は1人ですし、そして出会う方はみんな優しいです。

人によって、きっかけはいろいろだと思います。私はマンウィズから幡再、幡再から麻木さん出会えました。人と人との繋がりに感謝しています。

「不慣れだとかわからないとか、そんなことすら越えてゆける」

藤田麻衣子
福島県出身
／福島県在住
介護士

2011年3月11日を境に飲食業から「本当に弱い人を助けられるようになりたい」と思い、介護職に転職した藤田さん。
幡ヶ谷再生大学との出会いとそこで出会った仲間たちについて訊きました。

――幡再を知ったきっかけを教えてください。

最初は音楽で知り合った友人が、幡再の活動に参加していたのがきっかけです。興味を持って自分から調べたのは少しあとになります。

――石井麻木さんの写真展のお手伝いを知ったきっかけを教えてください。

Twitterで募集を見ました。もともと活発に活動していた友人から知らせてもらいました。福島で麻木さんが写真展を開催してくれる、それだけで凄くすごくうれしくて、しかも幡再でお手伝いできるなんて！って、とてもうれしかったのを覚えています。

――お手伝いに行こうと思ったきっかけを教えてください。

全国たくさんの方々の、チカラや気持ちや笑顔が集まる素敵な現場でした。

――写真展以外の活動は写真展と比べ、変わったことはありましたか?

石巻市南境の団子さし作り、常総市のTシャツ工場、イベント・フェスでのブース出展、いわき生木葉ファーム、小渕浜みかん公園、などに参加しました。

それぞれ雰囲気や内容に違いはもちろんありますが、麻木さん写真展に関しては、とにかく幡再生の創意工夫が凄かったのを覚えています。困ってもピンチになっても必ずみんなでどうにかカタチにする。

しかもすごくいい状態で。

麻木さんに対して、「とにかくこの人がやりたいこと、伝えたいことをきちんと見て感じてもらえる場所をつくるんだ！」っていう想いがすごく強い現場だなと思いました。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

たくさんの素敵な幡再生と知り合えたことですね。

お客様と麻木さん、幡再生の気持ちのやり取りの現場に立ち会えたこと。

福島は2011年3月11日以降ずっと、「してもらう立場」だったけど、福島のわたしたちが設営、物販、撤収とお手伝いすることでやっと、小さくとも「恩返し」ができたような気がしました。

それがいちばん嬉しかったです。

あとは、福島空港ロビーでの開催だったので、「石井麻木」も「幡ヶ谷再生大学」も知らない方々に見ていただいて、お話する機会を持てたこと。

「あのときのことを話す」こと自体が少しむずかしくもあるこの福島で、麻木さんの写真たちが福島のひとたちの心をやわらかく溶かすのを感じて、「ありがたいなぁ」と思いました。

――幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

ありません（笑）

不慣れだとかわからないとか、そんなことすら越えてゆける。集まる目的がハッキリしていて、「知恵を絞って汗かいて一緒にやろうよ！」っていう人たちが集まっていると思っていますので、どこの現場に行っても勉強になるばかりで、嫌な思いはしたことがありません。

――幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

わたしは震災後、郡山にずっといたのに何もできませんでした。

仕事が忙しいのを言い訳にして、いわき市にさえ行かなかったんです。

本当は、無力な自分に直面するのが怖いだけだったのに…。幡再は、「まず人間復興だ」って言ってくれたんです。

立派な人間だけが現場に行くんじゃなくて、自分の復興のために現場に行く、それでいいんだと。

「行動だけが現実」と教えてくれたのは、幡再とBRAHMANでした。

郡山の避難所でみた、優しくて我慢強くて、そしてとても弱い立場になってしまうお年寄りを、どうにか助ける勇気がほしくて介護に転職しました。

幡再には、「できないと思っていた自分を超える」きっかけとチカラをもらっています。

――これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

幡再生はみんな、気持ちがまっすぐだと思います。

大好きな音楽から幡再を知って、活動する人がほとんどだから、とてもまっすぐ。

「参加しづらい」「ひとりではちょっと…」って最初は誰でも思うかもしれないけど、そんな人たちをいつでも「一緒にやろうよ」って迎え入れてくれる。

そんな、まっすぐな場所であってほしいな、と思います。

――読者に一言あればお願いします。

きっかけは小さなこと、踏み出すのはたった1歩、半歩でもいいと思います。

私がそうでしたから…。

あとは、現場の仲間が勝手に引きずりまわしてくれます（笑）

この場をお借りして、「ありがとうございます！」と出会ったみなさんにお礼を言いたい気分です（笑）

そして、まだまだいろんなことが山積みなこの国ですから、できる範囲で、ほんのちょっと無理をして、現場を見る、感じることを続けて増やしていきたいです。

これからも、よろしくお願い致します。

「笑顔が見たくて活動に参加している部分もあります」

森 裕希子
福岡県出身
／福岡県在住
介護福祉士

福岡県から福島県で行われた石井麻木さんの写真展を数日手伝い、
それから南阿蘇と朝倉に足繁く通う森さん。
「大きな車に乗れたら土砂も一気に出せるかな」と中型の免許も取得し、
重機操作の講習を受け見事に取得。
少しの時間が空けば活動に駆けつけてくれる行動力の源泉を訊きました。

――幡再を知ったきっかけを教えてください。

東日本大地震のあと、なにもできずにいた自分がいて、自分なりにいろんな活動を検索していたとき、音楽フェスで幡再の出展ブースを見たり、好きなアーティストのTwitterのリツイートしていたのを見て知りました。

――石井麻木さんの写真展のお手伝いを知ったきっかけを教えてください。

Twitterを見て知りました。

――お手伝いに行こうと思ったきっかけを教えてください。

3.11に近い日に、福島県である写真展の手伝いに興味を持ちました。

写心（＝石井麻木の独特な表現で写真のこと）をみて感じることに意味があると思い、すぐ勤務の調整をして行こう！と決めました。

――現在までに何回ほどお手伝いに行かれましたか。

福島、福岡、京都、広島、芋煮会、宮崎ですね。

――その後、写真展以外の活動にも参加していますね。写真展と比べ、違いがありましたら聞かせてください。

南阿蘇では旅館の荷物出しなどに行きました。朝倉の作業は現在も行っています。

現場では、写真展とは違う地元の人やいろんな出会いと感情があります。また考え方やどう動くか、幡再生との連携や達成感、そして笑顔などいろいろ学んでいます。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

私の中では、したくてやりたくてやった当たり前のことなども、ひとつひとつ喜ばれることです。福島行った際は「風評被害があるのに行きたい！って思って来てくれてありがとう」と言ってくれました。

現在行かせてもらっている朝倉でも「偉いし感謝しかない！！」と言ってもらえます。そうおっしゃっていただくその笑顔が見たくて活動に参加している部分もあります。

みなさんが少しずつ心を開いて前向きになり、笑顔になっていくことが、うれしいですね。

――幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

とくにありません。

――幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

『人間として気高く生きる道を選択します』（幡ヶ谷再生大学の理念）の言葉を見たときに、自分の人生は楽な方を選んだり困難を人のせいにしたり、何かあれば無理だと諦めてばかりでした。

そんなとき出会った音楽や幡再で、自分の進むべき人生にとって大きな転機となりました。自分の目で見なきゃわからないこと、自分を信じてどう動くかで変わること、もっとできるはずとあきらめない気持ちを持つこと。

いくつも教えてもらうことが多く、この場所に踏み込む勇気を持って良かったと感じました。

――これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

私のように救われ、笑顔になれる人が増えることを願います。

これからも、いろんなことが、気持ちが繋がっていくことを期待しています。

――読者に一言あればお願いします。

ボランティアに参加することに、ハードルが高いと思いあきらめている人も多いかもかもしれませんし、私も同じ立場にいました。

しかし、幡再は参加しやすく実際に現場に行くと、温かく迎えてくれる地元の方々や幡再生、そしてユカリさんがとびっきりの笑顔で待っとってくれます！ そこから、どっぷり時間あれば現場に向かう自分がいると思います（笑）

自分で見ることができないから石井麻木さんの写心を通して感じた東北。

それでも足りず、現地で見たい！ と想った感情。

そこから始まった幡再生としての生活。

決して孤独を感じず、1人の人間として活動し、考える場所を与えてくれる時間。

なにかの理由で引っかかり、参加に対して尻込みしているのなら、ぜひ一歩踏み出してほしいです。そこには1人じゃ決して見ることができなかった世界が拡がっていて、今までとは違った視野や考え方を教えてもらえるので、肩肘はらず参加していただきたいです！

「あの夜は『奇跡の夜』だったなぁ」

橋本理沙
宮崎県出身
／福岡県在住
トラベルフロント マネージャー

「紺屋2023」という建物の管理・運営、
建物内にある「konya-gallery」の管理をする橋本さん。
石井麻木さんとの出会い、自社で行われた写真展、
幡ヶ谷再生大学と接して感じたことを訊きました。

――幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

石井麻木さんの展示・設営の際に初めて知りました。

麻木さんと事前の打ち合わせの時かなんかに「搬入や設営の人員はどうされるんですか？」と聞いたら「多分ボランティアの方々が10人くらい、来てくれるかな」と言われて…。

そのときはもちろん幡再のことは知らなかったので「声がけしてボランティアの皆さんが10人くらい来てくれるってどういうこと？」「そもそもボランティアの皆さんとは？」「石井麻木さんって何者なんだろう？」と「？」がいっぱいでした（笑）

その後、設営の際にユカリさんに色々お話を伺い、展示でも幡再生の皆さんからもいろんな話を聞きました。

こんな素敵な活動を知ることができてよかったなと思っています。

――福岡の紺屋ギャラリーでの写真展開催の経緯はどのようなものだったのでしょうか。

以前「紺屋ギャラリー」で写真展をしてくださったGOOD ROCKSの福本さんのご紹介で、麻木さんが訪ねて来てくださったのがはじまりでした。

その日はギャラリーが休みの日で、私もお休みでした。ですが、たまたま荷物を取りに寄った際に「突然ですが、今から会場見せてもらいに行っても良いですか？」と電話があって。それが麻木さんでした。

それから少ししてギャラリーに来られて、「あーいいですねー。机どのくらいありますか？写真はどのくらい展示するんですか？」等々、とんとん拍子に話が進んでいった記憶があります。

もしあの日、私がギャラリーに寄ってなかったら、あの時間に麻木さんが電話をしていなかったら、下見はできていなかっただろうし、紺屋ギャラリーを使っていなかったかもなぁ、と思うとあの夜は「奇跡の夜」だったなぁ、なんて思います。

地味ですけど（笑）

――写真展期間中とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

嬉しかったことはたくさんあります。

たくさんのお客様に足を運んで知っていただくことができたこと、こういう機会を福岡で作っていただけたこと、麻木さんや幡再生の皆さんと出会えたこと、幡ヶ谷再生大学の活動を知ることができたこと、ですね。

【3.11からの手紙/音の声】から【15years】まで、とにかく麻木さんをはじめ、たくさんの人の想いが詰まった素敵な期間でした。

毎日、まるで大家族のようにご飯を作ってみんなで食べたり、「おかえり」と「ただいま」が飛び交ったり。温かい出会いに本当に感謝です。

「知ることしかできないということは知ることならできるということ」

知っていたつもりで知らなかったこと、分かっていたつもりで分かっていなかったこと、日常に追われて忘れそうになっていたこと。

いろんなことを思い、考えさせてくれた写真展だったなぁと思います。忘れないこと、知ることの大切さを改めて考えさせてくれた期間でした。

――幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

こんなに素晴らしい活動があることを、もっといろんな人に知ってもらいたいなと思っています。

galleryの関係でなかなか現場での活動に参加することはできないのですが…この場所に来てくれる方に幡再の活動を伝えていくことはできるかな、と思っています。

あとは、みんなで集まりたくなったらいつでもご飯作って待っているよ、という場所で居れたらな、と（笑）

――これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

これから更に、広がっていけばいいなと思っています。

――読者に一言あればお願いします。

写真展を通して幡再のことを知って、Twitter等で復興再生部などの活動をチェックするようになりました。

イベントのお知らせと共に、こういった活動があること。

動いている方がいること。

たくさんの方に知ってもらえる場所で居れたらな、と思っています。

「こんな自分でも何か お手伝いができることがあれば…」

箭内 聡
福島県出身
／富山県在住
航空運輸業

福島空港勤務時代、石井麻木さんの写真展開催に尽力していただき、
開催中も多くの空港スタッフを引き連れ、お手伝いをしていただいた箭内さん。
幡ヶ谷再生大学との出会い、福島空港での現状を話していただきました。

――幡再を知ったきっかけを教えてください。

記憶が定かではありませんが、ARABAKI（ROCK FEST.宮城県みちのく公園で行われる音楽フェス）での出展ブースだったと思い

ます。

――そのときどんな印象をもたれましたか。

印象としては、出展ブースの方が非常に熱心にご説明をしてくださり、とても共感できたことが印象として強く残っております。

――石井麻木さんの写真展が空港での開催を知ったきっかけを教えてください。

石井さんがTwitterで開催場所を探していらっしゃる投稿を見て、こちらから「福島空港での開催はいかがですか？」とご連絡をさせていただきました。

――お手伝いをしようと思ったきっかけを教えてください。

こんな自分でも何かお手伝いができることがあればと思ったのがきっかけになります。

――転勤が決まったとき、幡再生から送別会をやってもらったそうですね。やはり感慨深いものはありましたか?

本当にありがたく思いました。皆さんにとっても空港で思い出は、強く残っていらっしゃるとおっしゃってくださり、本当にうれしく思いました。

――それ以外でもうれしかった想いがあればお聞かせください。

他のイベントでも声をかけてくださり、仲間に入れていただいた気がして、とてもうれしかったです。

――幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

ございません。

――幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

とても共感できる活動をされていらっしゃって、本当に頭が下がります。

学長やユカリさんの想いが手に取るように分かります。

――これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

期待をしなくても期待以上という気がしていると思います。

――勤務されている福島空港では2011年3月11日以降、放射線量の問題など、度重なる問題が発生しているとお聞きしています。

その環境下で勤務中に心がけていることがあればお聞かせください。

空港自体の線量は高くはありませんが、国際定期便の運休が長期間続いております。また教育旅行を含めた空港を利用した観光などのインバウンド旅客の減少もあります。

「どのようにしたら福島が元気になるか」「何をすれば福島にたくさんの人が来てくれるか」をいつも考えていました。

――読者に一言あればお願いします。

「想う」ことで「つながる」、「考えて動く」ことで「できる」ということを幡再のみなさんに教えていただきました。

これからも近くにいさせてください。

今回仕事の都合で地元から離れましたが、離れてみるとより福島や幡再の皆さまが温かいことを強く感じます。

これからも宜しくお願いいたします。

「『なんてかっこいい人たちなんだろう』と」

石井麻木
東京都出身
写真家

2011年の東日本大震災から東北を写しつづける石井麻木さん。
2017年には全国各地で写真展を開催し、
幡ヶ谷再生大学も設営や撤去のお手伝いをさせていただきました。
石井さんにとっての、写真展の継続、全国各地での出会い、
幡ヶ谷再生大学を話していただきました。

――現在のお住いを教えてください。

東北にいすぎて故郷も自宅も東北なのでは？と思うことが多々ありますが東京です。

今は各地で写真展をおこなっているので月に3日くらいしか自宅にいませんが東京です。

――写真家としてキャリアは何年目でしょうか。

17年目になります。

――幡再を知ったきっかけを教えてください。

東北ライブハウス大作戦からだったと思います。

「なんてかっこいい人たちなんだろう」と。

――写真展を幡再と設営することになった経緯を教えてください。

2012年から2016年までは各地の知人や友人、現地の方々にお手伝いしてもらっていました。

2017年のお正月に、自身の15周年の写真展【15years】と 東北の6年間を伝える写真

展【3.11からの手紙/音の声】を広島クラブクアトロで同時開催させていただくことになり、わたしの写真展では過去最大規模だったので、とてもじゃないけれど体力も人手も追いつかなくなってきていたので、ユカリさんに相談させていただきました。

そうしたら「なんでもっと早く言ってくれなかったの！」って逆に怒られました（笑）

もう、その言葉には愛しかありませんでした…。

本当に感謝しかありません。

——最初は、戸惑いはありましたか?

無償で手伝ってもらうことに、「いいのかな」という思いはありました。ですが、どの地でも「それ以上のものをもらえた」と言ってもらえて、すごく嬉しい言葉でした。

一度参加していただき、その後も何度も何度も手伝ってくださる方が多いことが、とても幸せです。

——現在までに写真展の開催は何回を数えますか。

幡再に募集をかけて入っていただいたのは、2017年だけで広島、新宿、福島空港、仙台、福岡、盛岡、大阪、宮崎、喜多方の9回です。

——なぜ開催を続けているのでしょうか。

「写して伝えてほしい」という現地の方の

声がずっと心にあり、毎月あたらしい写真が増え、いままでといま、そしてこれからを、伝えられるうちに伝えたい、届けたいものがあるから。

知ることしかできないというのは、知ることならできるということ。みてきたもの、写してきたもののほんの一部かもしれないけれど、少しでも知ってほしいです。

——写真展の内容をお願い致します。

東日本大震災直後から毎月写してきた東北の現在までの様子と、東北の地で鳴らされた音の写真たちを、時系列で短い言葉とともに展示しています。

写真展にもずっと力を貸してくださっているTOSHI-LOW（学長）さんが「みんな麻木の写真展見てガーンってなればいい」と言ってくれた意味が、見てくださった方々の感想が届くたびに、より深く伝わってきます。

すごくうれしくて重い言葉でした。ずっと響いています。

——写真展を続けてきたなかで、とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

本当にすべて宝物のような時間と空間です。規模でいえば大晦日の設営で釘打ちをしながら年越しをした、過去最大規模の開催場所、広島クアトロと、3月11日を挟んで開催した、なにもかもが愛だった福島空港。

ここでの日々は一生忘れられません。さらに繋がって、拡がりました。

ただ、どの地での幡再生との出逢いもすべて大切すぎて、「出逢ってくれてありがとう」の気持ちがとにかくおおきいです。

——幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

ひとつもありません。毎回、感じ、学ばせていただいている、とても大切な時間です。

——幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

数々の各地の活動に参加されている方、写真展を手伝ってくださった方、ひとりのこらずあたたかいひと。

気持ちだけで動いている、かっこいいひとばかり。

写真展という私にとっては体の大部分、心の大部分のような何よりもたいせつな空間を一緒につくって守ってくださり、感謝しきれないくらいのありがとうでいっぱいです。

——東北だけでなく、さまざまな被災地に赴いている麻木さんの活動の源泉はどういったものなのでしょうか。

考えるより先に体が動いてしまうのです。

たいせつなひとの、たいせつなひとは、自分にとってもたいせつなひと。辿っていけば全員繋がっている。本気でそう思っているので、動かない理由がなかっただけです。

通い続けるにつれ、帰ってきてーって待っていてくれる子どもたち、仮設住宅でおにぎりをたくさん作って待っていてくれる、会いたいひとたちに会いに行っている気持ちが大きいです。

——写真展開催中、全国の幡再生から想いが記された「本」を渡されたようですね。どのような内容のものだったのでしょうか。

まる1年間まわったふたつの写真展同時開催の旅のファイナル最後の地、盛岡での最終日、すべての撤収を終えたときに、幡再生さんたちから一冊のアルバムが手渡されました。開いた瞬間から涙がとまらなかった。

1年間まわってきた全国各地の幡再生さんたちや仲間たちや会場のスタッフさんや関わってくださったアーティストさんたちまで、それぞれからの手書きメッセージと各会場での思い出写真で埋め尽くされていました…。

何度開いても涙が止まらなくなる一生涯の宝物、お墓にいっしょに入れてください。

——読者に一言あればお願いします。

写真展【3.11からの手紙/音の声】は、東北の写真たちと共に熊本地震と九州豪雨災害地のパネルも増え、これからもできる限り全国各地に持っていくので、写真もどんどん増えていきます。どこかで「あの日からの手紙」をうけとっていただけたらうれしいです。

もう、わたしひとりの写真展じゃなくなっています。

どれか一枚でもいい、誰かのなにかのきっかけになれますように。

【15 years】
and
【3.11からの手紙 / 音の声】
START
11:00
18:30
19:20
20:00

JOSO-FINAL

2017年7月22日、東日本豪雨災害・常総市支援活動第25回が行われ、「Tシャツ再生大作戦」の活動の地・Tシャツ工場で「FINAL」を迎えました。
茨城県地域情報フリーペーパー『常陽リビング』（常陽リビング社刊）に「ご褒美ライブ」と掲載されたシークレットライブも行われました。

長野剛知

多くのアーティストが登壇する中、
工場のオーナー・長野剛知さんもその場所に立ちました。
そこで「工場が水浸しになりもうダメだと思ったが、
学長から『どんなになったTシャツでも絶対なんとかする』と言われ、
本当に力が出た。いろんな人が助けに来てくれ、
いろんな力をくれました」と話してくれました。
およそ2年間の活動の日々、FINALの日のことを振り返ってもらいました。

――FINALの日はどのような作業を行ったのでしょうか？

建物内の最後の掃除をしてもらいつつ、Tシャツにシルクスクリーンでプリントするワークショップですね。

――写真で振り返っても工場内が心なしか明るくなったように見えます。長野さんの印象はいかがでしょうか。

風景が戻り、懐かしいなと思いました。

――FINALの日はどのような一日でしたか。

参加された皆さんにとって良い一日であってほしいと思っていました。

――FINALが終わり、工場内に入ったときに感じた想いをお聞かせください。

災害が起こり、水が引くのに3日かかったのでその間に色々考える時間があり、その時に人生を変えようと思っていました。

水が引くのをスタートにマイナスだったものを出来るだけプラスにしようと。

なので「さあ、これからだ」と思いました。

――活動開始から、およそ2年間。どのような日々でしたか。

2年間のその時々で違っていたとは思いますが、結論は幸せになりたかったんだと思います。

――読者に一言お願い致します。

継続は力なり。

この一言に尽きると思います。

携わってくださった皆さまに、この場を借りて改めて御礼を申し上げます。

「今まで、人に『ありがとう』って言ってもらえる生き方をして来なかった」

Xmas Eileen DJ

熊本地震が起こると、被災地に支援物資の運搬、
到着すると現地で活動をするなど現在でも足繁く通うXmas Eileen DJさん。
幡再との出会い、仲間への感謝、復興の“在り方”を話していただきました。

――出身はどちらでしょうか。

LAです（笑）

――現在、どちらにお住まいでしょうか。

ベニスビーチです（笑）

――幡再を知ったきっかけを教えてください。

ふとしたきっかけでタケ兄（細美武士P,117）と知り合って、タケ兄の紹介でTOSHI-LOWくん（学長）を紹介してもらいました。TOSHI-LOWくんが着ていたTシャツに「幡ヶ谷再生大学」と書いてあって、「TOSHI-LOWくんは幡ヶ谷再生大学っていう大学出身なんだ」と思ってました（笑）

――熊本での幡再の活動を知った経緯を教えてください。

熊本で幡再の活動を知ったというか、東北でも活動していることは知っていました。僕が本格的に熊本で動き出したのは、「某オオカミさん（Hatasai Magazine Vol.6 P,34）」に、はっちゃんという熊本での活動の中心人物的な方を紹介してもらってからですね。

――友人が経営されている大阪府にある飲食店では熊本地震発生後、物資を募ったり、募金活動を行なっていましたね。大々的に動かれていたのはXmas Eileen DJさんだとお聞きしています。その想いをお聞かせください。

少し長くなるんですが阪神大震災が起こったとき、僕はまだ凄くガキのころでした。2011年の東日本大震災のときは、事情があってすぐに動くことができませんでした。

何をしたらいいのかも分からない立場でした。

そんなときに熊本地震が起こって、でも2011年のとき同様に何をしたらいいのかも分からなかったので、東日本大震災の際に動いていてその活動を続けているタケ兄に相談したんです。

そうしたら、「とりあえず物資を集めよう」となりました。タケ兄のアドバイスをもらいながら、みんなが持ってきてくれる物資を取りまとめて梱包したり、気がついたらいろんな人が力を貸してくれて本当にありがたかったです。

そんなとき、空き缶を集めてまわっているおじさんがそんな僕たちのことを見ていきなり、「これ、少ないけど募金にして」って500円玉を渡してきたんです。

それで「責任を持たないと」、と思いました。

――熊本での活動が初めだったのでしょうか。

東北に物資を持って行かせてもらったり、「石巻へい輪プロジェクト」のミサンガ『櫂』とXmas Eileenでコラボさせてもらったりしていましたが、熊本では地震以降になります。

――活動に行こうと思い立ったきっかけを教えてください。

全国から募ってくれていた物資を取りまとめているときに、手伝ってくれる人たちの姿を見て、「これは俺が現地に直接持って行こう。まず、自分が行動としてできるのはきっとこれだな」と決めました。

現地に行って、自分の目で見ないとわからないこともあるとも思っていましたし。

でも、僕1人では本当に動けないわけで、賛同してくれる人たちがいてくれるからこそなんです。

――初参加のときの感慨を教えてください。

南阿蘇で倒壊寸前のお宅の家財道具を運

ぶという活動のときどきに熊本の解体業者の人が下見に来ていて、少しお話しをするタイミングがあったんです。

そのときに「なぜ、費用もかかるのにボランティアに来ているのか?」と聞かれました。

仕事だったら、利益を求めるのはしょうがないと思う。でも、こんなときだからこそ、もっと人間臭くていいんじゃないかなって。

災害の被害に遭われた人は、前を向きたくても向けない人もいると思います。

だからこそ、その地の人、県の人、同じ地方の人がもっと目を向けていてほしい。

傍観するのではなくて、1日でも、いや半日でいいから少し時間を作って、災害にあった土地に行ってほしい。報道や噂ではなく、自身の目で見て感じることがあると思うので。

先日、石井麻木（P,107）ちゃんとタナパイ（MAN WITH A MISSION・トーキョータナカ）に呼んでもらって、宮崎で「DJ大作戦」に行ってきました。僕はそのDJ大作戦を通してそういうことも九州の人たちに伝えたかった。

――とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

「ありがとう」と言われることですね。

僕は今まで、人に『ありがとう』って言ってもらえる生き方をして来なかったんです。やりたいことをやって、自分本位で生きてきました。

だから、熊本での活動もボランティアっていう感覚はなくて、僕が現地で見て感じたことをやっているわけです。

それなのに現地で被災した人に「ありがとう」って言葉をかけてもらえた。それから僕は少し人に優しくなれたような気がしています。

それから僕がこうやって被災地で活動できているのも周りの仲間、家族、Xmas Eileenのメンバーがいてくれるから。たとえば、僕が被災地で活動しているときに他のメンバーは曲を作ったり、プロモーションに行ったりしてくれているから僕が動けています。

感謝ですね。

――幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたらお聞かせください。

学長のTOSHI-LOWくんは優しい（笑）

ユカリさんは優しいけど、なんか怖い（笑）

嫌な経験はないですね。

――複数回、活動に参加されたと聞いています。その情熱はどのようなものだったのでしょうか。

情熱というのか、僕がやりたいと思ったことを実行させてもらっていて、それに本当に協力、賛同してくれる仲間がたくさんいるということです。

――幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

ホントに素晴らしいと思います。震災があった瞬間はいろんな人たちもいて、ボランティアさんもいっぱいいました。1年が経ち、2年、3年と経って行くうちボランティアさんも少なくなってきています。

そんな中で、幡再の人たちは被災地に足を運ぶことをやめない。

僕も続けて行きたいと思います。

――これから幡再に期待することがあればお聞かせください。

期待も何もこれからも宜しくお願いします!

――読者に一言あればお願いします。

何をしていいのかわからない。自分は何もできないと絶対に思わないでほしいです。

現地で石ころを1つ撤去するだけでも、笑顔を見せるだけでも復興の1歩になると思います。

ゆっくりでいいし、震災が同じ日本、地球で起こったということを忘れないでください。

「気持ちの良い連中といるのは俺の人生最高のご褒美です」

細美武士

2011年の“開校”から多くの活動に参加し、
2017年7月には自身がボーカル・ギターを担当する『MONOEYES』の
2ndアルバム『Dim The Lights』のブックレットに
「幡ヶ谷再生大学」の名を記した細美武士さん。
幡再との出会い、人との繋がり、そして未来の在り方を話していただきました。

――出身地はどちらでしょうか。

ざっくり言うと千葉です。

――現在、何県にお住まいですか?

東京都在住です。

――幡再を知ったきっかけを教えてください。

レギュラーでやらせてもらっているBay FMのラジオ番組に、SPC Peak Performance代表の西片明人さんをゲストとして迎えた際、幡ヶ谷再生大学陸上部のお話を伺ったのが最初でした。

そのときは本当に「そういう大学があるんだ」と思ってました（笑）

――幡再発足から、これまで多くの活動に参加されています。初参加のときはどのような心持ちだったのでしょうか。

自分の場合は、幡再の活動に参加するというよりも、小渕浜だったり東北ライブハウス大作戦だったり、常総にしても熊本にしても、

周囲の人との繋がりが拡がっていった結果、現場が重なっていったという感じです。

それは今でもそうですね。

――2016年4月14日、熊本地震が起こると陣頭指揮を執り、すぐに多くの仲間たちと行動を起こされたと聞いています。その衝動はどのようなものだったのでしょうか。

東日本大震災が起きてからの5年間に、それまでとは違うさまざまな人の繋がりが生まれました。「自分たちにできることは何だろう」。その想いで繋がっていった人たちです。

そのネットワークはいつの間にか全国に拡がっていて、熊本地震が発生した際も当たり前のように各々が自発的に動き出しました。最初に動き出したグループを中心に、雪だるま式に参加してきてくれました。

その人たちを地域別にまとめ、ウェブでの情報開示や支援物資の募集、また現地で錯綜する情報の真偽を確認することなどを通じて、現地で動く仲間たちの活動効率を最大化することを目標に、バックアップをするべく動き出したのが、東北ライブハウス大作戦の東京隊でした。

tactics recordsを中心に、写真家の三吉ツカサ、自分たちの会社TRIBUTEもこの活動に合流していきました。ある程度集合体が大きくなってきたころ、各団体の代表が意見を出し合い、今回の活動はNBC作戦の屋号で行うことが決定しました。

そういう流れなので、実は誰が陣頭指揮を執ったわけでもないんですよね。2011年の東日本大震災以後、それぞれの地域で継続的に復興支援を行っていた多数の団体が横並びで合流していったこと、これは2011年以前には考えられなかったことでした。

――その年の4月は、TRIBUTEのスタッフさんも総出で毎晩ほぼ徹夜で、被災地と密に連絡を取り合っていたと聞いています。そこまで骨身を削って行えた源泉はどのようなものだったのでしょうか。

災害ボランティアが事故を起こすこと、怪我をすることは一番避けなければいけないことでしたので、現地で実際に物資を運んでくれている連中に、とにかく無理をさせないこと。

そうは言ってもみんな気持ちで動いているので、「僕は寝ないでも大丈夫です」みたいな連中ばっかりなのですが、不足している物資の情報が途絶えて、闇雲に動けないタイミングを拾い、みんなをなるべく休ませたかったんだと思います。

その間に「大丈夫、なんか続報来たら起こすから」って言ってあげられたらいいんじゃないかな、と考えていました。

――その最中、うれしかった想いがあればお聞かせください。

（三吉）ツカサも自分も、数日寝てないような状況で自分の撮影現場で会ったんですよね。お互い、目を真っ赤にして。でも表紙になる雑誌の編集者とか、レコード会社のスタッフはそんなこと知らないわけじゃないですか。

そんな中、二人で目を合わせて、「じゃあ撮影しよっか（笑）」みたいなこと言ったんですが、そのときの不思議な連帯感は今でもよく覚えています。

あと、災害の中なので嬉しかったというのとは少し違うんですが、小規模な避難所で毛布が大量に不足していたとき、大規模な避難所に行政が配布して余っていた毛布を、その夜のうちに移動させられたときですかね。

少なくとも何人かは、少しでも暖かく眠れ

るのかなと思いました。多方面から情報を集積していなければできなかったことだと思います。

――幡再での活動を含め、熊本に何度か足を運んでいますね。「震災後の熊本」を見たときの気持ちをお聞かせください。

災害に限らずなんでもそうだと思うんですが、やっぱり現地に足を運ぶことでしか分からないことは必ずあります。メディアからの情報では見えないことも多く、ましてやネットの情報なんてそれこそ真偽不明なので。

地震後に熊本に入ったときも、それを強く感じました。

――南阿蘇での活動を通じ、現地に多くの友人ができたと聞いています。友人たちの印象をお聞かせください。

逼迫（ひっぱく）した状況での行動には、その人の本質が表れると思います。

それは平時の印象とまったく違ったりしますよね。だから、そういう時間を共に過ごした仲間に対する信頼はとても大きいです。南阿蘇で出会った若い世代の男たちも、いい「漢」たちです。

――2016年2月に沖縄県にて行われた「幡ヶ谷再生大学復興再生部 Sakurazaka ASYLUM 特別公開講座」に参加され、翌日には辺野古、じんぶん学校、高江に行かれましたね。そのとき訪れた高江で2017年10月11日に事故（民間の牧草地に米軍のヘリコプターが不時着、炎上した。機体は大破）が起こりました。

沖縄県にはいまだ不透明で、根深い問題がたくさんあると思います。解決への道はいまだ果てしなく遠いと考えております。細美さんの認識はいかがでしょうか。

沖縄県の複数の島に、兄弟・仲間と呼べる人たちがいます。20年近い往来の中で生まれた繋がりです。実際に沖縄県で生まれ、暮らしてきた彼らの意見を聞くとき、外から覗いているだけの自分には想像もできなかった視点・目線に出会うことができます。

沖縄の基地問題は、安保の問題であり、核の問題であり、戦後レジームやパックスアメリカーナの存亡と紐づけて論じられるべき問題です。現代に生きるなら、俺たちは保守やリベラル、右や左、現実論と理想論という立場上の対立を脱却しないといけない。

それができない限り、過去を繰り返すのみで先に進めないと思います。そのためには、偏向性のない学術的リサーチと、派閥を越えた徹底的な対話が必要になるでしょうね。

でも、実はその第一歩は、居酒屋のたまたま隣に座ったグループとですら、始められることだと思っています。

――これまで幡再の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

子供たちと追いかけっこになると、全員で潰しに来るのはなんなんですかね？（笑）

――幡再の活動に対する想いがあればお聞かせください。

その活動はもとより、参加しているみんなから、いつも感動をもらっています。気持ちの良い連中といるのは俺の人生最高のご褒美です。

これからもよろしくお願いします。

――これからの幡再に期待することがあればお聞かせください。

未来は現在の積み重ねだと思うので、突き進んでください。

いつでも、馳せ参じます。

――読者に一言あればお願いします。

直接顔を付き合わせましたら、ぜひ、一献。

幡ヶ谷再生大学復興再生部

九州北部豪雨・福岡県朝倉市での復興支援活動

2017年7月5日から6日にかけて福岡県と大分県を中心とした九州北部で集中豪雨被害に見舞われました。甚大な被害を受けた福岡県を中心に、幡ヶ谷再生大学は被災直後の同7月から朝倉市を中心に活動を続けております。
放置された流木を「東北ライブハウス大作戦」の木札にするなど、活動は現在も進行中です。
引き続き多くの方の参加をお待ちしております。

幡ヶ谷再生大学復興再生部

岩手県・岩泉町復興支援活動

2016年8月に発生した台風10号は東北地方に甚大な被害を残しました。とくに岩手県・下閉伊郡岩泉町は災害後、復興が遅れていました。幡ヶ谷再生大学は地元の方の「声」を聞き、2017年7月に視察を行い、同10月に活動に着手。
いただいたご縁に心を寄せ、現在も活動中です。
引き続き多くの方のご参加をお待ちしております。

幡ヶ谷再生大学復興再生部

宮城県「小渕浜みかん公園」

2013年4月29日に公園作りに着手し、2014年1月に完成した「小渕浜子供広場」は同4月29日にお披露目会を行いました。その後2015年10月「小渕浜みかん公園」に改名。たくさんの想いが詰まった公園は2017年11月19日、その役目を終えました。2018年、幡ヶ谷再生大学はたくさんのご縁と出会いが生まれた公園に感謝の意を表します。

編集後記

今からおよそ450年前の戦国時代、乱世を制し天下人となった太閤・豊臣秀吉は人誑（たら）しで知られたが、その晩年は別人のように狂人となったのは、たとえ日本史に暗い方でも知っているはずだろう。

その狂人ぶりはすさまじく、どうやら現代でいう「パワハラ上司」だったようだ。気に入らない部下がいれば、遠方へ追いやり、ミスを犯せば死をもって償わせる天下人だったと歴史は示している。

のちに被害者となる佐々成政（さっさなりまさ）は1587年、九州征伐で武功をあげ肥後一国を与えられる。秀吉に急速な改革を求められた“新国主”は、肥後人の心を最後まで掴むことはできず、激しく抵抗され、ついには一揆までを引き起こす。

統治に失敗した成政は秀吉によって間接的に切腹を迫られ、この世を去った。古来、「肥後もっこす」として知られ、“外部”の人間を容易に受け入れない気質もまた成政を苦しめたことは想像にむずかしくない。

肥後は9世紀ごろまで「火の国」と呼称され、肥後の肥は当初「火」と書かれたのは無関係ではないだろう。肥沃（ひよく）な大地で育った気高い肥後人を統治することに手を挙げる者は少なく、秀吉は遠い親戚ではあるが親族にその任務を任せた。

加藤清正である。

のちに肥後人から絶大な信頼を獲得し、「清正公（せいしょうこう）さま」、または「さん付け」で呼称されるまでになる。清正がこの世を去り400年以上経った現在でも慕われ、その呼称は変わらない。

秀吉の死後、天下人になる徳川家康には別称があり「東照大権現」が著名だが、江戸時代には「東照神君」、「神君」、「権現様」として江戸の庶民たちに愛される。だが、江戸が東京に名を変えると共にその名で呼ぶ日本人はいなくなる。

しかし肥後から熊本に名を変えても、国主が加藤家から細川家に代わっても「清正公さん」の親しみは変わらず、400年以上を経た現代でも愛され続けている。本冊子作成中にも、地元の方から何度も聞いた名前である。

では、その「清正公さん」は肥後の国に何をもたらしたか。そのことは昭和の歴史作家、故・司馬遼太郎氏が『街道をゆく 3巻』（朝日新聞出版）で説明しているので借用したい。

「その領国に善政をほどこした者としては織豊期では丹波における明智光秀、近江における石田三成があるが、清正の場合はかれらよりすぐれていた点は、土木行政の面であった。かれはその独特の工法で農業土木をおこし、その治績はながく肥後平野に恩恵を残したといわれる」とある。

清正公は城作りの名人で知られ、治水工事にも秀でたこともあり、農地を広めて農業行政において飛躍的な成果を上げたとされる。ここまではどの戦国大名も行ったことだが、さらにこの工事に給金を民に与えたという。

現在の公共事業がそれにあたるが、戦国時代では珍しかったようだ。民を想い、民のための行政を行ったからこそ、肥後の人たちは古くから清正公を慕いつづけている要因の一つなのだろう。

では現在の我が国のトップオブトップの公共事業はどうだろうか。「地図に残る仕事」「想像　ホタルが棲む渋谷」「今日も未来をつくっています」「子どもたちに誇れるしごとを」。

どこかで聞き覚えのある4つのコピーを掲げた建設大手4社は昨年12月、リニア中央新幹線工事を巡る不正受注疑惑に関与した。その額9兆円。日本の建設業を支えるスーパゼネコン4社が揃い踏みした疑惑は、不正入札事件として扱われ、今後徐々に真相が明らかにされていくだろう。

人は変わる。変わらなければならないときは確かに存在する。何かを手にした人は、秀吉のように狂人になってしまうかも可能性を誰もが秘めている。この4社の歴史をみると1937年が最新となり最古は1840年と、清正の善政の歴史には遠く及んでいない。

だが、この4社が明治の近代化に貢献し、戦後の復興、日本の高度成長に大きく貢献したのは紛れもない事実だが、何かのきっかけで狂ってしまったのは我々も学ぶべき事柄だろう。

2016年4月に起きた熊本地震によって、熊本県と大分県に甚大な被害を受けた。幡ヶ谷再生大学としては4月に熊本入りし、6月から各地で活動を行なってきた。本冊子作成の折、掲載はできなくとも活動に携わってくれた多くの方の声を聞いた。

そのなかで本誌にも記載されている「手間返し」と「結」という言葉を恥ずかしながら初めて耳にした。「手間返し」とは、お金や物で返すのではなく、手間で恩を返す行為を指し、地域によっては「結」とも呼ばれるようだ。

幡ヶ谷再生大学・復興再生部は、これまでボランティアの皆さまの尽力によって活動してきた。給金を支払ったことはない。それでも“幡再生”たちは各々でコミュニティーを作り、友情を育んでいるのは微笑ましい事実として筆者は捉えている。

活動は、個人を呼び合えるように黄色のテープと白色のテープに名前をカタカナで書く。ある人は「（初参加の）白色のテープが恥ずかしかった」と言い「でも来てよかった。また参加したい。黄色テープになりたい」と言ってくれた方がいた。

これまでの冊子を読んでも、人見知りだった、不安だった、といった方も活動後には友人としてプライベートでも行動を共にし、その出会いに感謝する方々がいる。

徒党を組み、派閥を作り、他者を受け入れない狂人の話は聞かない。想いをもって活動に参加する同志を、黄色テープの幡再生が必ず受け入れてくれるだろう。現在は福岡県・朝倉、岩手県・岩泉で活動が続いているため、ぜひ足を運んで、その雰囲気を体感してほしい。

故・司馬遼太郎氏の死の前年に阪神淡路大震災が起こると、『世界にただ一つの神戸』というメッセージを書き、被災者を慰めた。「家族をなくしたり、家を失ったり、途方に暮れる状態でありながら、ひとびとは平常の表情をうしなわず、たがいにたすけあい、わずかな救援に、救援者が恥じ入るほどに感謝する人も多かった。この精神は、市民個々が自分の暮らしを回復してゆくことにも、きっと役立つにちがいない」と綴っている。

日本はいつどこで天災が起こるか分からない。だが、これまでの本誌の掲載者が語るように、危機に備え、清正公のように人を想う慈愛の精神さえあれば、救われる方々は自ずと現れるはずである。

幡ヶ谷再生大学の活動がその一翼を担えれば、と切に願うばかりである。

ご支援ご協力について

私達、幡ヶ谷再生大学復興再生部は音楽やスポーツを通じて繋がった仲間達、そして皆様のご協力のもと、長期的かつ継続的な復興支援を行なっていくことができます。現時点、当団体は専任のスタッフを雇用しておらずボランティアによる、少人数での運営となっております。そのなかであくまでも現地の連携を直接的にすること、個人、団体、自治体に関わらず、私達の力を必要とする場所へ確実な復興支援を目指していきます。随時、人手募集や物資の募集も行います。また皆さまよりご支援頂いた物資や支援金は当団体が責任を持って復興のために使わせて頂きます。

Text: 山口 努　**Edit:** 高橋 健（株式会社LIG/東北ライブハウス大作戦）
Design: 上條 慶　**Photo:** 石井麻木, KAZUYA KOHSAKA, Tsukasa Miyoshi（showcase）